

鏡水原遺跡

—那覇空港自動車道（小禄道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和3(2021)年2月
沖縄県立埋蔵文化財センター



調査区遠景



調査区全景（近世・近代期遺構完掘時）

卷頭図版

序

本報告書は、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所から委託を受けて平成30年度に実施した鏡水原遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

今回の調査は、那覇市街地及び周辺の渋滞緩和や那覇空港へのアクセス性向上を図るため整備される那覇空港自動車道（小禄道路）の建設に伴い実施しました。

本遺跡は那覇市小禄鏡水に所在し、かつては、鏡水集落の耕作地が広がり、鏡水大根の産地として有名となっていました。しかし、昭和初期に始まった小禄飛行場の建設や戦時の米軍の攻撃、戦後の米軍による造成等により往時の面影は失われてしまいました。

戦後は自衛隊の基地として利用されてきたことから、遺跡の有無は明らかではありませんでした。そのため、事前の試掘調査を実施したところ、縄文時代から近世以降の遺跡があることが分かり、記録保存調査を実施することとなりました。

調査の結果、縄文時代の土器、グスク時代や近世以降の遺構・遺物を確認し、鏡水では人々が長い間生活していたことが分かりました。

本報告書が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、文化財の保存や活用の一助となれば幸いです。

最後に、現地調査から資料整理にあたり、御指導、御協力を賜りました関係機関及び関係各位に心より感謝申し上げます。

令和3（2021）年2月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 瑞慶覧 勝利

例　　言

- 1 本報告書は、平成30年度に沖縄県那覇市鏡水（陸上自衛隊那覇駐屯地内）に所在する鏡水原遺跡において実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 本調査は、小禄道路（国道506号線）建設工事に伴う記録保存調査である。
- 3 発掘作業から報告書作成までの費用は、事業者である内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道事務所）が負担した。
- 4 発掘作業及び資料整理、報告書作成は、南部国道事務所との契約に基づき沖縄県が実施した。
- 5 発掘作業は沖縄県立埋蔵文化財センターの瀬戸哲也と大堀皓平があたった。資料整理及び報告書作成・編集は大堀と知念隆博があたった。また調査実施にあたり、南部国道事務所に再委託契約の承認を得た上で、発掘調査について株式会社イビソクの業務支援を受けた。
- 6 本報告書に掲載した現場写真は大堀が撮影した。また出土遺物写真的撮影は、大堀のほか、領家範夫・伊禮若奈が行った。
- 7 本報告書に記載された資料は、それぞれ下記の者が同定を行った。
 - 石材：大堀皓平 動物骨：丸山真史
 - 貝類：黒住耐二
- 8 「琉球国間切図（町方・島尻西）」は沖縄県立博物館・美術館、1945年米軍撮影航空写真是、国土地理院地図・空中写真閲覧サービス（<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>）USA-Okinawa-5M3A-7をもとに該当箇所を切り抜き・拡大したものである。
- 9 土層観察表に記載された記号・土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
- 10 掲載された遺物番号は図・写真で統一したものを記載している。なお、図版のみに掲載されている遺物については、掲載図版ごとに○番号を付けて区別している。
- 11 観察表では一部について、名称等を省略して記載した。詳細は下記のとおりである。
 - 龍泉：龍泉窯
 - 徳化：徳化窯
 - 福建：福建系
 - 福・広：福建広東系
 - 景德鎮：景德鎮窯
 - 瀬・美：瀬戸美濃
- 12 本書の執筆分担は以下のとおりである。なお、資料整理の指導・協力を頂いた諸氏からはその所見等を記載した玉稿も賜った。ここに記して感謝申し上げる。
 - 第1～5章 大堀皓平、知念隆博
 - 第4章
 - 第1・4節 パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 第2節 丸山真史
 - 第3節 黒住耐二
 - 第5章 大堀皓平
- 13 本報告書で使用している遺構記号は次のとおりである。
 - S D：溝状遺構
 - S K：土坑
 - S P：ピット
 - S X：不明遺構
- 14 調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

序

例 言

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過	2

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置	5
第2節 遺跡の周辺環境	5

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法	9
第2節 基本層序	11
第3節 近世・近代の遺構と遺物	19
第4節 近世以前の遺構と遺物	59

第4章 自然科学分析

第1節 鏡水原遺跡の自然科学分析	62
第2節 鏡水原遺跡出土の動物遺存体	67
第3節 鏡水原遺跡から得られた貝類遺体	69
第4節 鏡水原遺跡出土陶磁器より検出された圧痕	82

第5章 総括

第1節 立地と地層	86
第2節 遺構	86
第3節 遺物	86
第4節 収束	90

報 告 書 抄 錄

挿 図 目 次

第 1 図 作業風景 (1)	2	第 41 図 SD9 道構平面図・断面図	43
第 2 図 作業風景 (2)	3	第 42 図 SK1 断面写真 (南東から)	44
第 3 図 作業風景 (3)	4	第 43 図 SK1 断面図	44
第 4 図 調査区位置	5	第 44 図 SP27 出土遺物	44
第 5 図 遺跡周辺の地質	6	第 45 図 SP27、SP28 出土遺物	45
第 6 図 遺跡周辺の色別標高図	6	第 46 図 SX2 道構平面図	47
第 7 図 鏡水原遺跡及び周辺遺跡地図	7	第 47 図 調査区北壁 SX2 検出箇所写真 (南から)	47
第 8 図 鏡水原遺跡周辺の古地図・写真	8	第 48 図 SX2 出土遺物	47
第 9 図 グリッド設定図	10	第 49 図 SX3 道構平面図・土層観察用畦立面図	49
第 10 図 鏡水原遺跡の基本層序	11	第 50 図 SX3 コーラル・礫敷設出土状況・断面・疊輪内 遺物出土状況写真	50
第 11 図 調査区西壁 土層断面図 (1)	12	第 51 国 SX3 出土遺物 (1)	50
第 12 国 調査区西壁 土層断面図 (2)	13	第 52 国 SX3 出土遺物 (2)	51
第 13 国 調査区西壁 (3)・北壁 (1) 土層断面図	14	第 53 国 SX3 出土遺物 (3)	52
第 14 国 調査区北壁 (2)・東壁 (1) 土層断面図	15	第 54 国 SX4 道構平面図	54
第 15 国 調査区東壁 土層断面図 (2)	16	第 55 国 SX4 完掘状況写真 (南から)	54
第 16 国 調査区東壁 土層断面図 (3)	17	第 56 国 SX4 出土遺物	54
第 17 国 調査区壁面写真 (1)	18	第 57 国 SX5 道構平面図	55
第 18 国 調査区壁面写真 (2)	19	第 58 国 SX5 完掘状況写真 (南から)	55
第 19 国 遺構分布図 (近世・近代)	20	第 59 国 SX5 出土遺物	55
第 20 国 調査区全景オルソ図	21	第 60 国 道構外出土の近世・近代遺物 (1)	56
第 21 国 調査区全景写真 (北東から)	21	第 61 国 道構外出土の近世・近代遺物 (2)	57
第 22 国 SD1 道構平面図・土層観察用畦立面図	22	第 62 国 ゲスク時代のピット分布図	59
第 23 国 SD1 完掘状況写真	23	第 63 国 SP31、SP38、SP40、SP43 断面図	60
第 24 国 SD1 土層観察用畦 断面写真	24	第 64 国 SP31、SP38 半截状況写真	60
第 25 国 SD1、SD1-1 出土遺物	25	第 65 国 SP40、SP43 半截状況写真	61
第 26 国 SD1-2 出土遺物	26	第 66 国 IV層 出土遺物	61
第 27 国 SD1-3 砂内出土遺物 (1)	27	第 67 国 VII層 壺器出土状況写真 (南から)	61
第 28 国 SD1-3 砂内出土遺物 (2)	28	第 68 国 分析状況写真	66
第 29 国 SD1-3 砂内出土遺物 (3)	29	第 69 国 鏡水原遺跡から出土した貝類遺体の生息場所 類型組成図	81
第 30 国 SD1-3 砂内出土遺物 (4)	30	第 70 国 作業風景	82
第 31 国 SD2 土層観察用畦 断面写真	36	第 71 国 イネ耕確認資料と確認された圧痕	83
第 32 国 SD2 道構平面図・土層観察用畦立面図	37	第 72 国 貝圧痕確認資料と確認された圧痕 (1)	84
第 33 国 SD2 出土遺物	37	第 73 国 貝圧痕確認資料と確認された圧痕 (2)	85
第 34 国 SD3、SD4 道構平面図・断面図	38	第 74 国 検出遺構の変遷図	87
第 35 国 SD3、SD4 断面写真	39	第 75 国 歯ブラシの在路資料	89
第 36 国 SD5～SD7、SD10 断面写真	40	第 76 国 ガラス瓶の在路資料	89
第 37 国 SD5～SD7、SD10 道構平面図	40		
第 38 国 SD5～SD7、SD10 断面図	41		
第 39 国 SD10 出土遺物	41		
第 40 国 SD9 断面写真 (南東から)	43		

図版目次

巻頭図版

図版1 脊椎動物遺体	68	図版4 出土遺物(1)	91
図版2 貝類遺体(巻貝)	72	図版5 出土遺物(2)	92
図版3 貝類遺体(二枚貝)	73	図版6 出土遺物(3)	93

表 目 次

第1表 SD1 土層観察表	22	第33表 SX3 出土動物遺存体集計表	54
第2表 SD1-1 出土遺物観察表	26	第34表 SX4 出土遺物観察表	55
第3表 SD1-2 出土遺物観察表	27	第35表 SX5 出土遺物観察表	55
第4表 SD1-3 出土遺物観察表(1)	31	第36表 SX4、SX5 出土遺物集計表	56
第5表 SD1-3 出土遺物観察表(2)	32	第37表 SX5 出土貝類集計表	56
第6表 SD1 出土遺物集計表	33	第38表 SX5 出土動物遺存体集計表	56
第7表 SD1 出土貝類集計表(巻貝)	34	第39表 遷構外出土の近世・近代出土遺物観察表	57
第8表 SD1 出土貝類集計表(二枚貝)	35	第40表 遷構外出土の近世・近代出土遺物集計表	58
第9表 SD1 出土動物遺存体集計表	36	第41表 遷構外出土の近世・近代出土貝類集計表	58
第10表 SD2 土層観察表	37	第42表 遷構外出土の近世・近代 出土動物遺存体集計表	58
第11表 SD2 出土遺物観察表	37	第43表 SP31、SP38、SP40、SP43 土層観察表	60
第12表 SD3、SD4 土層観察表	38	第44表 SP33、SP36、SP38 出土遺物集計表	61
第13表 SD5～SD7 土層観察表	41	第45表 IV層 出土遺物観察表	61
第14表 SD10 出土遺物観察表	42	第46表 IV、IV・V、VII層 出土遺物集計表	61
第15表 SD 出土遺物集計表	42	第47表 試料表	62
第16表 SD 出土貝類集計表	42	第48表 放射性炭素年代測定結果	63
第17表 SD2 出土動物遺存体集計表	42	第49表 花粉分析結果	64
第18表 SD9 土層観察表	43	第50表 微細物分析(種子遺体分析含む)結果	64
第19表 SK1 土層観察表	44	第51表 動物遺存体一覧	67
第20表 SK1 出土遺物集計表	44	第52表 鏡水原遺跡から出土した巻貝等の詳細(1)	74
第21表 SP27 出土遺物観察表	44	第53表 鏡水原遺跡から出土した巻貝等の詳細(2)	75
第22表 SP27、SP28 出土遺物観察表	45	第54表 鏡水原遺跡から出土した巻貝等の詳細(3)	76
第23表 ピット 出土遺物集計表	45	第55表 鏡水原遺跡から出土した二枚貝類等の詳細(1)	77
第24表 ピット 出土貝類集計表	46	第56表 鏡水原遺跡から出土した二枚貝類等の詳細(2)	78
第25表 SX2 出土遺物観察表	48	第57表 鏡水原遺跡から出土した二枚貝類等の詳細(3)	79
第26表 SX2、SX2・SX3 出土遺物集計表	48	第58表 鏡水原遺跡から出土した貝類遺体 同定標本数(NISP)	80
第27表 SX2 出土貝類集計表	48	第59表 確認された正痕一覧表	83
第28表 SX3 土層観察表	49	第60表 石材別出土石器・石材集計表	88
第29表 SX3 出土遺物観察表(1)	52		
第30表 SX3 出土遺物観察表(2)	53		
第31表 SX3、SX3 レキ内 出土遺物集計表	54		
第32表 SX3、SX3 レキ内 出土貝類集計表	54		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

(1) 発掘調査の原因から埋蔵文化財事前審査願の回答

国道331号線は那覇市街地と沖縄県南部を結ぶ国道であるが、そのうち小禄バイパスと呼ばれる区間は、那覇市街地と豊見城市・糸満市を結ぶとともに那覇空港への通行路でもある。しかし、県内への観光客の増加、豊見城市及び糸満市の発展などの影響による交通渋滞が問題視されている。そのため、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以後、南部国道事務所という）は、高規格幹線道路である那覇空港自動車道（国道506号線）を「小禄道路」として延伸することで対策を図ることを平成21年度に決定し、平成23年度より事業に着手した。

それに伴い、工事予定地について、南部国道事務所から那覇市民文化部文化財課（以後、市文化財課）に対して平成27年6月5日付け府国南事第607号により埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けて、市文化財課は、対象地が戦後、米軍基地を経て現在も陸上自衛隊基地内であることから埋蔵文化財について事前の把握ができていないため、同28年9月から翌29年3月までの試掘調査を行った。その結果、ミノン毛古墓群、らくだ山戦争遺跡群A地点、らくだ山戦争遺跡群B地点、鏡水水溜屋原B遺跡、鏡原遺跡、鏡水増原遺跡が新たに確認されたことから、平成29年4月28日付け埋蔵文化財事前審査報告書（事前審査番号27-121-1）により那覇市教育委員会（以後、市教委）から南部国道事務所に複数の埋蔵文化財が所在する旨的回答を行った。

(2) 本発掘調査の実施に係る調整

南部国道事務所は、遺跡の保存もしくは設計変更が難しいと判断し、市文化財課と遺跡の本発掘調査を行うことで調整を行った。さらに、令和2年度で道路を開通する計画のため、平成29年8月1日付け府国南事第792号により、上記の遺跡について平成30年7月までに本発掘調査（以後、本調査）を完了するよう依頼した。しかし那覇市は、同年8月14日付け那市文財第168号による回答で、市文化財課の体制で依頼に対応することは困難であり、平成31年度以降に本調査に着手を行う方向への修正を求めた。

しかし平成31年度に本調査を実施した場合、道路開

通は令和4年度となることが見込まれることから、南部国道事務所、那覇市文化財課、それに沖縄県教育庁文化財課（以後、県文化財課）及び沖縄県立埋蔵文化財センター（以後、県埋文）を交えて平成30年10月13日に調整を行い、工事計画に即して本調査対象の遺跡について優先順位を付けることになった。その結果、①鏡水原遺跡及び鏡水増原遺跡を優先すること、②左記2遺跡のうち、鏡水原遺跡の全762m²中の東側371m²と鏡水増原遺跡は、工事の掘削深度が埋蔵文化財包含層の深度まで及ばないことから工事立会いで対応すること、③鏡水原遺跡の西側391m²は県が本調査を実施すること、この3点が合意された。さらに10月17日には本調査における条件面について現地調整を行った。その結果を踏まえ、平成29年10月18日付け埋蔵文化財事前審査報告書（事前審査番号27-121-2）が市教委から南部国道事務所に提出され、さらに10月29日付け府国南事第995号により南部国道事務所から沖縄県に対し本調査依頼が提出された。その後、南部国道事務所と県文化財課間で工程計画及び経費等の調整を行い、平成30年3月23日付で南部国道事務所と沖縄県教育委員会間で協定を締結、4月13日付で南部国道事務所と沖縄県間で委託契約を締結した。

第2節 調査体制

事業主体 沖縄県教育委員会

教育長 平敷明人（平成30・令和元年度）

金城弘昌（令和2年度）

事業主管 沖縄県教育庁文化財課

課長 濱口寿夫（平成30・令和元年度）

諸見友重（令和2年度）

記念物班長 仲座久宜（平成30～令和2年度）

主任専門員 羽方 誠（平成30・令和元年度）

主任 宮城淳一（令和元年度）

主任 大堀晴平（令和2年度）

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 登川安政（平成30年度）

城田久嗣（令和元年度）

瑞慶賀勝利（令和2年度）

調査統括 沖縄県立埋蔵文化財センター

調査班長 中山 晋（平成30～令和2年度）

調査担当

主任専門員 濱戸哲也（平成30年度）

主任 大堀晴平（平成30・令和元年度）

主任専門員 知念隆博（令和2年度）

埋蔵文化財資料整理員

富平砂綾子、富山由貴、宮城初枝、比嘉なおみ（令和元年度）

発掘調査支援業務委託

株式会社イビソク（平成30年度）

理化学分析業務委託

株式会社パリノサーヴェイ（平成30・令和元年度）

発掘調査指導 宮城弘樹（沖縄国際大学）

資料整理指導 丸山真史（東海大学）

協力者 陸上自衛隊那覇駐屯地業務隊管理科営繕班、

那覇市市民文化部文化財課、保久盛一彰（南風原町教育委員会）、仲程勝哉（沖縄県公文書館）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）、城間宏次郎、佐藤悠介、比嘉菜々恵、具志みどり、多々良亜矢子、嶺井幸恵、安次嶺沙織、兼島小百合



調査区測量



仮囲い設置



現場事務所設置



磁気探査

第1図 作業風景（1）

- 7月20日 沖縄県南部保健所に事業行為通知書を提出。
- 8月1日 沖縄県南部保健所より、確認済通知書を受領。
- 8月7日 陸上自衛隊の訓練に伴い、現地作業を中止（～9日）。
- 8月13日 埋文第359号により、県埋文から沖縄県教育委員会に対し、発掘調査の着手を報告。また市文化財課にも事務連絡。
- 8月10日 表層の磁気探査を実施。
- 8月17日 赤土対策工を実施。
- 8月20日 表土の重機掘削及び人力による遺構検出作業を開始し、地表下約0.4mで遺構を確認。
- 8月31日 検出された遺構の掘削作業を開始。
- 9月27日 台風24号接近及び現場仮設事務所等が被害を受けたことや台風25号接近に伴い現地作業を中止（～10月5日）。
- 11月2日 調査区全景写真撮影（1層目）
- 11月7日 調査区の一部で検出された暗褐色土層より、先史時代の土器が出土。
- 11月14日 陸上自衛隊の訓練に伴い、現地作業を中止（～16日）。
- 12月12日 調査区全景写真（2層目）。
- 12月13日 陸上自衛隊の訓練に伴い、現地作業を中止（～14日）。
- 12月17日 調査と平行して、沈砂地から埋め戻し作業を開始。
- 12月25日 掘削作業が完了、完掘状況全景写真を撮影。
- 12月26日 記録作業と平行して現場撤収作業を開始。
- 12月27日 調査区埋め戻しを開始（～1月7日）。
- 平成31年
- 1月8日 種子吹付工を実施、現地作業を完了。
- 1月9日 埋文第713号により県埋文より県文化財課に発掘調査の終了について、埋文第714号により埋蔵文化財の発見について報告。また市文化財課にも事務連絡。
- 3月14日 平成30年度受託契約業務について、南部国道事務所において完了検査を受け、その後、沖縄県より南部国道事務所に完了報告書を提出。



小堀工



表土剥ぎ



発掘調査



埋め戻し

第2図 作業風景（2）

(2) 資料整理作業

資料整理作業は令和元年度に遺物の洗浄、注記、実測、写真撮影等を行った。遺物の実測図はデジタル化し、遺構図と合わせてパソコンで編集・レイアウト作業を行った。令和2年度は引き続き編集・レイアウト作業を行い、報告書を刊行した。資料整理作業の過程は以下のとおり。

令和元年

5月 21日 南部国道事務所・沖縄県間で令和元年度の契約を締結し、資料整理作業を開始。

5月・6月 出土遺物の洗浄、注記、分類、接合を実施。

7月～10月 遺構図の整理、報告書掲載遺物の抜出し、実測、トレース、写真撮影を実施。

10月 24日 出土した動物骨について、東海大学海洋学部の丸山真史氏に指導を受ける。

11月・12月 遺構図のトレース、集計表作成、原稿執筆、レイアウトを実施。

令和2年

1月～3月 構図のトレース、集計表作成、原稿執筆、レイアウトを実施。

3月 26日 令和元年度受託契約業務について、南部国道事務所において完了検査を受け、その後、沖縄県より南部国道事務所に完了報告書を提出。

6月 10日 南部国道事務所・沖縄県間で令和2年度の契約を締結し、編集・レイアウト作業を開始。

12月 23日 有限会社サン印刷と契約

令和3年

1月 8日 入稿

2月 26日 刊行



現場引渡し時



実測作業



写真撮影作業



報告書執筆・編集作業

第3図 作業風景（3）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

鏡水原遺跡は、沖縄県那覇市小禄に所在する（第4図）。那覇市は沖縄県の県庁所在地であり、天久新都心をはじめとした沖縄経済の中心地であり、かつ那覇空港を抱える沖縄県の玄関口でもある。

小禄は那覇市の南側にあり、北の那覇市街地、南の豊見城市・糸満市の中間に位置しており、現在の沖縄県内の交通の要所である。南西側には陸上自衛隊那覇駐屯地があり、遺跡はこの自衛隊基地の西側に位置している。遺跡からさらに西側には県道506号線、沖縄都市モノレール（ゆいレール）那覇空港駅、那覇空港が所在しており、県内の基幹的な流通を支える場所である。

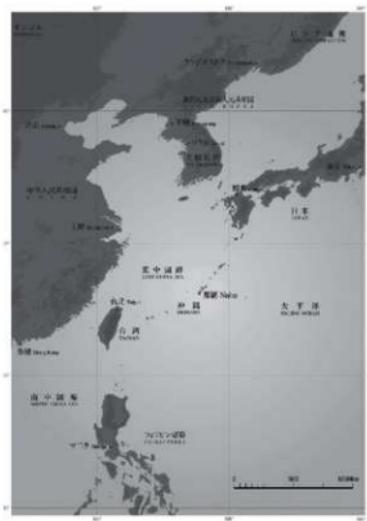
第2節 遺跡の周辺環境

（1）地理的環境

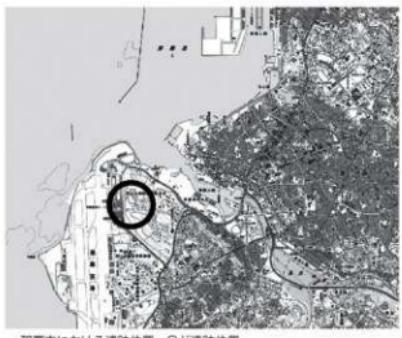
那覇市は、人口が令和2年7月末時点で321,088人、推計面積は首里市及び小禄村が編入された昭和29（1954）年時点では 22.63km^2 だったが、度数の埋め立て等により、現在では推計面積 39.57km^2 を数えるに至つ

ている。気候は年間平均 23°C 、年間降水量2000mm前後で、亜熱帯モンスーン気候に属する。地質は第三紀中新世の島尻層、第三紀新世から第四紀洪積世の琉球層群琉球石灰岩及び冲積層で形成される。地形は北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地及び小禄台地が囲むような地形をなす。これらの台地上から西海岸へ安瀬川、久茂地川、国場川等が流れ、河川周辺に冲積地を形成している。特に国場川と隣波川の合流地点には汽水干潟の漫湖が形成され、昭和57（1982）年に国指定漫湖鳥獣保護区、平成11（1999）年にはラムサール条約にも登録されている。さらに国場川河口は大きく開いた天然の良港であり、グスク時代以来、那覇港として琉球・沖縄第一の港となっている。

鏡水原遺跡は、地質上では島尻層の西端部に所在しており、その西側は標高 $2 \sim 3\text{m}$ 程度の冲積層となる。遺跡北側には琉球層群琉球石灰岩が微丘陵上に分布している（第6図）。



沖縄県位置

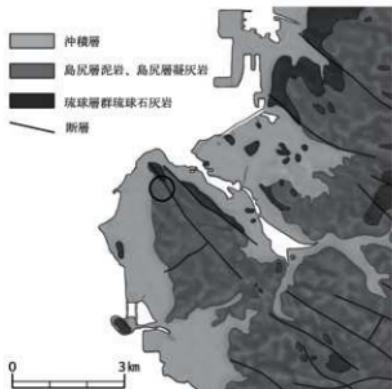


那覇市における遺跡位置 ○が遺跡位置

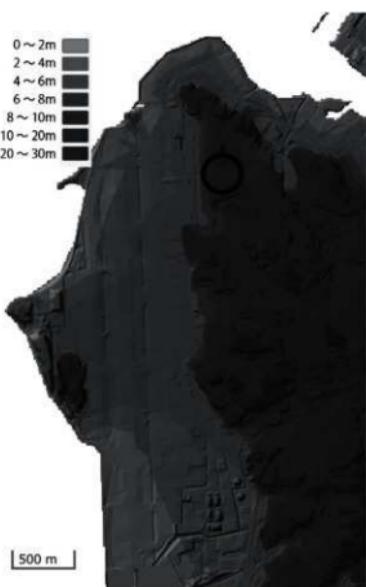


調査区位置

第4図 調査区位置



第5図 遺跡周辺の地質 ○が遺跡位置
(沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2006) を加工して作成



第6図 遺跡周辺の色別標高図 ○が遺跡位置
(国土地理院 HP「自分で作る色別表構図」を用いて作成)

(2) 歴史的環境

鏡水周辺は先史時代から近代まで連続と遺跡が確認されている。縄文時代早期から中期の遺跡には鏡水真岡原C遺跡があり、当該期の貝塚が確認されている。なお、この時期は縄文海進期に当たり、現在より2~3m程度海面が高かったことが確認されており(沖縄県立埋蔵文化財センター編 2019)、第5図の沖積地はその大半が水没していた可能性がある。

海水面が低下するとともにサンゴ礁が水面に達していく縄文時代後期・晩期の遺跡には、鏡水真岡原A遺跡と鏡水名座原遺跡が挙げられる。前者は伊波式土器を主体とし、後者は荻原式から室川式土器を主体としており、主体となる時期に違いが認められる。また、鏡水真岡原C遺跡には弥生~平安並行時代前半期の構造・遺物も確認されているほか、同時代後半期からグスク時代初頭の遺跡には沖縄における初期農耕の痕跡が確認された那崎原遺跡が確認されている。

さて、文献上の鏡水字は、琉球國由來記(1713年編纂)において、儀間村中の箕の形に似た洞穴が地名の由来であること、この洞穴には觀音像と拝殿があることが記載された記事が初出である。この伝承は、琉球國舊記(1730年編纂)にも真岡宮の節や「遺老説伝」にも同様の記載があり、左記の洞穴が高台の下にあることが述べられている。そしてこの高台は、東恩納寛惇『南島風土記』によれば先原崎を指すことが述べられている。

鏡水は安次嶺村内の鏡水屋取として開墾され、近世から近代初頭までは琉球王国に私有地と認められた土地である仕明地であったとされる。その後、明治36(1903)年の土地整理によって、當時小禄間切安次嶺村であった鏡水原・伊保原・前原と、儀間村であった蚊阪・名座原・下田原・真岡原・土砂場原・増過原・水溜屋原・崎原を統合して新たに鏡水村が設置された。さらに明治41(1908)年には、町村制施行によって小禄村字鏡水となっている。鏡水は農業を基幹産業としていたが、特に大根は「鏡水ダイコン」として全国的に知られた名産物であった。他に製糖産業も行われていたとされる。

昭和6(1931)年の小禄飛行場建設により、鏡水の一部が買収され、さらに昭和10、13、16年に拡張工事が行われ、それぞれ字の一部が買収されていった。また空港周辺には日本軍の壕が構築された。このように軍施設が集中していることから、米軍の攻撃に晒され、集落は戦禍とその後の米軍による造成によって消失している。

戦後は鏡水の過半が米軍基地となり、沖縄の本土

復帰後は陸上自衛隊那覇駐屯地として今日に至っている。

参考文献

- 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2006『県土のすがた』沖縄県教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『沖縄県の戦争遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 75 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『大嶼村跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 101 沖縄県立埋蔵文化財センター

鏡水郷友会 2005『字鏡水創立百周年記念誌』

那覇市市勢要覧 2017

那覇市 HP「市のプロフィール」(<http://www.city.naha.okinawa.jp/general/profile/>)

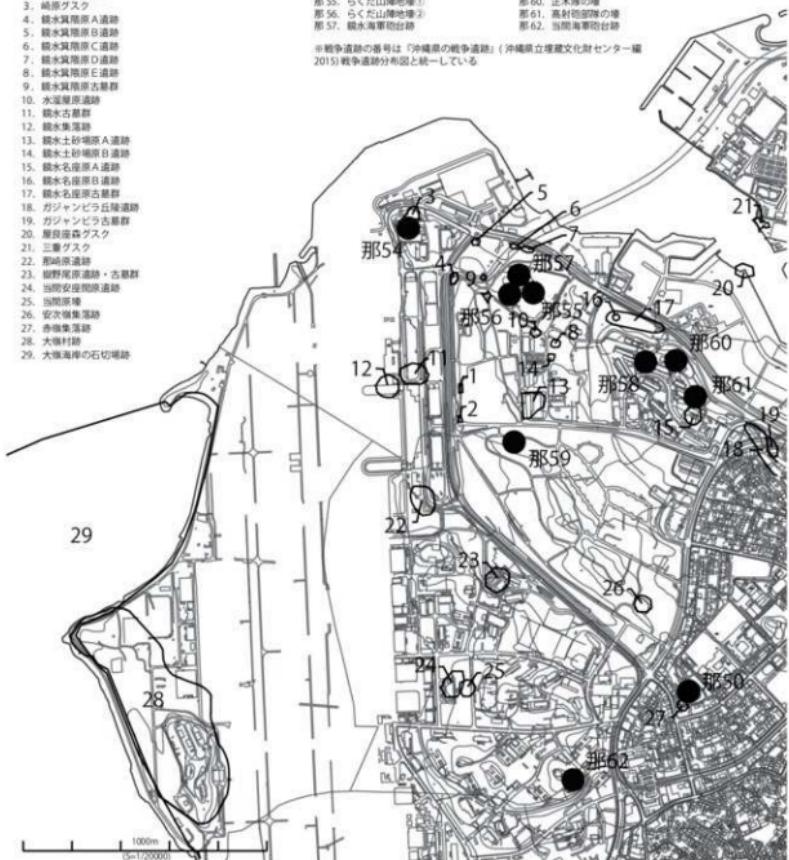
那覇市歴史博物館 2018『考古学から見た那覇』(平成 30 年度企画展図録)

- 〈周辺遺跡凡例〉
 1. 鏡水原遺跡
 2. 鏡水原通原遺跡
 3. 嶋原グスク
 4. 鏡水原南原 A 直跡
 5. 鏡水原南原 B 直跡
 6. 鏡水原南原 C 直跡
 7. 鏡水原南原 D 直跡
 8. 鏡水原南原 E 直跡
 9. 鏡水原南原 F 直跡
 10. 水沼原通原直跡
 11. 鏡水原群
 12. 鏡水原落跡
 13. 鏡水大砂場原 A 直跡
 14. 鏡水大砂場原 B 直跡
 15. 鏡水大砂場原 C 直跡
 16. 鏡水大砂場原 D 直跡
 17. 鏡水大砂場原古墳群
 18. ガジンビラ古墳群
 19. ガジンビラ古墳群
 20. 屋良茂森グスク
 21. 三重グスク
 22. 那崎原遺跡
 23. 御野尾原遺跡・古墓群
 24. 当間原通原遺跡
 25. 当間原塚
 26. 安次地集落跡
 27. 赤嶺集落跡
 28. 大嶼村跡
 29. 大嶼海岸の石切跡

〈周辺道路の凡例 (戦争道路)〉

- 那52. 香川町北の通路
 那53. 香川町北の通路
 那55. らくだ山陣地跡①
 那56. らくだ山陣地跡②
 那57. 鏡水海軍防台跡
 那58. 海守理
 那59. 鏡水海軍司令部壕跡
 那60. 正木原の壕
 那61. 高村田部隊の壕
 那62. 当間海軍防台跡

※戦争道路の番号は「沖縄県の戦争道路」(沖縄県立埋蔵文化財センター編 2015) 戦争道路分布図と統一している





正保国絵図 ○が遺跡位置



間切図 ○が遺跡位置



1945年1月米軍航空写真 ○が遺跡位置



2010年航空写真 ○が遺跡位置

第8図 鎌水原遺跡周辺の古地図・写真

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

(1) 調査の目的

過年度に那覇市文化財課が行った試掘調査では、大きく近世・近代の旧表土及び遺構（Ⅱ・Ⅲ層）と、その下から縄文時代と目される焼土面が検出されるとともに、縄文時代の土器を包含する地層（IV・V層）が確認されていた。これを踏まえて、今回の本調査ではこの2つの遺構検出面を確認・調査するとともに、地山の赤土層が確認されるまで遺物包含層と目されるV層から遺物を検出することを目的とした。

(2) 調査の方法

グリッド設定 グリッドは、方位に平面直角座標系を用い、その基準は沖縄本島の適用区域であるXV系を用いた。測量は株式会社イビソクによる支援業務委託として実施し、平面測量はソキア GCX2 を用い、GNSS（衛星測位システム）測量とネットワーク型 RTK 測量により、4級基準点を調査区を囲むように4点設定して基準点とした。また、水準測量は、トブコン DL-503 電子レベルを用い、既知水準点より上記4点の基準点に水準点移動を行った。グリッドの大きさは、「発掘調査のてびき」を参考に、大・中・小の3つに区分した。大グリッドは1km単位で設定し、表記は座標系／X座標のkm以上 の数値 / Y座標のkm以上の数値で記載した。なお今回の調査区は、大グリッド上では15/N230/E150 グリッド内に収まる。中グリッドは10m単位で設定した。グリッドの記載はX座標・Y座標それぞれの百と十の単位を並べて記載した。今回の調査区の場合、0626・0627・0326・0327の4つのグリッドにまたがっている。小グリッドは2m単位とし、中グリッドを25 グリッドに細分している。表記は北西から東に向かってA・B・C…と順にグリッド記号を振っていき、表記はどの中グリッドか判別できるように中グリッド名+小グリッド名とした。小グリッドは遺物等が集中した場合を想定して設定したが、今回の調査では用いなかった。

表土剥削から遺構検出作業 調査区の表層磁気探査を完了後、まず赤土流出防止対策の小堤を設置した。さらに調査区西側の舗装道路をアスファルトカッターで切断し、バックホウを用いてアスファルト及びその下の路盤材を除去した。これらの事前作業の後、調査区北側から南側に向かって、バックホウで地表下0.5mまで表

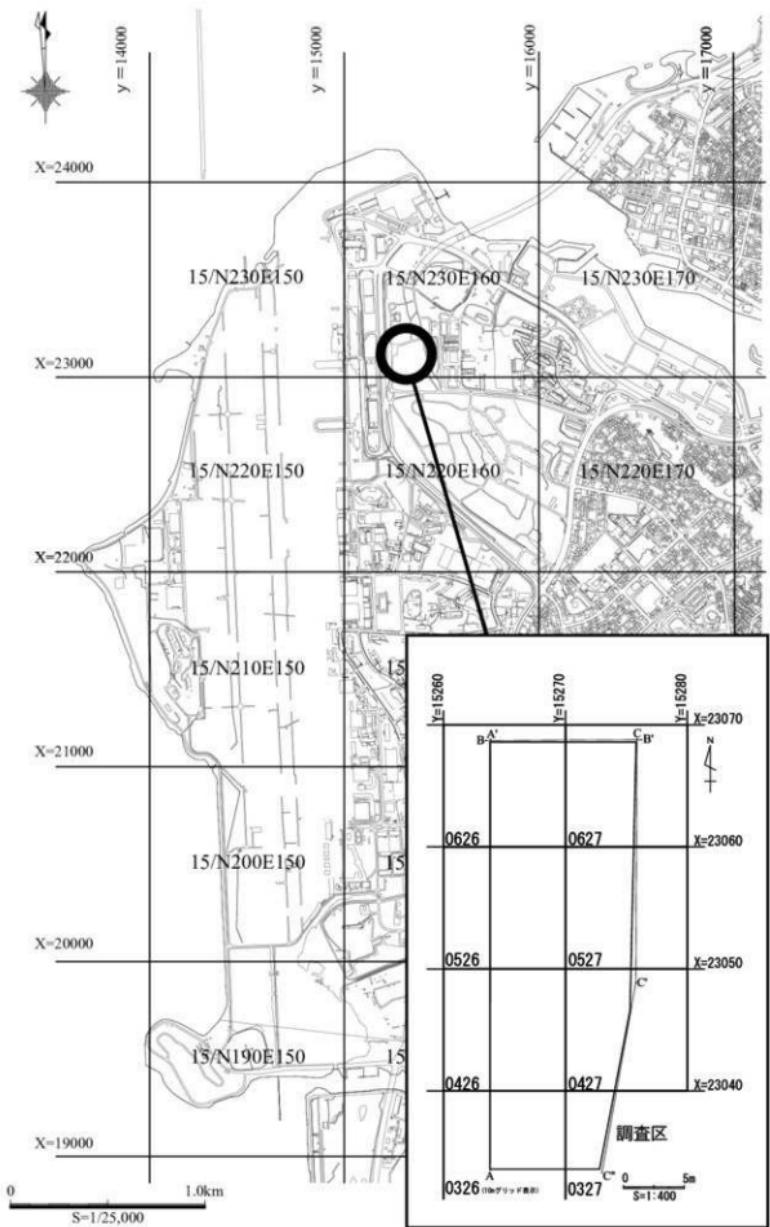
土剥ぎを行った。当初の計画では0.5m毎に磁気探査を行いながら遺構が確認されるまで重機掘削を行う予定だったが、深度0.5mの段階で遺構のプランや地山とみられる赤土層が調査区中央部より検出されたため、この深度で表土剥ぎを終了した。

発掘作業 表土剥ぎ後は、人力作業によって遺構検出及び遺構掘削を行った。図面作成は、平面図については上記の測量機材により座標を測量してCAD上に配置し、Adobe Illustratorで作図した。ただし、SD1は後述のように礫が充填されていたためオルソ化して作図を行った。遺構断面は手実測で作成したが、調査区東・西壁とSD1ベルト断面はオルソ化して作図した。遺物は原則的に遺構ごとに取り上げ、遺構外の出土遺物は層序ごとに中グリッド単位で取り上げた。

写真撮影 写真撮影は、35mm判フィルムカメラを用いて白黒フィルムとリバーサルフィルム、フルサイズのデジタル1眼レフカメラの3つの写真を主体とした。ただし調査区全景写真やSD1の完掘状況については6×7判フィルムカメラを用いて白黒とカラー写真を撮影した。なお、デジタルカメラ撮影ではグレーカードを用いた。方法は「文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について1」（文化庁編 2017）に準拠し、まずグレーカードを写し込んだ写真を撮影したのち実際の撮影とバックアップ用の撮影を行う、1カット3ショットを基本とした。撮影した写真的Low形式データは、Adobe Photoshopを用いてレンズ補正、ホワイトバランス補正、階調補正を行った上でjpeg形式で現像した。

自然科学分析 III層や焼土を覆土にもつビットについては遺物が確認されなかったため、覆土をサンプリングしたのち、土壤内の炭化物を洗い出して放射性炭素年代測定を行った。またSD1-3礫内からは、掘削中に出土した遺物中に骨・貝類も含まれることから、ベルトのみサンプリングを行い、有機質資料の洗い出しを行った。

整理作業 出土遺物については、まず同じ出土箇所の試料について接合作業を行い、その後に注記を行った。さらに、接合作業を経て、掲載遺物の選別、実測、Adobe社Illustratorを用いたデジタルトレース、フルサイズデジタル1眼レフカメラによる写真撮影、マイクロソフト社Excelを用いて集計作業を行った。また遺構等の図面については、発掘調査支援業務委託により作成された成果品を、Adobe社Illustratorを用いて発掘調査報告書に掲載する縮尺や線の太さなどの修正を行った。発掘調査報告書の原稿作成及びレイアウトには、Adobe社inDesignを用いた。



第9図 グリッド設定図

第2節 基本層序

1 今次調査で確認された地層

那覇市文化財課が実施した試掘調査では、I層からVI層までの地層が確認されている。今回の調査においてもこの層序を踏襲したが、調査結果を踏まえて一部修正し、以下のように基本層序を設定した。

I層：表土及び造成に用いられた客土。調査区西側は道路舗装面及び路盤材。

II層：近世・近代の耕作土層。土質により以下に細分される。

II-1層：暗褐色シルト(7.5YK3/4)。粘性、締まりともに弱く、炭や焼土が多く混じる。調査区のほぼ全域で検出される。遺物には近世・近代の陶器などがみられる。

II-2層：褐色シルト(10YK4/4)。粘性は弱く、締まりが有る。砂粒・小礫・炭・焼土が多く混じる。

II-3層：暗褐色シルト(10YK3/4)～褐色シルト(10YK4/4)。粘性、締まりともに弱い。砂粒・小礫・炭・焼土が多く混じる。

III層：調査区東側の一部と、ピット覆土中に確認された地層。以下の2つに細分される。

III-1層：暗褐色シルト(10YK3/4)。粘性は弱く、締まりは極めて弱い。炭・焼土が多く混じる。一部のピットはこの土が覆土に認められた。明確にこの層から出土した遺物は確認されなかった。

III-2層：暗褐色シルト(7.5YK3/4)。粘性、締まりとも弱い。炭・焼土が混じるほか、マンガン粒が多く混じる。明確にこの層から出土した遺物は確認されなかった。III-1層とIV・V層の混層である。

IV・V層：暗褐色シルト(7.5YK3/4)。粘性、締まりともに有る。層上部から下部に向けて貫入が多く認められるほか、土壤化したマンガン粒が多く混じりまだら状をなす。先史時代の土器や石器がまばらに出土した。便宜的に土器等を包含するものをIV層、しないものをV層とした。

VI層：地山の赤土。島尻層。土質により以下に細分される。

VI-1層：褐色シルト(10YK4/6)。粘性、締まりともに有り。

VI-2層：褐色シルト(7.5YK4/6)。粘性、締まりともにやや有り。

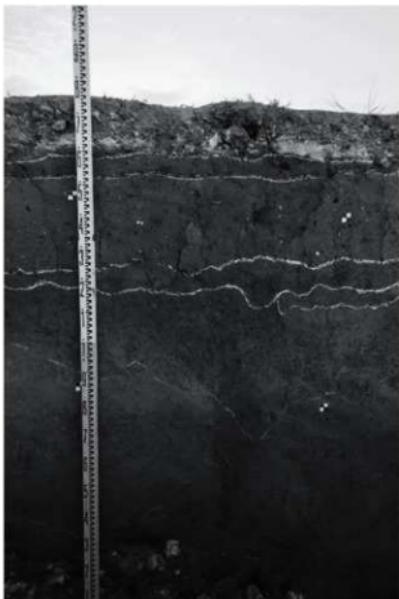
VI-3層：褐色シルト(10YK4/6)。粘性が強く、締まりはやや有り。

VI-4層：褐色シルト(7.5YK4/4)。粘性極めて強く、締まりは弱い。琉球石灰岩岩盤の直上で特徴的に堆積が確認される。

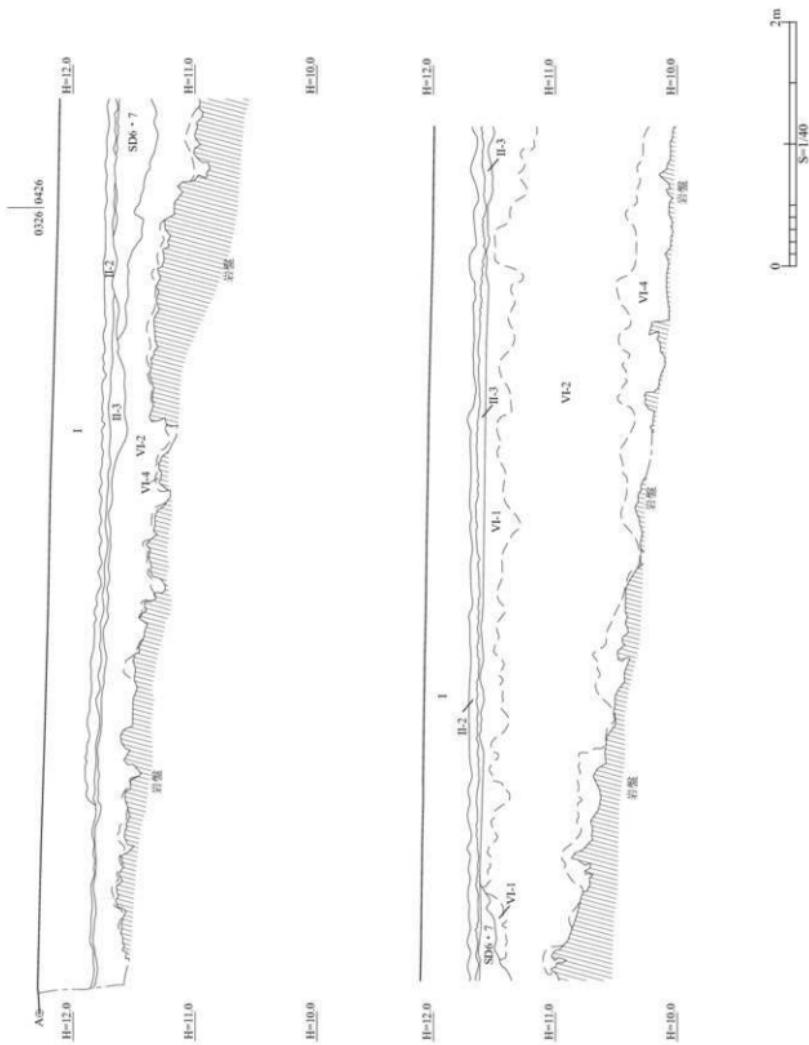
VII層：琉球石灰岩の岩盤。

2 周辺遺跡との地層の異同

上記のように、今回の調査では地山の赤土層を含めて6枚の地層が確認されたが、これらの地層は、宜野湾市普天間地域一帯と堆積のしかたが概ね一致するように思われたことから、今後は広域な堆積層の異同についても検討の必要があると考えられる。



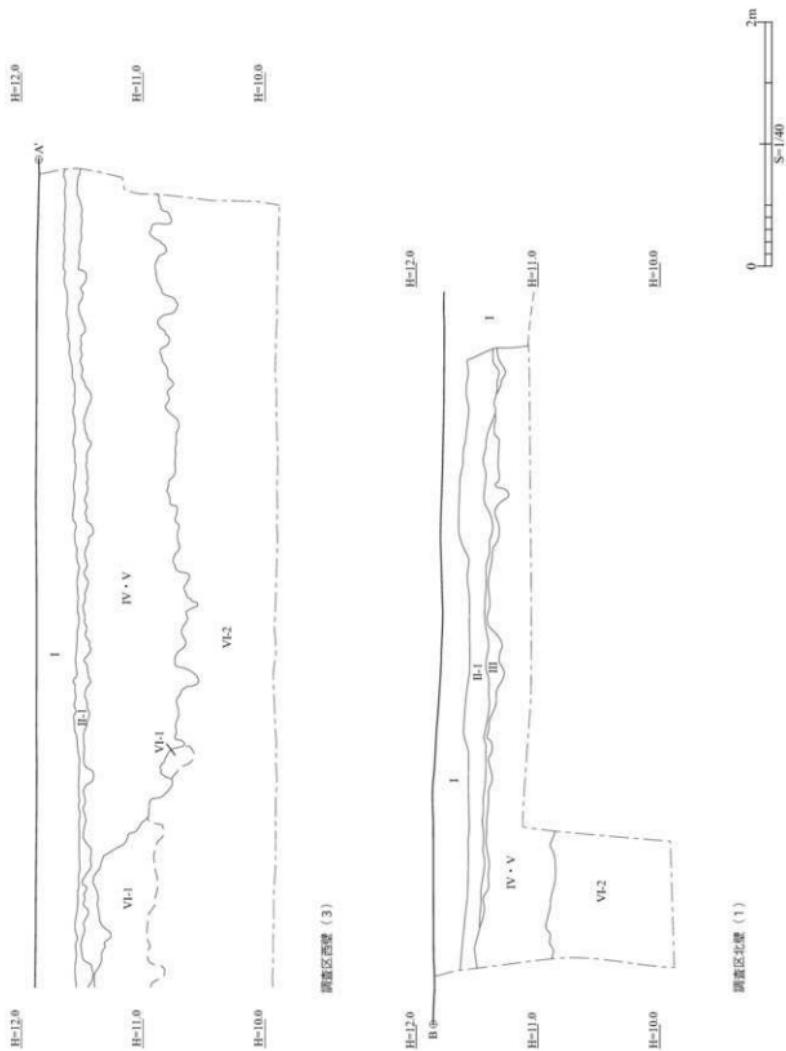
第10図 鏡水原遺跡の基本層序



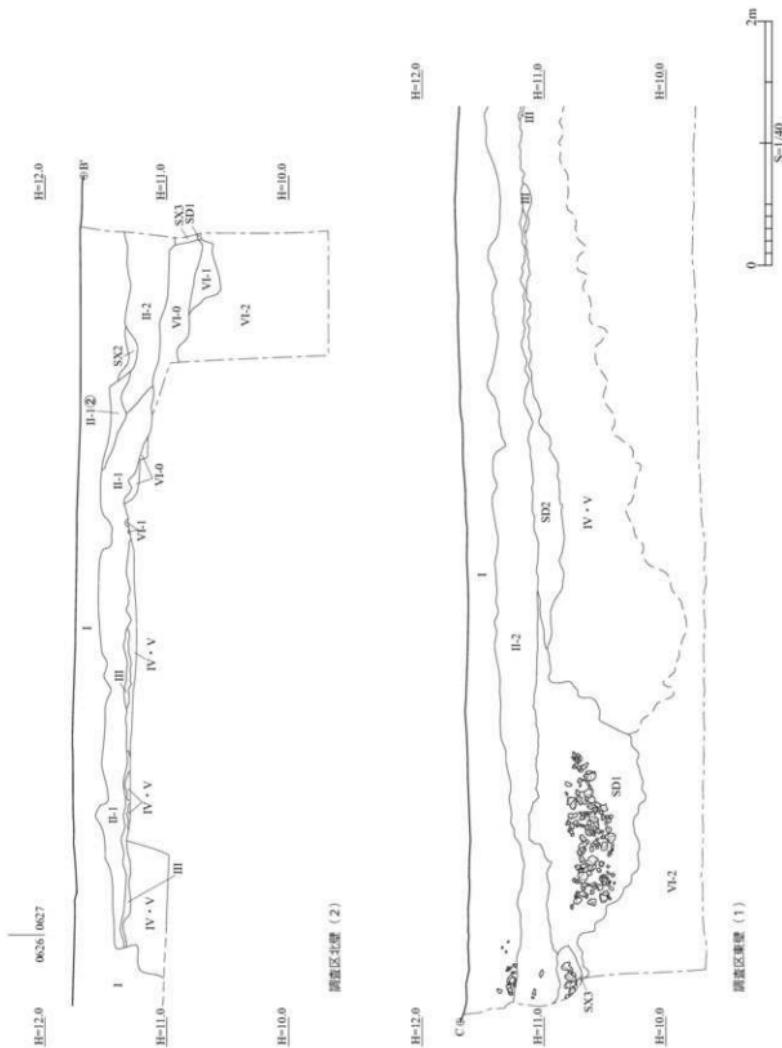
第11図 調査区西壁 土層断面図（1）



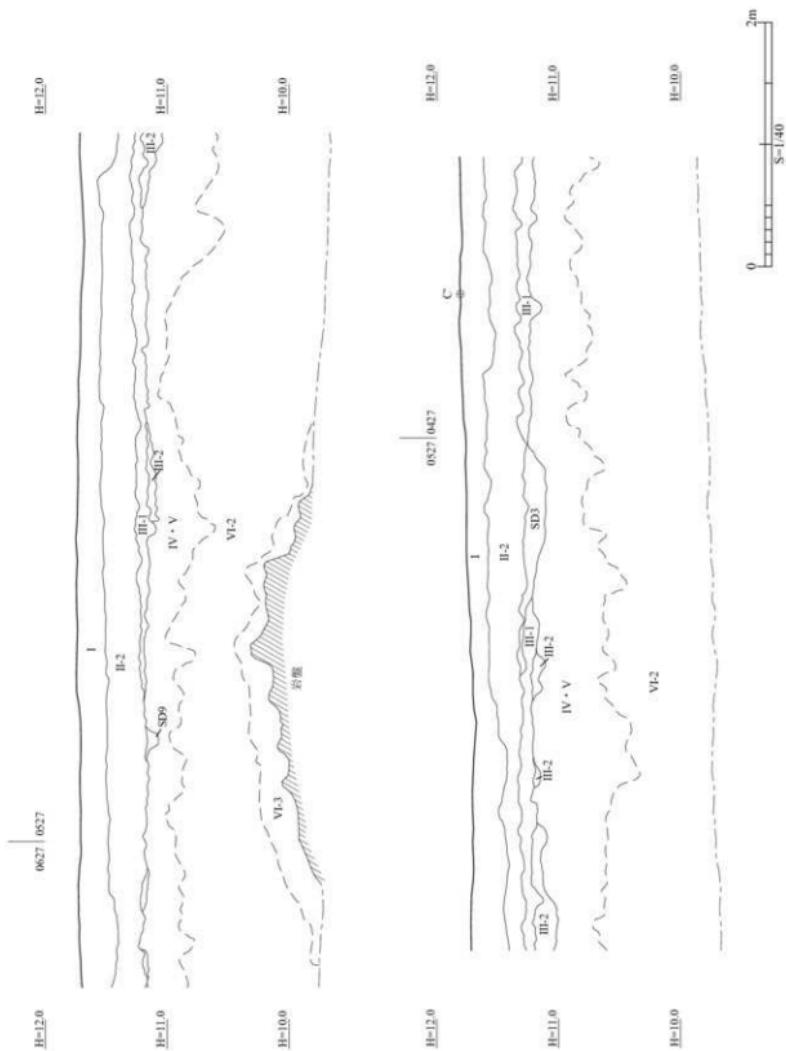
第12図 調査区西壁 土層断面図（2）



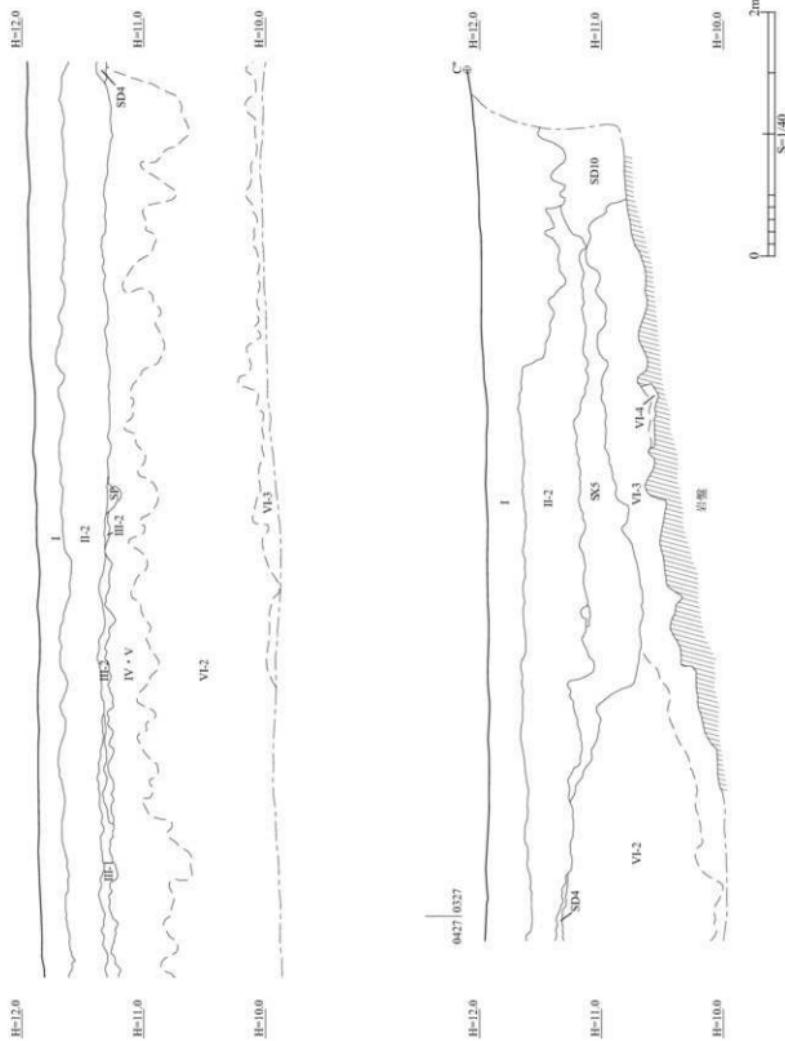
第13図 調査区西壁（3）・北壁（1）土層断面図



第14図 調査区北壁(2)・東壁(1) 土層断面図



第15図 調査区東壁 土層断面図（2）



第16図 調査区東壁 土層断面図（3）



調査区西壁（北東から）



調査区北壁（南西から）

第17図 調査区壁面写真（1）



調査区東壁（北西から）

第18図 調査区壁面写真（2）

第3節 近世・近代の遺構と遺物

1 概要

本調査では、近世・近代の頃の遺構が調査区のほぼ全域で検出された。検出されたのは、SD（溝状遺構）9基、SP（ピット）29基、SX（不明遺構）4基である。ただしピットについては、植栽痕10基と米軍基地時代のものとみられる15基を含めている。

遺構の分布は、溝状遺構が調査区のほぼ全域に渡って検出されている。これらの溝状遺構によって方形の区画が形成されることから、土地区画を示す溝であると考えられる。またピットは現代の金属製部材などが出土することから米軍基地時代と考えられる。調査区東側で等間隔に分布することから、米軍基地時代の建物に伴うものと理解される。一方で性格不明のSXのうち、SX2はほぼ同一の日本産磁器杯が遺構底部に出土することから、遺物埋納遺構と目される。またSX3は甕やコーラルが散かれ、SD1の北側を平行することから、溝に並行する道路の可能性がある。それ以外のSXには性格を推定させる材料は得られておらず、近代以降の遺構であること以外は不明である。

2 溝状遺構

(1) SD 1

位置・重複関係 0526・0626・0527・0627の4つのグリッドにまたがって検出された。遺構の軸はN33°～43°E。同じ遺構内でSD1-3 → SD1-2 → SD1-1の順に3つの重複関係が認められる。

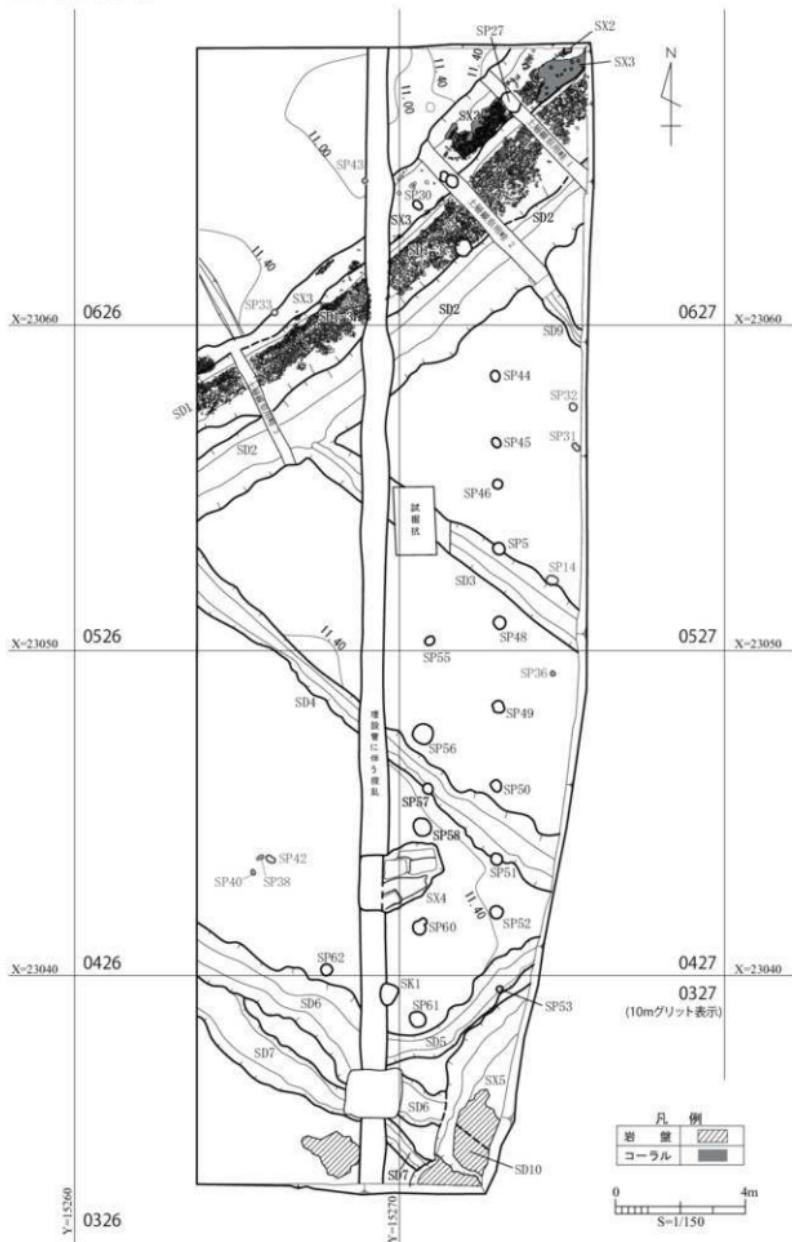
【SD 1-1】

重複関係 SD1-2・1-3とSX3を切る。

形状・規模 断面は略方形。幅最大1.87m、深さ最大0.5m。

覆土 基本層序II-1層が堆積し、4層に細分することができる。

遺物 SD1の重複関係が分かる前に取り上げた遺物(SD1)を含め、人工遺物496点、貝類77点、動物骨16点が出土した。主な遺物として、中国産陶磁器には18c～19cの瑠璃釉小杯(1)、日本産陶磁器は丹波産で19c～20cの施釉陶器壺(2)、瓦平焼の蓮華(3)、瑠璃釉の鉢(4)、沖縄産陶器には施釉陶器の急須蓋(5)、



第19図 遺構分布図（近世・近代）



第20図 調査区全景オルソ図



第21図 調査区全景写真（北東から）

瓦質土器の壺（6）が確認された。ほかに石硯（7）、木製箸（8）、舟釘（9）、円盤状製品（10）、炉壁（11）、骨製歯ブラシ（12）、ガラス製の独楽（13）、薬瓶（14）、化粧瓶（15）、化粧瓶の蓋（16）、薬瓶の栓（17）、瓦（18）などがみられる。

年代 他の遺構との重複関係及び出土遺物から、近代の後半もしくは戦時に構築された可能性がある。

【SD 1-2】

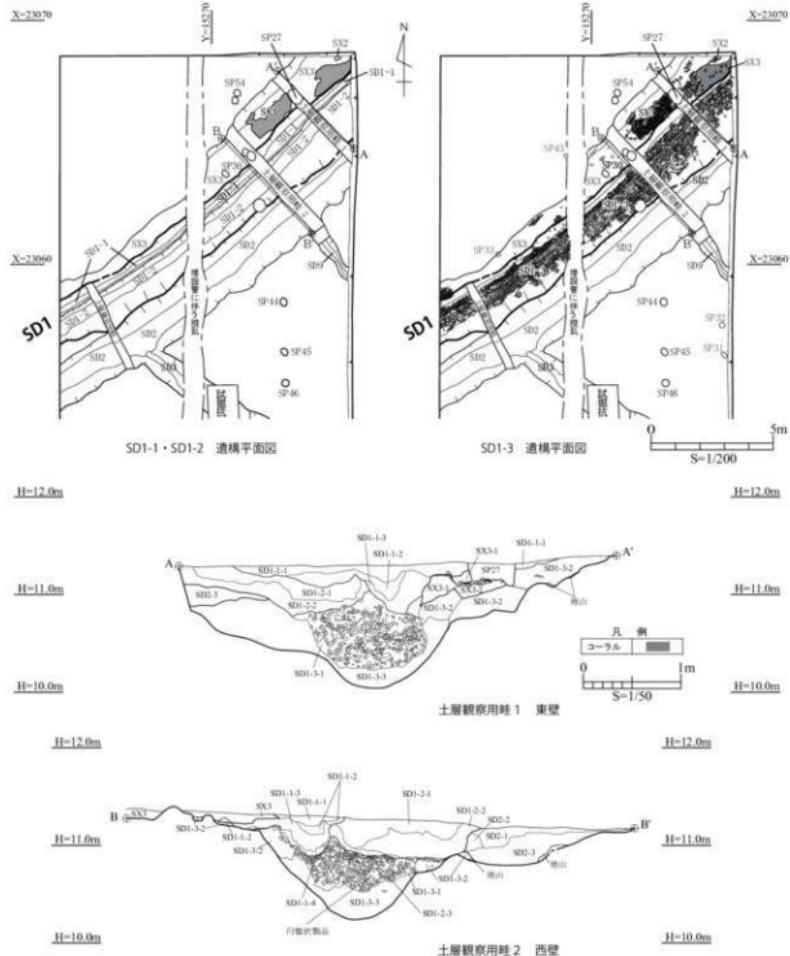
重複関係 SD1-3 と SD2 を切るが、SD1-1・SP27 に切られる。

形状・規模 北側は SD1-3 により残されていないが、南側の残存部より断面はすり鉢状と推定される。残存する幅のうち最大で 1.87m、深さ最大 0.4m。

覆土 基本層序 II-2 層が堆積し、3 層に細分可能である。

遺物 SD2 と判別ができるなかった資料（SD1-2・SD2）を含めると、人工遺物 169 点、貝類 18 点、動物骨 8 点が出土した。主な遺物として、中国産陶磁器には 15c 後半～16c 前半の青磁皿（19）、中国産陶磁器には徳化窯産で 18c～19c の白磁杯（20）、沖縄産陶器には施釉陶器の瓶（21）、壺か瓶類（22）が確認された。ほかに新寛永錢（23）、プラスチック製歯ブラシ（24）などがみられる。

年代 出土遺物及び周辺遺構との重複関係から、近世に構築・使用され、近代前半の頃には廃絶されたと推定される。



第22図 SD1 遺構平面図・土層観察用畦立面図

第1表 SD1 土層観察表

層名	土色・質	記号	粘性	繊り	粒子	混入物	備考
SD1-1-1	暗褐色砂質シルト	7.5YK3/4	有	弱		マンガン粒多	戦中・戦後に堆積か。
SD1-1-2	暗褐色シルト	7.5YK3/4	弱	やや有		炭・陸生貝	
SD1-1-3	褐色シルト	7.5YK4/4	弱	強		炭	
SD1-2-1	褐色シルト	7.5YK4/4	弱	弱	粗	φ1mm程の炭・石灰岩粒・微細陸生貝 片多	
SD1-2-2	褐色土	7.5YK4/4	弱	やや有		φ1mm程の炭・赤土・石灰岩粒	
SD1-3-1	レキ・褐色土混層	10YK4/4	有	有		炭・微細貝混	こぶし大レキ主体
SD1-3-2	にぶい黄褐色土	10YK4/3	弱	やや有	粗粒	炭・赤土	
SD1-3-3	褐色土	10YK4/4	有	有		炭多	



SD1-1 完掘状況写真（北東から）



SD1-2 完掘状況写真（北東から）



SD1-3 完掘状況写真（北東から）

第23図 SD1 完掘状況写真

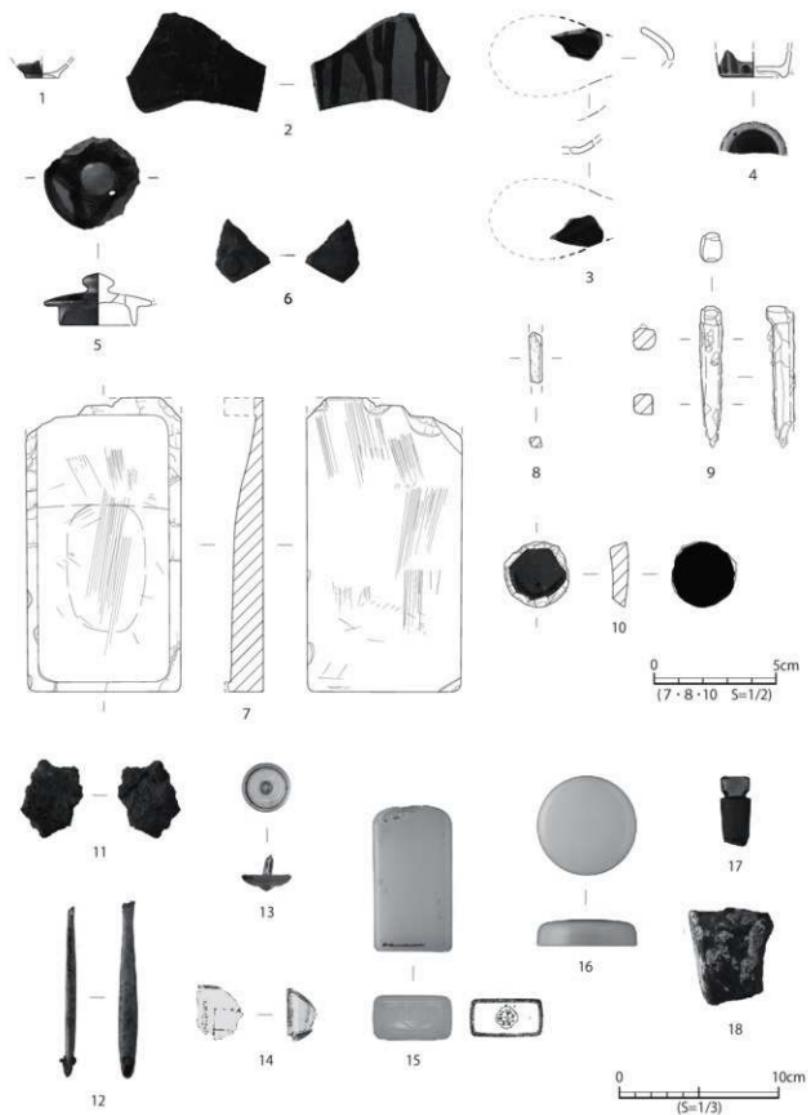


SD1 土層観察用畦1 断面写真 (北東から)



SD1 土層観察用畦2 断面写真 (南西から)

第24図 SD1 土層観察用畦 断面写真



第25図 SD1、SD1-1 出土遺物

第2表 SD1-1 出土遺物観察表

揭露番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考
第25図 1	0627 SD1 レキ内	中国産 磁器	環瑠縄	小杯 底部	口径: - 器高: - 底径: (2.0)	1.2	胎土:白色/粗 胎面:(内)透明、外)瑠縄釉 調整:型作り 産地(年代):徳化(18c~19c)	
第25図 2	0626 SD1	日本産 陶磁器	施釉	蓋	-	56.4	胎土:灰色/砂混 胎面:(内・外)褐色(赤どけ) 調整:被覆 産地(年代):丹波(19c~20c)	
第25図 3	0626 SD1 レキ内	日本産 陶磁器	施釉	蓋華	-	4.6	胎土:卵黄白色 胎面:(内・外)黄色 調整:型作り 産地:平塚	
第25図 4	0626 SD1 レキ内	日本産 陶磁器	施釉	鉢 底部	口径: - 器高: - 底径: 3.8	7.0	胎土:卵黄白色 胎面:(内・外)瑠縄釉 調整:型作り、豊村釉引き	
第25図 5	0627 SD1	沖繩産 陶器	施釉	急須?	底端: (6.6) 器高: 4.8 一部欠損	36.6	胎土:明褐色 胎面:(外)筋釉 文様:外)区画文・團扇文 調整:据根部穿孔	円盤状製品の未成品か
第25図 6	0626 SD1	瓦質 土器	-	蓋	口径: - 器高: 3.2 底径: 1.95	15.3	胎土:赤褐色/軟質 文様:丸文 調整:磨き	

揭露番号	出土位置	遺物種別	分類	器種状態	法量(cm)	重量(g)	素材	観察事項	備考
第25図 7	0627 SD1	石製品	文具	石硯 一部欠損	最大長:120.5 最大幅:64 最大厚:15.5	182.3	頁岩	加工痕:研磨 使用痕:研磨	
第25図 8	0626 SD1 レキ内	木製品	-	箋 破片	最大長: - 最大幅:4	0.5	木	加工痕:研磨	
第25図 9	0626 SD1 レキ内	金属 製品	肆材	舟釘 一部欠損	最大長:87 最大幅:13 最大厚:12	45.0	鉄	加工痕:鋸造	頭部厚:18mm
第25図 10	0627 SD1-1	円盤状 製品	-	略円形 完形	外:径:26.4 最大厚:7.5	6.8	沖綱陶 施釉陶器 脣部	加工痕:打削(両)	
第25図 11	0626 SD1-1	炉壁	-	炉壁 破片	-	26.1	土製	使用痕:鉄滓付着	
第25図 12	0627 SD1	骨 用品	衛ブラシ	一部欠損	-	8.6	骨	加工痕:研磨、穿孔	針残
第25図 13	0627 SD1	ガラス 製品	道具	強楽 完形	-	6.2	透明 ガラス	加工痕:溶着痕・擬部バリ痕	擬部斜め
第25図 14	0627 SD1 レキ内	ガラス 製品	薬瓶	不明 破片	-	4.0	透明 ガラス	銘:「大学病院品」	
第25図 15	0627 SD1	ガラス 製品	化粧瓶	化粧水瓶 一部欠損	-	99.2	白不透明 ガラス	銘:花椿(誕生堂1921~)	現存:胴~底部
第25図 16	0627 SD1	ガラス 製品	化粧瓶	不明・蓋 完形	-	48.4	半透明 ガラス	加工痕:使用痕:なし	
第25図 17	0626 SD1 レキ内	ガラス 製品	薬瓶	不明・栓 一部欠損	-	23.1	青緑 ガラス	加工痕:栓部擦ガラス	
第25図 18	0626 SD1 レキ内	瓦	近代 大和系	平瓦 端部	-	61.9	色調:灰色	漆喰付着	



第26図 SD1-2 出土遺物

第3表 SD1-2 出土遺物観察表

規範 番号	出土 位置	遺物 種別	分類	器種 部位	法量 (cm)	重量 (g)	観察事項	備考
第26回 19	0627 SD1-2	中国産 磁器	青磁	口縁部	-	2.3	胎土: 鄕黄白色 産地(年代): 潤京(瀬戸)ほかAT類(15c後~16c前) 釉面: ガラス質 内・外: 透明	菊花皿
第26回 20	0627 SD1-2	中国産 磁器	白磁	杯	-	2.3	胎土: 白色 産地(年代): 德化(18c~19c)	
第26回 21 -SD2	0626 SD1-2	沖縄産 陶器	施釉 陶器	瓶 底部	口径: 器高: 底径:(3.2)	20.8	胎土: 灰色/白色堅力が乏しく 内: 調整: 備考: 先端あり、腰まで遮船。外底に 底: 黒釉 土付着	
第26回 22	0627 SD1-2	沖縄産 陶器	施釉 陶器	壺 底部	-	116.1	胎土: 灰白色 内: 黑釉 外: 黑釉 調整: 備考	

規範 番号	出土 位置	遺物 種別	分類	器種 状態	法量 (mm)	重量 (g)	素材	観察事項	備考
第26回 23	0627 SD1-2	銭貨	-	寛永通寶 (新) 一部欠損	外縁: 外径23.2 /内径18.3 内郭: 外径7.5 /内径6.1 外縁: 厚1.2 文字面厚: 0.8	1.6	銅	銘: 「寛永通」	
第26回 24	0627 SD1-2	歯	衛生 用品	歯ブラシ 完形	-	5.9	プラス チック	加工痕: 穿孔 銘: 「高級」	針残

【SD 1-3】

重複関係 SD2・SX3に切られる。

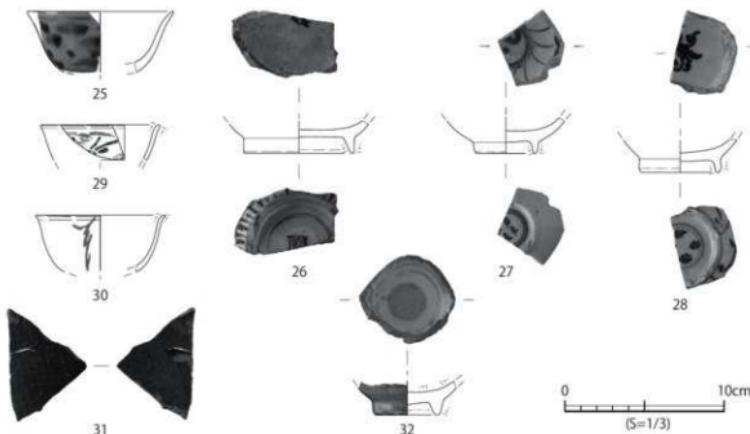
形状・規模 上部はSD1-1・1-2・SD2・SX3に切られて残っていないが、残されている下部の断面形状はすり鉢状である。残存する幅のうち最大で1.87m、深さ最大0.85m。

覆土 こぶし大の琉球石灰岩礫が充填されたSD1-3-1層と、基本層II-2層に相当するSD1-3-2の2層が堆積している。

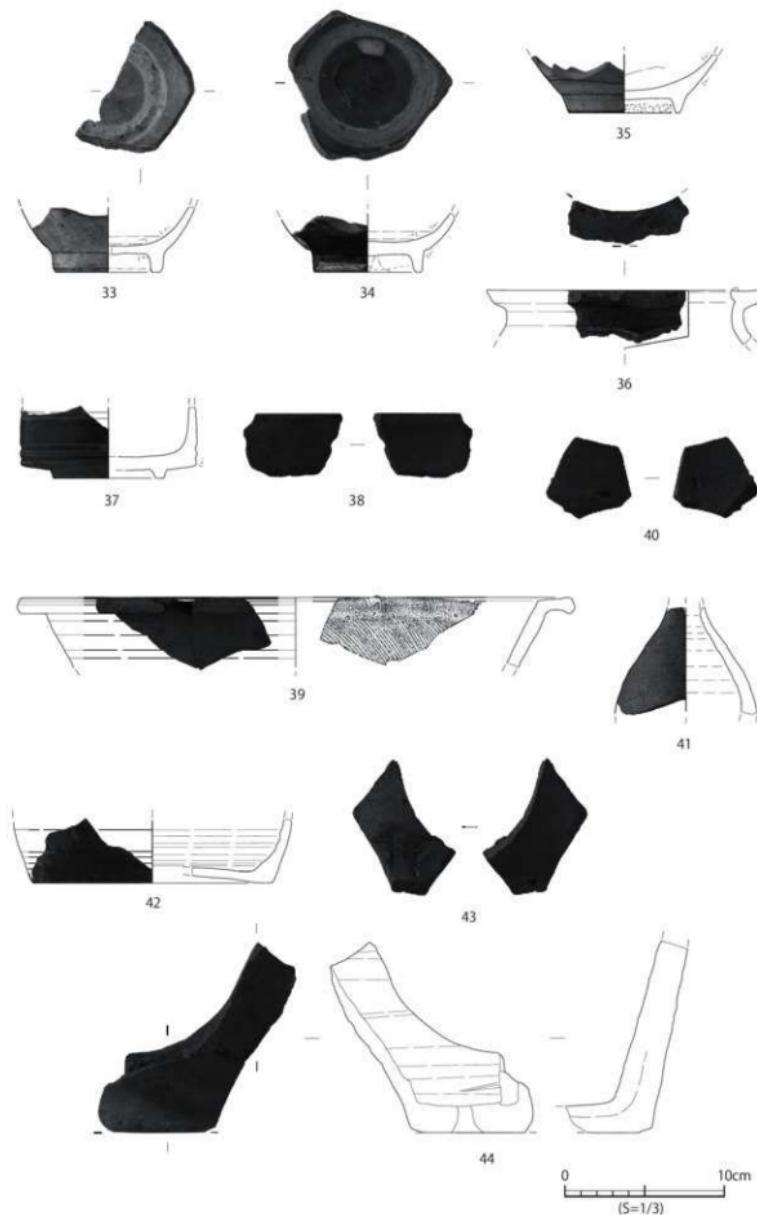
遺物 人工遺物493点、貝類90点、動物骨3点が出土した。主な遺物として、中国産陶磁器には18cの

徳化窯青花碗(25-28)と19cの色絵碗(29・30)、無釉陶器の壺(31)など、沖縄産陶器には施釉陶器の碗(32-35)、壺(36)、火炉(37)、無釉陶器の水鉢(38)、描跡(39・40)、徳利(41)、壺か甕(42-46)、瓦質土器の火炉(47)、陶質土器には鉢(48-49)、火炉(50)が確認された。ほかに敲石類(51-52)、新寛永銭(53)、円盤状製品(54-58)、炉壁(59)、瓦(60-64)、埠(65)などがみられる。明確に近代と目される資料がない点が特徴である。

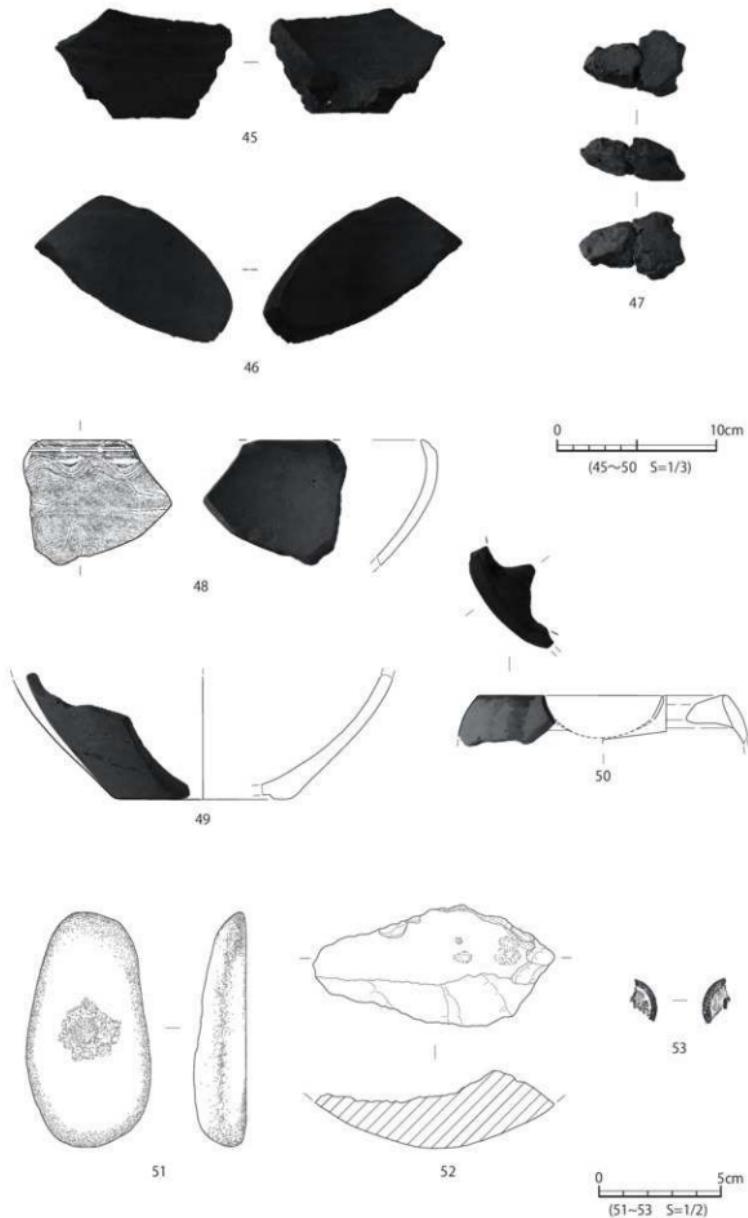
年代 覆土中の遺物に明確な近代の資料がみられないため、近世には利用・廃絶されたと理解される。



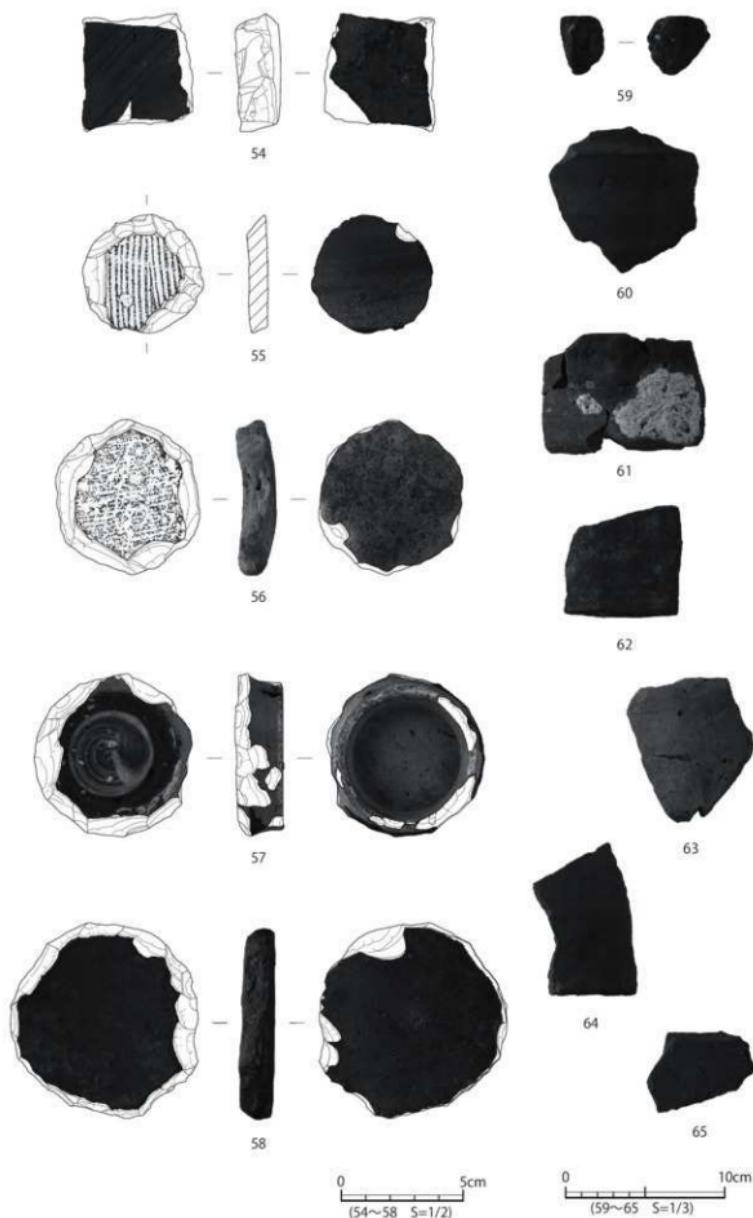
第27図 SD1-3 磬内出土遺物 (1)



第28図 SD1-3 磁内出土遺物（2）



第29図 SD1-3 碟内出土遺物（3）



第30図 SD1-3 碟内出土遺物 (4)

第4表 SD1-3 出土遺物観察表 (1)

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考
第27回 25	0627 SD1-3 レキ内	中国産 磁器	青花	碗 口～胸	口径: (9.1) 脚高: - 底径: -	12.8	胎土:灰白色/粗 釉薬:内・外)透明 文様:草花文 調整:無軸	産地(年代):徳化(18c)
第27回 26	0626 SD1-3 レキ内	中国産 磁器	青花	碗 底部	口径: - 脚高: - 底径: (6.6)	29.0	胎土:白色 釉薬:内・外)青白色 文様:見込)仙芝祝寿文 調整:無軸、足付釉剥ぎ	黄褐色に変色、 円盤状製品か
第27回 27	0626 SD1-3	中国産 磁器	青花	碗 底部	口径: - 脚高: - 底径: (3.6)	20.0	胎土:白色 釉薬:内・外)青白色 文様:見込)仙芝祝寿文 調整:足付釉剥ぎ	産地(年代):徳化(18c) 印鑑:あり
第27回 28	0626 SD1-3	中国産 磁器	青花	碗 底部	口径: - 脚高: - 底径: (4.7)	24.8	胎土:白色 釉薬:内・外)青白色 文様:仙芝祝寿文 調整:足付釉剥ぎ	産地(年代):徳化(18c) 印鑑:あり
第27回 29	0626 SD1-3 レキ内	中国産 磁器	色絵	碗 口縁部	口径: (7.4) 脚高: - 底径: -	3.0	胎土:白色 釉薬:内・外)透明 文様:外)花文	産地(年代):徳化(19c)
第27回 30	0626 SD1-3	中国産 磁器	色絵	碗 口～胸	口径: (8.0) 脚高: - 底径: -	9.0	胎土:白色 釉薬:内・外)透明 文様:外)文字大	調整:無軸 産地(年代):徳化(19c)
第27回 31	0627 SD1-3 レキ内	中国産 陶器	無釉 陶器	壺 胴部	-	30.9	胎土:灰色/砂混 調整:敲き目	
第27回 32	0627 SD1-3	沖浦產 陶器	無釉 陶器	碗 底部	口径: - 脚高: - 底径: 3.9	40.7	胎土:灰白色 釉薬:内・外)透明、貫入あり 調整:足付に泥漿付着、兜巾あり、見込蛇の目状 釉剥ぎ	
第28回 33	0627 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	碗 底部	口径: - 脚高: - 底径: (6.4)	58.8	胎土:にぶい黄褐色/黒色粒々かに含 釉薬:内)透明、 外)バブル、透明 調整:白化性、足付無釉剥ぎ。 見込蛇の目状釉剥ぎ	
第28回 34	0627 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	碗 底部	口径: - 脚高: - 底径: 6.7	127.0	胎土:にぶい黄褐色/黒色粒々かに含 釉薬:内)透明、 外)バブル、透明 調整:足付に泥漿、砂付着 見込蛇の目状釉剥ぎ	
第28回 35	0626 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	碗 底部	口径: - 脚高: - 底径: 6.8	120.5	胎土:灰白色 釉薬:内・外)透明 調整:足付に泥漿、砂付着	
第28回 36	0626 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 口縁部	口径: (17.0) 脚高: - 底径: -	41.3	胎土:灰色/砂混 釉薬:内・外)陶袖 調整:口縁部に重ね焼き痕	
第28回 37	0626 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	火炉 底部	口径: - 脚高: - 底径: (6.8)	85.6	胎土:褐色 釉薬:外)陶袖	
第28回 38	0626 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	水鉢 口縁部	-	35.2	胎土:褐色/微密 釉薬:無軸	
第28回 39	0626 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 口縁部	口径: (34.4) 脚高: - 底径: -	76.3	胎土:にぶい赤褐色	
第28回 40	0626 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 胴部	-	30.6	胎土:赤褐色	貝压痕あり
第28回 41	0627 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 胴部	口径: - 脚径: (8.8) 底径: -	54.3	胎土:にぶい赤褐色 調整:無軸	
第28回 42	0627 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 底部	口径: - 脚高: - 底径: (14.8)	57.0	胎土:明赤褐色/白色粒含む 調整:無軸	
第28回 43	0626 SD1-3	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 胴部	-	75.5	胎土:褐色/微密 調整:無軸	
第28回 44	0626 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 底部	-	259.9	胎土:褐色 調整:無軸	断面一部に裂け 目あり。
第29回 45	0626 SD1-3 レキ内	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 底部	-	249.2	胎土:褐色/微密 調整:無軸、刷毛、磨き	
第29回 46	0626 SD1-3	沖浦產 陶器	無釉 陶器	壺 胴部	-	136.8	胎土:褐色/微密 調整:無軸	

第5表 SD1-3 出土遺物観察表 (2)

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考	
第29回 47	0627 SD1-3 レキ内	瓦質 土器	-	火炉 胴部	-	38.0	粘土:黄褐色/赤キミ混 調整:磨き	福モミ庄庭12ヶ所	
第29回 48	0627 SD1-3 レキ内	陶質 土器	-	鉢 口縁部	-	65.5	粘土:橙色/白色粒・黑色粒・赤色粒・多量のガラス質粒・文様:波形文		
第29回 49	0626 SD1-3 レキ内	陶質 土器	-	鉢 底部	口径: - 器高: - 底径:(10, 8)	151.1	粘土:にぶい黄褐色		
第29回 50	0627 SD1-3 レキ内	陶質 土器	-	火炉 口縁部	口径:(15, 4) 器高: - 底径: -	30.9	粘土:橙色/赤色粒混入		
掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種状態	法量(mm)	重量(g)	素材	観察事項	備考
第29回 51	0627 SD1-3 レキ内	石器	-	戴石類 完形	最大長:96 最大幅:51 最大厚:21.5	140.4	細粒砂岩	使用痕:敲打	
第29回 52	0626 SD1-3	石器	-	戴石類 破片	-	230.5	輝緑岩	使用痕:敲打・研磨	
第29回 53	0626 SD1-3 レキ内	鐵貨	寛永通寶 (銅)破片	外 内 外銘厚:1.4 文字面厚:0.9	0.9	銅	銘:「通」		
第30回 54	0627 SD1-3	円盤状 製品	-	方形 完形	最大長:48.2 最大幅:45.5 最大厚:15	36.7	沖繩產 無釉陶器 胴部	加工痕:打削(内)	
第30回 55	0626 SD1-3	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径:49 最大厚:8.5	25.6	沖繩產 無釉陶器 胴部	加工痕:打削(外)	
第30回 56	0627 SD1-3 レキ内	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径:61.3 最大厚:14	53.8	瓦 胴部	加工痕:打削(内)	
第30回 57	0627 SD1-3 レキ内	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径:65.5 最大厚:20.5	70.5	沖繩產 無釉陶器 底部(發付有)	加工痕:打削(内)	
第30回 58	0626 SD1-3	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径:78.5 最大厚:15	119.7	沖繩產 無釉陶器 胴部	加工痕:打削(外)	
第30回 59	0626 SD1-3	炉壁	-	炉壁 破片	-	25.2	土製	使用痕:なし	
第30回 60	0626 SD1-3 レキ内	瓦	明朝系	丸瓦 玉縁部	-	148.2	色調:赤色	-	
第30回 61	0627 SD1-3 レキ内	瓦	明朝系	丸瓦 端部	-	169.5	色調:赤色	漆喰付着	
第30回 62	0627 SD1-3 レキ内	瓦	明朝系	丸瓦 端部	-	98.8	色調:赤色	-	
第30回 63	0627 SD1-3 レキ内	瓦	明朝系	平瓦 端部	-	143.5	色調:灰色	-	
第30回 64	0626 SD1-3	瓦	明朝系	丸瓦 端部	-	114.2	色調:灰色	-	
第30回 65	0627 SD1-3 レキ内	搏	-	組合わせ式 角部	-	74.5	色調:赤色		

第6表 SD1 出土遺物集計表

番号 遺構	グリッド	先史 土器	中國產 陶器	日本產 陶器	沖縄產 埴輪器	沖縄產 無釉陶器	陶質 土器	瓦質 土器	石器	石製品	石造物	石材	木製品	度
SD1	0526		4	1	2	3								
	0527		3	3	4	6								1
	0625					1								
	0626		9	15	26	10	8	1					2	
	0627		12	12	56	30	14				1		6	1
	—													
SD1 レキ内	0426		2	1	9								2	2
	0624				1									
	0626		5	10	10	3	5					1	1	
	0627		2	5	16	8	2							
SD1-1	0527					1								
	0626		4	1	16	7	2					3		
	0627		3	6	9	3	4					1		
SD1-2	0526		1				1							
	0626			1	5							1		
	0627		11	9	26	12	13					6		
SD1-2 レキ内	0626				1									
	0526		1	1	3	2								
	0626		6	4	16	5	2					2		
SD1-2 ・SD2	0627		1	1	2	3								
	0626		1	5	7	15	1	1				10		
	0627		2		14	8	2					11		
SD1-3 ユカチヨク	0627											1		
	0626		7	2	33	39	8					21		
SD1-3 レキ内	0627		11	1	49	51	14	1	1			1	33	
	合計		1	89	73	305	207	76	2	2	1	1	102	1
														4

番号 遺構	グリッド	金属 製品	銭貨	円盤状 製品	炉壁	鉄津	ガラス 製品	磁器 製品	歯ブ ラシ	瓦	場	レンガ	漆喰	合計
SD1	0526	3				1		1		2				17
	0527													17
	0625													1
	0626	1		2			6	1		11		1	93	
	0627	1		4			7	2	1	10		1	1	159
	—	1								2				3
SD1レキ内	0426	3		1	1					2				23
	0624													1
	0626	6					1			5			46	
	0627	5		1			6	1		8			56	
SD1-1	0527													1
	0626				1	1				2	9			47
	0627	2		2				1		1				32
SD1-2	0526													2
	0626													7
	0627	3		1			1	1	1	13				97
SD1-2 レキ内	0626													1
	0526	1		2				1						11
	0626	1		2						4				42
SD1-2 ・SD2	0627	2												9
	0526													
	0626													
SD1-3	0626				4	1				14				59
	0627			5						20				62
	0627									1				2
SD1-3 ユカチヨク	0627													
	0626			1	8					31				150
SD1-3 レキ内	0627			11						46	1			220
	0627													1158
合計		24	4	46	3	1	21	7	5	179	1	1	2	

第7表 SD1 出土貝類集計表(巻貝)

部 分	科 名	属種名	層位・遺構・グリッド			SD1-2			SD1-3・SD2			SD1-4			SD1-5・内			SD1-6			SD1-7		
			0626	0627	0628	0626	0627	0626	0627	0626	0627	0626	0627	0626	0627	0626	0627	0626	0627	0626	0627		
巻 貝 類	ニシキウズ科	ニシキウズ	1-1-a																				
		ギンカカツマ	1-1-a																				
		サシカハリマ	1-1-a																				
	セイカガイ科	セイカガイ	1-1-a																				
		セイカガラ	1-1-a																				
	サザエ科	サザエ	1-1-a																				
		サザエカツマ	1-1-a																				
		チャコウサザエ	1-1-a																				
		チャコウサザエカツマ	1-1-a																				
		セイカガイ	1-1-a																				
殻 巻 貝	アマオブカガイ科	アマオブカガイ	1-1-a																				
		アマオブカガイ	1-1-a																				
		オニノゾノガイ	1-1-a																				
	オニノゾノガイ科	ヒタカラノミニモリ	1-1-a																				
		ヒタカラノミニモリ	1-1-a																				
	ウニコナ科	ウニコナ	1-1-a																				
		イボウコナ	1-1-a																				
	セハクニナ科	セハクニナ	1-1-a																				
	ソザボラ科	ソザボラ	1-1-a																				
		ソザボラ	1-1-a																				
殻 巻 貝	ヒメルムカタラク	ヒメルムカタラク	1-1-a																				
	チカラゼイ科	チカラゼイ	1-1-a																				
		ハバカラゼイ	1-1-a																				
	タカウゼイ科	タカウゼイ	1-1-a																				
		タカウゼイ	1-1-a																				
	フジワガ科	フジワガ	1-1-a																				
	イトマボコ科	イトマボコ	1-1-a																				
		オハラブジ	1-1-a																				
	オハロブジ科	オハロブジ	1-1-a																				
	アッキガイ科	アッキガイ	1-1-a																				
殻 巻 貝	サザエ科	サザエ	1-1-a																				
		サザエカツマ	1-1-a																				
		チャコウサザエ	1-1-a																				
	ウニコナ科	ウニコナ	1-1-a																				
		リュウムウコナ	1-1-a																				
	セハクニナ科	セハクニナ	1-1-a																				
	ソザボラ科	ソザボラ	1-1-a																				
		ソザボラ	1-1-a																				
	タカウゼイ科	タカウゼイ	1-1-a																				
		タカウゼイ	1-1-a																				
殻 巻 貝	フジワガ科	フジワガ	1-1-a																				
	イトマボコ科	イトマボコ	1-1-a																				
		ツノマカドコ	1-1-a																				
	オハロブジ科	オハロブジ	1-1-a																				
	アッキガイ科	アッキガイ	1-1-a																				
		ブンボクガ科	1-1-a																				
	イセカツマ科	イセカツマ	1-1-a																				
		マダガイ科	1-1-a																				
	イセカツマ科	イセカツマ	1-1-a																				
	ウニコナ科	ウニコナ	1-1-a																				
殻 巻 貝	ト明	ト明																					
	ウニコナ科	ウニコナ	1-1-a																				
合計			3	1	4	2	0	0	1	1	4	3	11	5	2	12	9	10	1	0	34	14	
小計																							
合計																							

第8表 SD1 出土貝類集計表（二枚貝）

第9表 SD1 出土動物遺存体集計表

組	科名	種名	部位	部分	遺存・遺構・グリッド			SD1	SD1-2	SD1-3	SD1レキ内	SD1-I
					0626	0627	不明					
哺乳類	—	イノシシ/ブタ	尺骨	近位部								
		イノシシ/ブタ?	中手骨/中足骨	骨幹部～遠位部								
		ブタ?	脛骨	遠位部?								
		ブタ?	胫骨	近位部～遠位部				1				
		ヤギ	上腕骨	骨幹部～遠位部								
		ヤギ?	胫骨	近位部								
		ヤギ?	大腿骨	骨幹部								
		ヤギ?	椎骨	椎体								
		不明	肱骨	骨幹部				1				
		不明	四肢骨	骨幹部								
軟骨魚綱	—	サメ類	不明	—								
		硬骨魚綱	ワニ科/イシダイ科	椎骨	椎体	—	1					
		不明	前上顎骨	—								
		合計			1	2	1	4	1	1	2	1
哺乳類	—	—	部位	部分	遺存・遺構・グリッド			SD1-2	SD1-2	SD1-3	SD1-3レキ内	SD1-3
					0526	0626	0627	0526	0626	0627	0626	0627
					—	II?	—	E	—	—	E	—
								1				
									1			
										1		
										1		
										1		
										1		
										1		
軟骨魚綱	—	サメ類	椎骨	椎体	—							
		硬骨魚綱	ワニ科/イシダイ科	前上顎骨	—							
		不明	合計		2			2		1		2
					2	1	1	1	1	2	1	1

(2) SD 2~9

【SD 2】

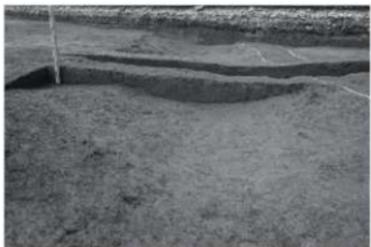
位置・重複関係 0526・0527・0627 の3つのグリッドにまたがって検出された。SD1-2を切る。遺構の軸はS-32 ~ 38° Eで、SD1 にはば平行する。

形状・規模 断面はすり鉢状。残存するうち幅最大2.18m、深さ最大0.4m。

覆土 基本層序II-2層が堆積し、3層に細分できる。

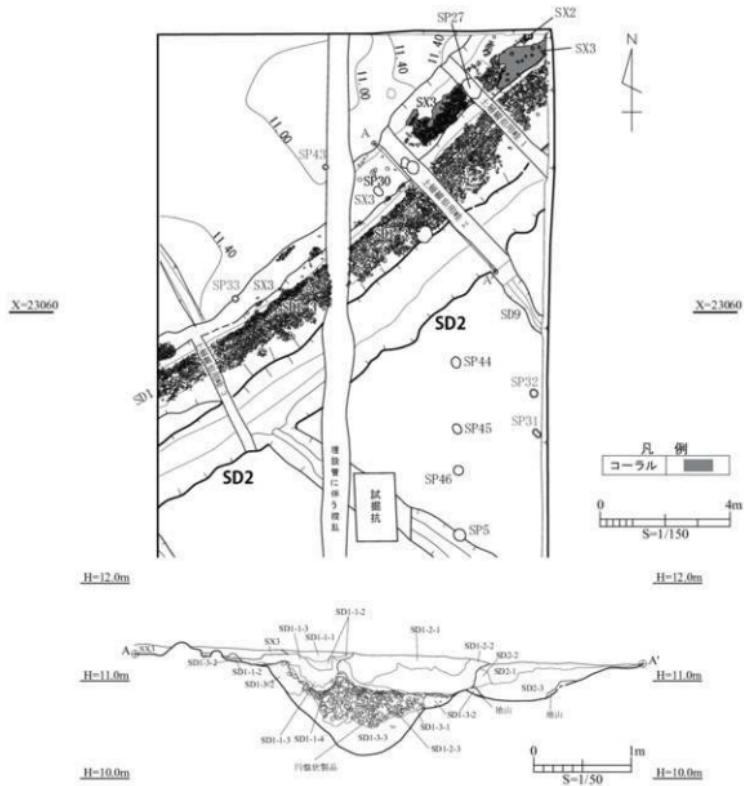
遺物 人工遺物36点、貝類3点、動物骨1点が出土した。主な遺物として、日本産で瀬戸美濃系19c ~ 20cの白磁皿(66)。

年代 覆土中の遺物及びSD1-2との重複関係より、近世のSD1-3廃絶以降に構築、近代まで利用されたとみられる。



SD2 土層観察用畦3 断面写真（北東から）

第31図 SD2 土層観察用畦 断面写真



第32図 SD2 遺構平面図・土層観察用畦立面図

第10表 SD2 土層観察表

層名	土色・質	記号	粘性	繊り	粒子	混入物	備考
SD2-1	褐色シルト	7.5YK4/4	有	弱		炭・焼土	
SD2-2	褐色シルト	7.5YK4/4	有	有		炭・焼土	
SD2-3	褐色シルト	7.5YK4/4	有	有		炭・赤土小ブロック	



第33図 SD2 出土遺物

第11表 SD2 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考
第33図 66	SD2 0627	日本産 陶磁器	近世 磁器 白磁	皿 口縁部	-	1.8	胎土:白色/ガラス質 釉薬:内・外透明 調整:型作り 产地(年代):瀬戸美(19c ~ 20c)	

【SD 3】

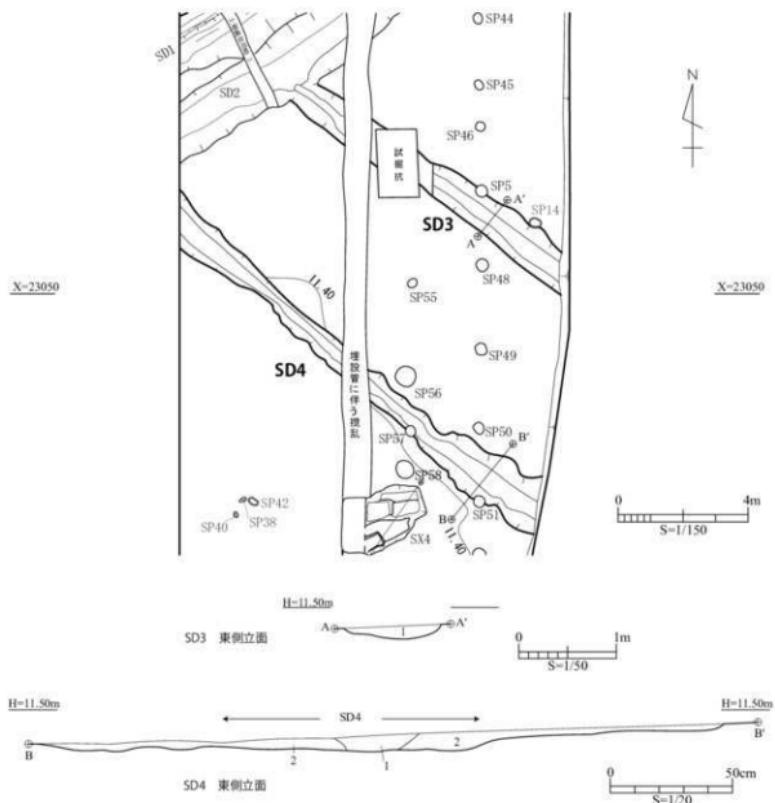
位置・重複関係 0526・0527の2つのグリッドにまたがって検出された。SD2に切られる。遺構の軸はおよそN-35°Eで、SD1に直行し、SD4・6・7・9に平行する。

形状・規模 断面はすり鉢状。最大幅0.94m、最大深度0.14m。極めて浅いため、後世の改変行為により上部が削平されている可能性がある。

覆土 基本層序II・2層が堆積する。

遺物 貝類1点のみ。

年代 ほかのSDとの関係性を考慮すると、近世に構築され、近代まで利用されたとみられる。



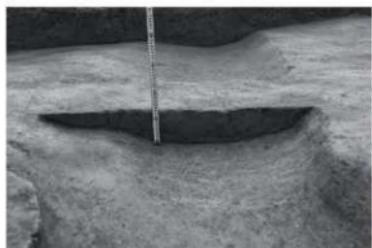
第34図 SD3、SD4 遺構平面図・断面図

第12表 SD3、SD4 土層観察表

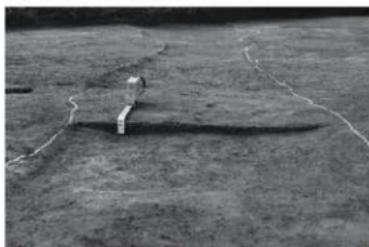
層名	土色・質	記号	粘性	繊り	粒子	混入物	備考
SD3	褐色シルト	10YK4/6	ほぼ無	弱	粗	炭・燒土まばら	近世・近代遺物出土
SD4-1	褐色砂質シルト	7.5YK4/6	ほぼ無	弱	粗		
SD4-2	褐色シルト	7.5YK4/4	弱	やや有	粗		



SD3 西側断面写真 (南東から)



SD3 東側断面写真 (北西から)



SD4 西側断面写真 (南東から)



SD4 東側断面写真 (北西から)

第35図 SD3、SD4 断面写真

【SD 4】

位置・重複関係 0426・0427・0526の3つのグリッドにまたがって検出された。SD2に切られる。遺構の軸はおよそN-40°Eで、SD3・6・7・9に平行し、SD2・5に直行するとみられる。

形状・規模 断面はすり鉢状。最大幅1.04m、最大深度0.08m。極めて浅いため、後世の改変行為により上部が削平されている可能性がある。

覆土 基本層序II-2層が堆積する。

遺物 人工遺物25点、貝類2点が出土した。図示しなかったが、日本産陶磁器には近代の資料が含まれる。

年代 覆土中の遺物や他のSDとの関係性より、近世に構築され、その後近代まで利用されたとみられる。

【SD 5】

位置・重複関係 0327・0427の2つのグリッドにまたがって検出された。遺構の軸はおよそS-41°Eで、SD1・2に平行し、SD3・4・6・7・9に直行するとみられる。

形状・規模 断面はすり鉢状。最大幅1.06m、最大深度0.15m。極めて浅いため、後世の改変行為により上部が削平されている可能性がある。

覆土 基本層序II-2層が堆積する。

遺物 人工遺物2点。

年代 他のSDとの関係性より、近世に構築され、その後近代まで利用されたとみられる。

【SD 6】

位置・重複関係 0326・0327・0426の3つのグリッドにまたがって検出された。遺構の軸はおよそN-29～31°Eで、SD3・4・7・9に平行し、SD5に直行する。SD7と一部重複し、SD6がSD7を切る。

形状・規模 断面はすり鉢状。最大幅1.64m、最大深度0.2m。

覆土 基本層序II-2層が堆積する。

遺物 人工遺物2点。

年代 他のSDとの関係性より、近世に構築され、その後近代まで利用されたとみられる。

【SD 7】

位置・重複関係 0326・0327・0426 の3つのグリッドにまたがって検出された。遺構の軸はおよそ N-33°～45° E で、SD3・4・6・9 に平行し、SD5 に直行する。SD6 に切られる。

形状・規模 断面はすり鉢状。最大幅 1.5m、最大深度 0.8m。

覆土 基本層序 II - 2 層が堆積する。

遺物 人工遺物 4 点が出土した。

年代 覆土中の遺物や他の SD との関係性より、近世に構築され、その後近代まで利用されたとみられる。

【SD 10】

位置・重複関係 0327 グリッドで検出された。遺構の軸はおよそ N-36° E で、SD3・4・6・9 に平行し、SD5 に直行する。SX5 に切られしており、上部は残っていなかった。また、堆積が異なることから別の遺構としたが、位置・方向からは SD6 もしくは SD7 と同一の遺構であった可能性がある。

形状・規模 SX5 に大部分が削平されているため、形状・規模ともに不明。

覆土 こぶし大の小礫が充填。

遺物 人工遺物 12 点が出土した。主な遺物として、沖縄産無釉陶器の甕(67)、陶質土器の蓋(68)、蓋・磨石(69)

年代 近世には利用・廃絶されたと考えられる。



SD5 断面写真 (南西から)

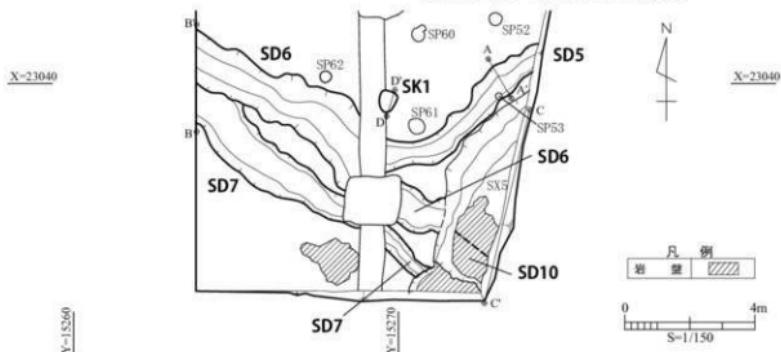


調査区西壁 SD6、SD7 棚出箇所写真 (東から)

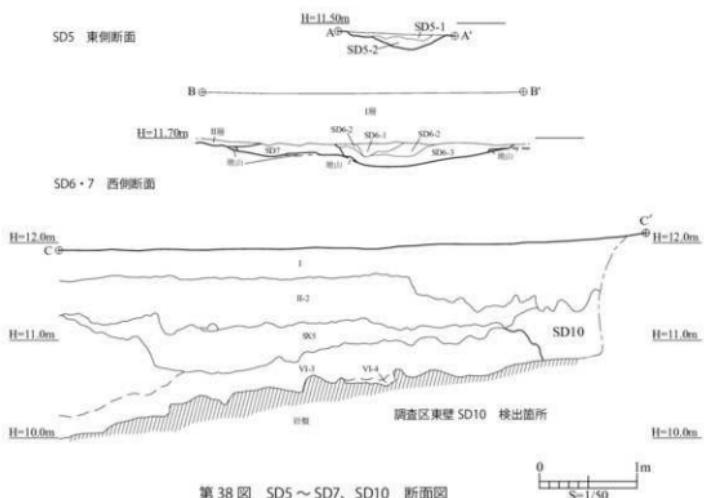


調査区東壁 SD10 棚出箇所写真 (西から)

第 36 図 SD5～SD7、SD10 断面写真



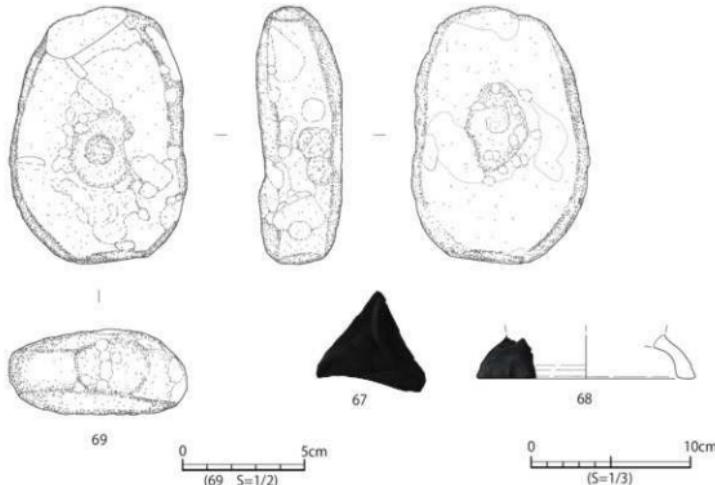
第 37 図 SD5～SD7、SD10、SK1 遺構平面図



第38図 SD5～SD7、SD10 断面図

第13表 SD5～SD7 土層観察表

層名	土色・質	記号	粘性	繊り	粒子	混入物	備考
SD5-1	暗褐色シルト	10YK3/4	やや有	弱	やや粗		
SD5-2	褐色シルト	7.5YK4/4	弱	やや有	やや粗		SD5-1と地山の混層
SD6-1	褐色シルト	10YK4/6	弱	有	粗	マンガン粒	
SD6-2	褐色シルト	10YK4/6	有	弱	粗	マンガン粒	
SD6-3	褐色砂質シルト	10YK4/6	有	弱			
SD7	褐色シルト	10YK4/6	有	有	やや粗	赤土	



第39図 SD10 出土遺物

第14表 SD10 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考
第39回 67	0327 SD10	沖縄陶 陶器	無釉 陶器	甕 胴部	-	52.3	粘土:褐色 文様:貼付け草花文 調整:輪幅	
第39回 68	0327 SD10	陶質 土器	-	蓋 端部	端径:(13,4) 高さ:- 底径:-	31.3	粘土:明赤褐色/白色粒をわずかに含む	貝压痕あり
第39回 69	0327 SD10	石器	-	敲石類 完形	最大長:105 最大幅:73 最大厚:35	381.0	細粒砂岩 使用痕:敲打	

第15表 SD 出土遺物集計表

順序 遺構	グリッド 面積	中面層 陶器層	日本面 陶器層	沖縄層 漆器陶器 無釉陶器	沖縄層 漆器陶器 無釉陶器	陶質 土器	石器	石材	金属 製品	円盤状 製品	瓦	合計
SD2	0527	2	2	1						1	1	7
	0627	3	2	10	3	2	2	1	1	5	29	
	合計	5	4	11	3	2	2	1	2	6	36	
SD4	0427	1	1	11	3				1	2	19	
	0526	1		1	1	1				1	5	
	—	1									1	
SD5	合計	3	1	12	4	1	1	1	3		25	
	0427			1							1	
	0527			1							1	
SD6	合計			2							2	
	0326			1							1	
	0626			1							1	
SD7	合計		1	1							2	
	0326	2		1							1	4
	—	2		1							1	4
SD10	0327		2	2	3	1	3				1	12
	合計		2	2	3	1	3				1	12

第16表 SD 出土貝類集計表

(巻貝)	順序・遺構・グリッド	SD2 0627	SD4 0427	SD7 0326	SD10 0327	小計	合計
腹足 サザエ科	セコウガイ サザエ科	1-4-a				1	1
	チョウセンサザエ属	1				1	1
	シデボラ科	1-2-c				2	2
合計		1 0 0	1 0 0	1 0 0	1 0 0	3 1 0	4

(二枚貝)

順序・遺構・グリッド	SD2 0627	SD3 0627	SD4 0126	小計	合計
一枚貝 ツキガイ科	完形 敲頭 破片	完形 敲頭 破片	完形 敲頭 破片	1	1
	II-1-c	II-1-c	II-1-c	2	2
	II-2-c			1	1
合計	0 2 0 0	0 0 0 0 1	0 0 0 0 0	1 0 2 0 1	4

第17表 SD2 出土動物遺存体集計表

順序・遺構・グリッド	SD2 0627	合計
哺乳類	一 ブタ 豚骨	1 1
合計	1 1	

【SD 9】

位置・重複関係 0527・0627の2つのグリッドにまたがって検出された。遺構の軸はおよそ S-52・53° E で、SD3・4・6・7・8に平行し、SD2に直行する。

形状・規模 断面はすり鉢状。最大幅0.52m、最大深度0.6m。SD1・2に比して浅い。

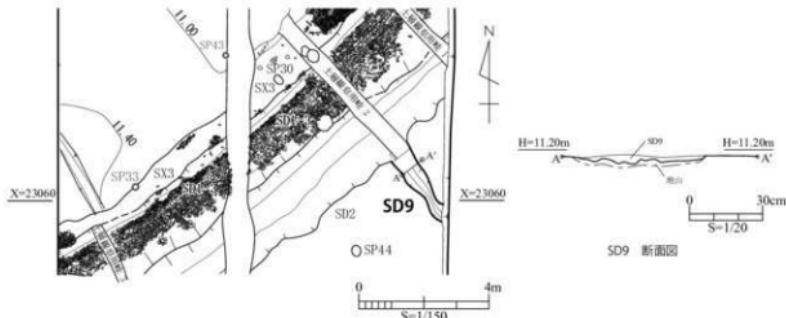
覆土 基本層序II-2層が堆積する。

遺物 なし。

年代 他のSDとの関係性より、近世に構築され、その後近代まで利用されたとみられる。



第40図 SD9 断面写真（南東から）



第41図 SD9 遺構平面図・断面図

第18表 SD9 土層観察表

層名	土色・質	記号	粘性	練り	粒子	混入物	備考
SD9	暗褐色シルト層	10YK3/4	弱	弱		炭・焼土粒主ばら	

覆土 基本層序I層が堆積する。

遺物 SP5からは人工遺物6点。SP27からは人工遺物21点と貝類3点が出土し、日本産の色絵碗(70)、磁器碗(71)、陶質土器の蓋(72)、ジェラルミン製スプレー(73)、円盤状製品(74)などが確認された。SP28とSP27と28が判別できなかった時点での出土遺物(SP27・28)には人工遺物22点が得られ、中国産の15・前葉から中葉の青磁碗(75)、日本産の染付碗(76)、色絵の急須(77)、磁器碗(78)、器種不明の金属製品(79)、ガラス製のインク瓶(80)、化学調味料瓶(81)、皿(82)が確認された。SP29からは人工遺物33点でガラス製品主体。SP30は人工遺物1点と貝類1点。

年代 SDを切ることや覆土中の遺物より、戦後の遺構とみられる。

3 土坑・ピット

(1) 土坑 (SK1)

位置・重複関係 0326 グリッドで検出された。

形状・規模 平面形・断面ともに略方形。最大長0.67m、最大幅0.56m、最大深度0.29m。

覆土 基本層序I層が堆積する。

遺物 人工遺物2点。

年代 覆土がI層であることや覆土中の遺物より、近代以降とみられる。

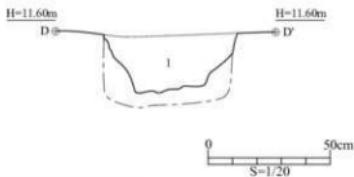
(2) ピット

位置・重複関係 調査区東側で検出された。SP27・30がSX3を切る。

形状・規模 平面形・断面ともに略円形。半径約60cmと30cmの2種類。



第42図 SK1 断面写真(南東から)



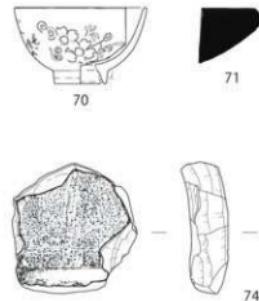
第43図 SK1 断面図

第19表 SK1 土層観察表

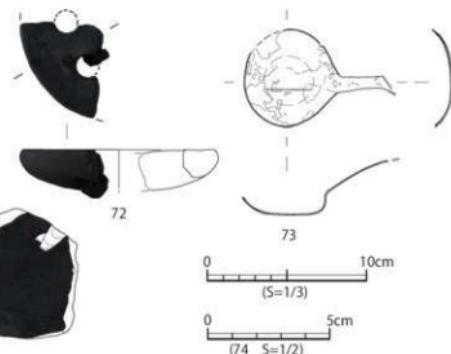
層名	土色・質	記号	粘性	繊り	粒子	混入物	備考
SK1	にぶい黄色	25YK6/3	弱	弱	粗	小礫多く混じる	近代遺構

第20表 SK1 出土遺物集計表

順序 遺構	グリッド	日本度 陶器部	沖縄度 施物陶器	合計
SK1	0326	1	1	2
	0327	1	1	2
合計		1	1	2



第44図 SP27 出土遺物



第21表 SP27 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考
第44図 70	0627 SP27	日本産 陶器部	色絵	碗 口～底	口径: 8.2 高さ: 4.7 底径: (3.2)	36.1	胎土: 白色/やや粗 釉薬: 内・外)透明 調整: 着付軸削ぎ	
第44図 71	0627 SP27	日本産 陶器部	近代 磁器	碗 口縁部	-	3.8	胎土: 白色 釉薬: 内・外)緑色	
第44図 72	0627 SP27	購買 土器	-	蓋 (サナ) 甲～端	端径: (12.2) 高さ: 2.5 孔径: 1.4	53.9	胎土: 棕色 孔付近に金属 付着	

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種 状態	法量 (mm)	重量 (g)	素材	観察事項	備考
第44図 73	0627 SP27	金属 製品	生活具	スプーン 一部欠損	最大長: (89) 最大幅: 60 最大厚: 1	7.4	ジエラルミン	加工痕: 鋳造	
第44図 74	0627 SP27	円錐状 製品	-	略円形 完形	外 径: 52 最大厚: 14.4	46.8	瓦 鋼部	加工痕: 打削(両)	未完成か



第45図 SP27、SP28 出土遺物

第22表 SP27、SP28 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考	
第45図 75	0627 SP28	中国産 磁器	青磁	碗 柄部	-	6.5	胎土:白色 輪葉:灰オリーブ色 文様:崩れラマ式蓮弁文		
第45図 76	0627 SP27- SP28	日本産 陶磁器	近代 磁器	碗 口～底	口径: 8.4 周高: 5.1 底径: 2.8	37.3	胎土:白色/やや粗 輪葉:内・外透明 文様:外)亀甲文 調整:足付釉剥げ		
第45図 77	0627 SP27- SP28	日本産 陶磁器	色绘	急須 口～腹	口径:(7.6) 周高:(10.3) 底径:	28.9	胎土:白色 輪葉:内・外透明 文様:外)菊花文		
第45図 78	0627 SP28	日本産 陶磁器	近代 磁器	碗 口様部	-	11.6	胎土:白色 輪葉:内・外)緑色		
掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種状態	法量(mm)	重量(g)	素材	観察事項	備考
第45図 79	0627 SP28	金属 製品	-	不明 一部欠損	最大長:84 最大幅:75 最大厚:2	60.6	鉄	加工痕・焼造	高さ:(53mm)
第45図 80	0627 SP28	ガラス 製品	文具瓶	インク瓶 完形	-	55.2	透明 ガラス	加工痕・使用痕:なし	
第45図 81	0627 SP28	ガラス 製品	調味料 瓶	化学調味料 瓶 完形	-	86.8	透明 ガラス	銘: 「0 AJINOMOTO 18」	
第45図 82	0627 SP27- SP28	ガラス 製品	食器	皿 破片	-	28.6	透明 ガラス	文様:あり	

第23表 ピット 出土遺物集計表

序 番 号	グリッド	中国産 陶磁器	日本産 陶磁器	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	陶質 土器	石材	灰	金属 製品	円錐状 製品	ガラス 製品	瓦	合計
SP6	0527								1	5	5	1	6
SP27	0627	1	3	1	2	1		5	6	1	1	3	21
SP27・SP28	0627										1		3
SP28	0627	1	3			1			2		12		19
SP29	0627								1		31		33
SP30	0627												1
合計		2	8	2	2	2	1	5	10	1	49	1	83

第24表 ピット 出土貝類集計表

(巻貝)		層序・遺構・グリッド	SP30 0627			小計		合計
種	科名	貝種名	生息地	完形	破損	完形	破損	合計
腹足	サザエ科	ヤコウガイ科				1	1	1
		合計		0	0	1	0	1

(二枚貝)		層序・遺構・グリッド	SP27 0627			小計		合計
種	科名	貝種名	生息地	完形	破損	完形	破損	合計
一枚貝	アラスジケマン	■-1-e	L R L 不明	1		1		1
マルスダレガイ科	ホソソジイナミ	■-1-e	L R L 不明		1		1	
	ハマグリ類(キルン?)	■-2-e	L R L 不明	1		1		1
	合計		0 2 0 1	0	2 0 1	0		3

4 SX

【SX 2】

位置・重複関係 調査区北東側の北壁（0627 グリッド）で検出された。SX3 を切る。

形状・規模 断面は略円形、深度 0.2m。

覆土 基本層序 I 層が堆積する。

遺物 人工遺物 30 点、貝類 3 点が出土している。

主な遺物には日本産の瀬戸・美濃系染付杯（83・84）でこれは揃いのもの、ほかに肥前系の染付皿（85）、瀬戸・美濃系で近代の染付杯（86）、白磁灯明具（87）、白磁鉢（88）、ガラス製調味料瓶（89・90）、化粧瓶（91）などがみられる。

年代 掘りの資料（83・84）や I 層が堆積することから、戦中に構築された埋納遺構の可能性がある。

【SX 3】

位置・重複関係 0526・0626・0627 グリッドにまたがって検出された。

形状・規模 断面方形。遺構の軸はおよそ N-49° E で深度 0.18m。

覆土 コーラル層 → 磁鐵層 → 基本層序 II 層の順に堆積する。道路の可能性がある。

遺物 人工遺物 332 点、貝類 42 点、動物骨 6 点が出土した。主な遺物は中国産陶磁器、日本産陶磁器、沖縄産陶器があり、沖縄産陶器は施釉と無釉を合わせて、人工遺物の 4 割を占める。そのほかチャート製品、錢貨、ガラス製品等が出土している。

年代 構築された時期は明らかではないが、遺構の覆土や遺物の年代から近代前半までは使用されていたと推定される。

【SX 4】

位置・重複関係 0426・0427 グリッド。米軍による戦後の埋設管敷設に伴う掘削に切られる。また一部は重機によって底部まで削平されている。

形状・規模 断面方形。遺構の軸はおよそ N-49° E で深度 0.18m。

覆土 基本層序 I 層。

遺物 人工遺物 37 点が出土している。主な遺物に沖縄産施釉陶器の瓶（126）など。

年代 覆土や出土遺物により、近代もしくは現代。

【SX 5】

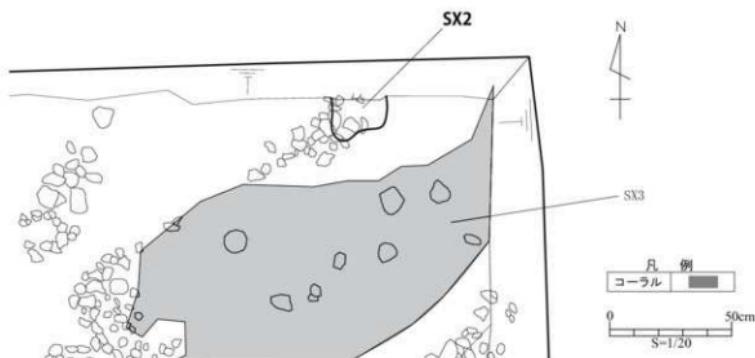
位置・重複関係 0327 グリッドで検出。SD6・7・10 を切る。

形状・規模 断面すり鉢状、平面形は溝状。長軸 6.34m、短軸 1.75m、深度 0.6m。

覆土 基本層序 II 層が堆積する。

遺物 人工遺物 82 点、貝類 10 点、動物骨 3 点。主な遺物には、中国産福建系で 15c ~ 16c 中頃の白磁杯（127）や沖縄産施釉陶器の急須（128）など。

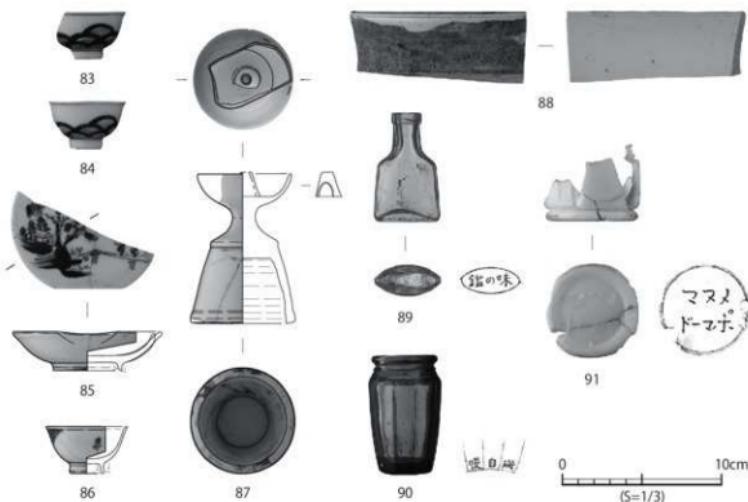
年代 SD6・7・10 との切り合い関係から、近代まで利用されたとみられる。



第46図 SX2 遺構平面図



第47図 調査区北壁 SX2 検出箇所写真（南から）



第48図 SX2 出土遺物

第25表 SX2 出土遺物観察表

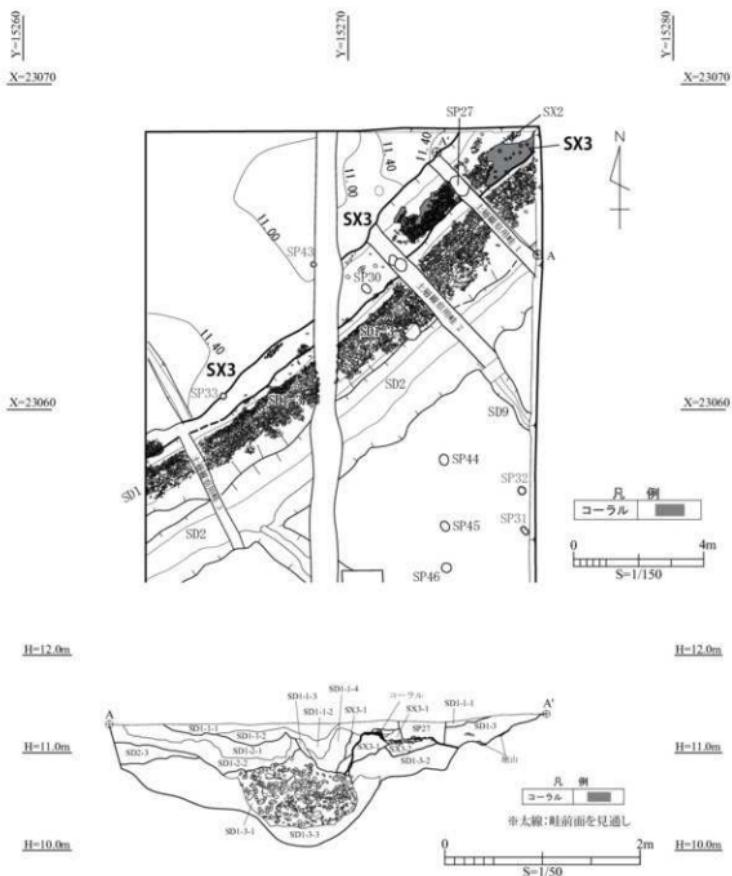
掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考	
第48回 83	0627 SX2	日本產 陶磁器	近代 磁器	杯 口～底	-	12.5	胎土:白色/ガラス質 文様:波文・圓線 産地:瀬・美 軸裏:内・外)透明 調整:型作り、豊付抽剥ぎ		
第48回 84	0627 SX2	日本產 陶磁器	近代 磁器	杯 口～底	-	12.3	胎土:白色/ガラス質 文様:波文・圓線 産地:瀬・美 軸裏:内・外)透明 調整:型作り、豊付抽剥ぎ		
第48回 85	0627 SX2	日本產 陶磁器	近代 磁器	皿 口～底	口径: 最大9.2 /最小(8.8) 高さ: 2.4 底径: 4.2	32.8	胎土:白色/やや粗 文様:模様山水 産地:肥前 軸裏:内・外)透明 調整:型作り、豊付抽剥ぎ	変形皿	
第48回 86	0627 SX2	日本產 陶磁器	近代 磁器	碗 略充	口径: 5.0 高さ: 2.9 底径: 1.9	15.5	胎土:白色/ガラス質 文様:文字文ほか 産地:瀬・美 軸裏:内・外)透明 調整:型作り、豊付抽剥ぎ		
第48回 87	0627 SX2	日本產 陶磁器	近代 磁器 白磁	灯明具 口～底	口径: 5.8 高さ: 9.3 底径: 6.4	134.2	胎土:白色/ガラス質 部(型)脚部(輪轍)、 軸裏:内・外)透明 調整:豊付抽剥ぎ 産地:瀬・美		
第48回 88	0627 SX2	日本產 陶磁器	近代 磁器 白磁	鉢 口縁部	-	148.2	胎土:白色/ガラス質 軸裏:内・外)透明 調整:輪轍 産地(年代):瀬・美(19c～20c)		
掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種状態	法量(cm)	重量(g)	素材	観察事項	備考
第48回 89	0627 SX2	ガラス 製品	調味料 瓶	化学調味料 瓶 定形	-	34.9	透明 ガラス	銘:「味の瓶」	
第48回 90	0627 SX2	ガラス 製品	調味料 瓶	不明 完形	-	103.7	緑 ガラス	加工痕:型合わせ時のバリ残り あり 銘:「職自慢」	気泡多い
第48回 91	0627 SX2	ガラス 製品	化粧瓶	ボーマード 瓶 破片	-	77.2	白不透明 ガラス	銘: 「メスマボーマード」	大正6(1917)～ 昭和20(1945) 残存:底部

第26表 SX2、SX2・SX3 出土遺物集計表

順序 遺構	グリッド	日本產 陶磁器	沖縄產 熱帶陶器	沖縄產 無熱帶器	金属 製品	ガラス 製品	磁器 製品	瓦	合計
SX2	0627	13	1	2	3	8	1	2	30
SX2・SX3	0627	1						1	1
合計		14	1	2	3	8	1	2	31

第27表 SX2 出土貝類集計表

(二枚貝)	順序・遺構・グリッド	日本產 陶磁器	沖縄產 熱帶陶器	沖縄產 無熱帶器	金属 製品	ガラス 製品	磁器 製品	瓦	合計	小計	合計	
										壳形	殻頂	殻底
科	科名	目種名	生息地									
一 科	ギルガイ科	リュウキューギル	II-2-e							1	1	1
科	ヒレコガイ科	ヒレコガイ科	I-2-e							1	1	1
貝 類	シココガイ科	シココガイ科	I-2							1	1	1
	合計					0 0 0 0	2	0 0 0 0	3	3	3	3



第49図 SX3 遺構平面図・土層観察用柱立面図

第28表 SX3 土層觀察表

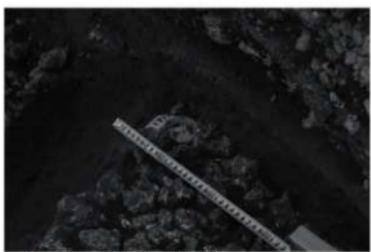
層名	土色・質	記号	粘性	繰り	粒子	混入物	備考
コーアルス							SX3表面
SX3-1	にぶい黄褐色シルト	10YK4/3	弱	弱	粗	炭	
SX3-2	にぶい黄褐色シルト	10YK4/3	弱	弱	粗	炭・焼土・貝片・小石多	SD3擾土混ざる



SX3 コーラル・礫敷検出状況写真 (北東から)

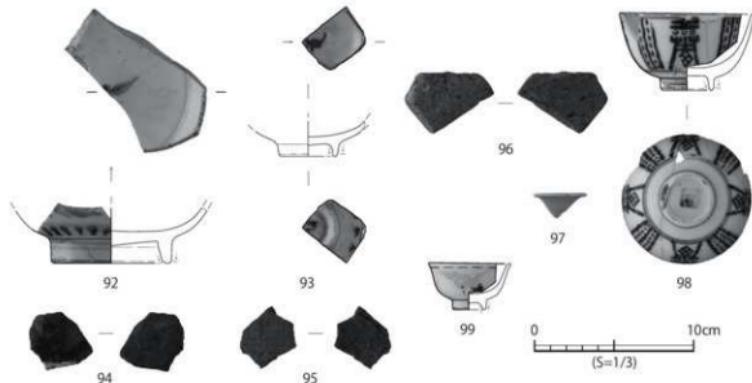


SD1 ベルト1検出 SX3 断面写真 (北東から)

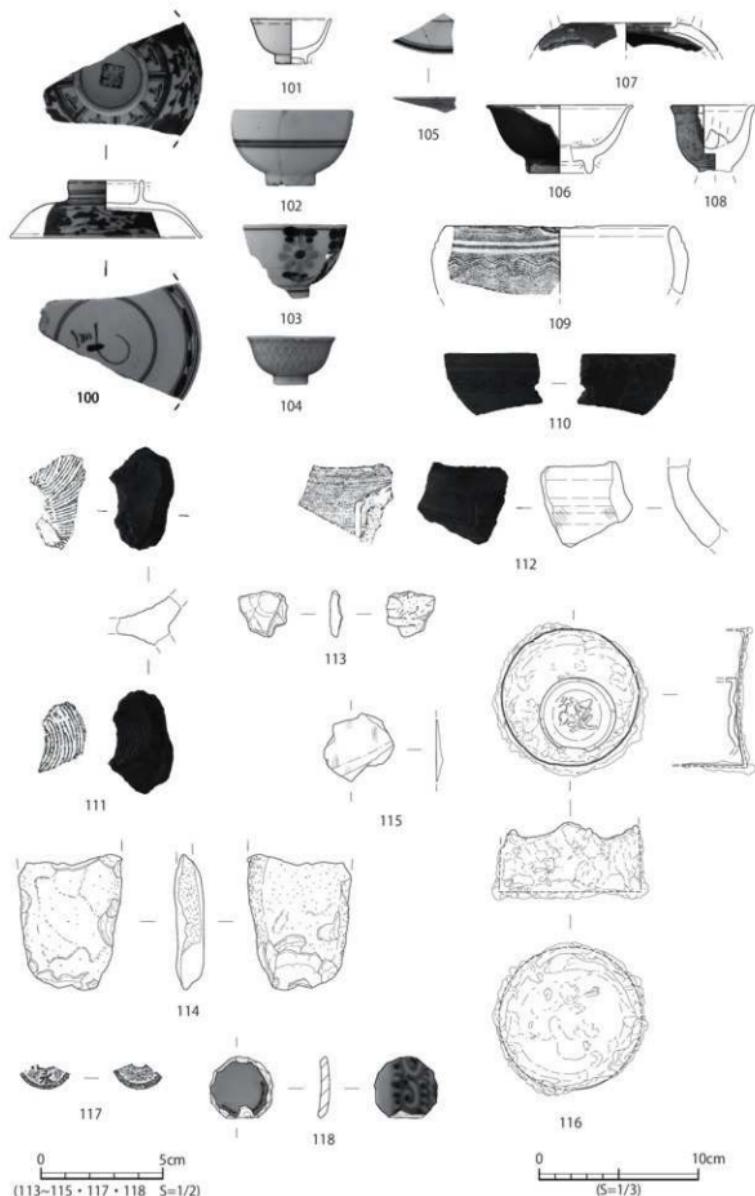


SX3 磁敷内遺物出土状況写真 (北東から)

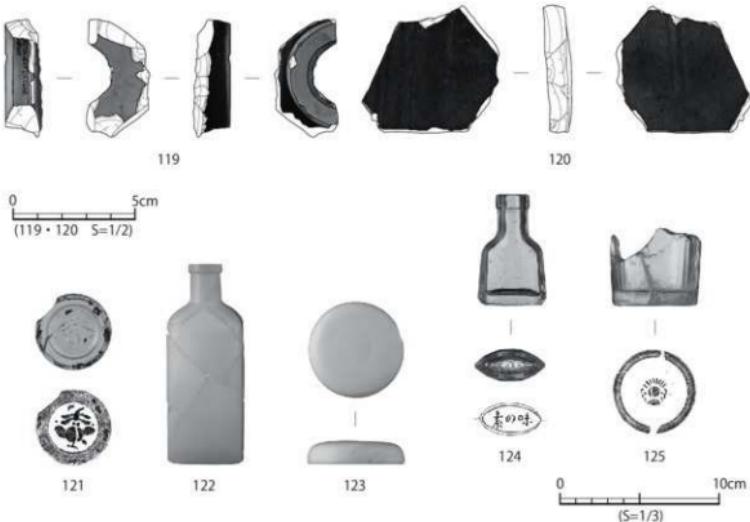
第50図 SX3 コーラル・礫敷検出状況、断面、磁敷内遺物出土状況写真



第51図 SX3 出土遺物 (1)



第52図 SX3 出土遺物（2）



第53図 SX3 出土遺物(3)

第29表 SX3 出土遺物観察表(1)

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考
第51図 92	0626 SX3	中国産 磁器	青花	碗 底部	口径: - 器高: - 底径: 7.4	76.5	胎土:白色/黑色斑点 釉面:内・外)透明 文様:草花文・缠枝・見达)篆文 調整: 着付輪剥ぎ 产地(年代):德化(18c)	
第51図 93	0627 SX3	中国産 磁器	青花	碗 底部	口径: - 器高: - 底径: (3.4)	11.7	胎土:灰白色 釉面:内・外)青白色 文様:外)菊花 产地(年代):景德镇(18c ~ 19c) 印鑄:あり	
第51図 94	0627 533	中国産 陶磁器	施釉 陶器	壺 胴部	-	18.7	胎土:茶褐色 釉面:外)褐釉 調整:外)花瓶付着 年代:15c ~ 16c	
第51図 95	0627 SX3	中国産 陶磁器	施釉 陶器	壺 胴部	-	12.5	胎土:茶褐色/砂面 調整:瓶口	
第51図 96	0627 レキ内	タイ産 土器	半縫 土器	蓋 甲	-	16.6	胎土:黄褐色/軟質、赤色粒混 調整:撫磨き 年代:15c ~ 16c	
第51図 97	0627 SX3	日本産 陶磁器	白磁	杯 口縁部	-	2.8	胎土:白色 釉面:内・外)透明 产地(年代):瀬・美(19c ~ 20c)	
第51図 98	0627 533	日本産 陶磁器	近代 磁器	碗 略完	口径: 8.25 器高: 4.8 底径: 3.0	95.5	胎土:白色 釉面:内・外)透明 文様:梵文字 調整: 着付輪剥ぎ 产地:瀬・美 印鑄:あり	
第51図 99	0627 SX3	日本産 陶磁器	近代 磁器	杯 完形	口径: 5.1 器高: 2.9 底径: 1.8	24.3	胎土:白色/ガラス質 釉面:内・外)透明 文様:梵文(白盛組) 調整:型作り。着付輪剥ぎ 产地:瀬・美	
第52図 100	0627 SX3	日本産 陶磁器	近代 磁器	蓋 頭~端	底端径: 11.8 頭径: 4.5 器高: 3.55	48.8	胎土:白色/やや粗 釉面:内・外)透明 文様:草花文、外)波浪・牡丹唐草 調整:型作り、着付輪剥ぎ 产地:瀬・美 印鑄:あり	
第52図 101	0627 SX3	日本産 陶磁器	近代 磁器	杯 略完	口径: 4.95 器高: 2.8 底径: 1.8	21.9	胎土:白色/ガラス質 釉面:内・外)透明 調整:型作り、着付輪剥ぎ 产地:瀬・美	
第52図 102	0627 SX3	日本産 陶磁器	近代 磁器	小碗 口~底	-	62.1	胎土:白色 釉面:内・外)透明 調整: 着付輪剥ぎ・砂付着 文様:二重圓線 内面に別製品の 釉付着	
第52図 103	0627 SX3	日本産 陶磁器	近代 磁器	小碗 口~底	-	32.5	胎土:白色/ガラス質 釉面:内・外)透明 文様:草花文 調整: 着付輪剥ぎ 产地:瀬・美	
第52図 104	0627 SX3	日本産 陶磁器	近代 磁器	杯 完形	-	32.7	胎土:白色/ガラス質 釉面:内)透明、外)青色 文様:網目文 調整:型作り、着付輪剥ぎ 产地:瀬・美	

第30表 SX3 出土遺物観察表（2）

掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考	
第52回 105	0627 S33	日本産 陶磁器	近代 施釉 陶器	皿 口縁部	-	3.3	胎土:白色 釉面:内・外)透明 文様:彫線 調整:型作り	西洋皿	
第52回 106	0627 S33	沖縄産 陶器	施釉 陶器	小碗 口～底	口径:(9.0) 深さ:4.2 底径:(3.8)	30.6	胎土:灰白色/細縫子目 釉面:内)透明、外)暗赤 褐色 調整:収付と見込に泥壁付着、見込紐の目 状焼削ぎ		
第52回 107	0627 S33	沖縄産 陶器	施釉 陶器	急須 口縁部	口径:(6.4) 器高:~ 底径:~	16.5	胎土:淡黄色 釉面:内)褐色、外)灰色、質入あり 調整:輪幅		
第52回 108	0627 レキ内	沖縄産 陶器	施釉 陶器	壺 口～腹	口径:(5.25) 器高:~ 底径:~	37.4	胎土:明黄褐色 釉面:内・外)緑灰色 調整:内たんこ形・横状芯立あり	灯明具	
第52回 109	0627 S33	沖縄産 陶器	無釉 陶器	水鉢 口縁部	口径:(14.0) 深さ:~ 底径:~	42.3	胎土:にぶい赤褐色 文様:外)波文文、二重圓輪 調整:口唇部に歪み		
第52回 110	0627 S33	沖縄産 陶器	無釉 陶器	水鉢 口縁部	-	33.0	胎土:褐色/微青 文様:波文文・團繩 調整:輪幅・磨き		
第52回 111	0627 S33 レキ内	沖縄産 陶器	無釉 陶器	擂鉢 底部	-	51.2	胎土:にぶい赤褐色 調整:外底にも柳目あり		
第52回 112	0627 S33 レキ内	沖縄産 陶器	無釉 陶器	擂鉢 脇部	-	57.7	胎土:赤褐色 印記:案記号あり		
掲載番号	出土位置	遺物種別	分類	器種形状	法量(mm)	重量(g)	素材	観察事項	
第52回 113	0627 S33	石器	-	ノッチドス クレイバー 完形	最大長:20 最大幅:19 最大厚:5	2.0	チャート	加工痕:打削 使用痕:微細剝離	
第52回 114	0627 S33	石器	-	打製石斧 一部欠損	最大長:(55.5) 最大幅:42.5 最大厚:12	43.3	輝緑岩	加工痕:打削 使用痕:微細剝離	
第52回 115	0626 S33	石製品	文具	石盤 破片	-	2.1	粘板岩	使用痕:線条痕	
第52回 116	0627 S33	金属製品	-	不明 一部欠損	最大長:96 最大幅:94 最大厚:1.5	101.3	鉄	加工痕:鍛造	高さ:(47mm) ガラス瓶(121) 内包
第52回 117	0626 S33	錢貨	-	寛永通寶 (折 破片	外 線:~ 内 鋼:外径(6.6) /内径(4.9) 外縁厚:1.07 文字面厚:0.8	0.8	銅	銘:「水」	
第52回 118	0626 S33	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径:25.5 最大厚:3.5	4.0	日本産 染付 胴下部	加工痕:打削(外)	
第53回 119	0627 S33 レキ内	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径:~ 最大厚:15	15.9	中国産 珊瑚釉 底部(収付有)	加工痕:打削(内)	見込み打欠き
第53回 120	0627 S33	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径:54.3 最大厚:9	34.4	沖縄産 無釉陶器 胴部	加工痕:打削(内)	未成品
第53回 121	0627 S33	ガラス 製品	化粧瓶	化粧水瓶 破片	-	14.6	透明 ガラス	銘:桃とトンボ(桃谷順天瓶)	金属製品(116) 内に貼付 残存底部
第53回 122	0627 S33	ガラス 製品	化粧瓶	不明 一部欠損	-	91.0	白不透明 ガラス	加工痕:型合せ痕あり	
第53回 123	0627 S33	ガラス 製品	化粧瓶	不明・蓋 一部欠損	-	37.8	白不透明 ガラス	使用痕:内面擦痕	
第53回 124	0627 S33	ガラス 製品	調味料 瓶	化学調味料 瓶 完形	-	39.5	透明 ガラス	加工痕:型合せ痕あり 銘:「味の素」	
第53回 125	0627 S33	ガラス 製品	食器	コップか 一部欠損	-	86.1	透明 ガラス	加工痕・使用痕:なし 銘:エンボスあり	

第31表 SX3、SX3 レキ内 出土遺物集計表

層序 遺構	グリッド 先史 土器	中国産 陶器	タイ産 半土器	日本産 陶器	沖縄産 陶器	琉球陶器	周質 土器	石器	石製品	石材	金属 製品	鉛灰	円盤状 製品	ガラス 製品	瓦	合計
SX3	0327 0626 0627 0626 0626 0627	1 6 21		4 19 31 40 33 16	15 3 1 14 1	3 2 9 4 3	1 2 2 1 3				1 4 10 17	1 4 11 11	1 4 10 17	1 4 11 11	1 4 10 17	75 215 2 38
SX3 レキ内																
合計		1 28 1 35		64	63	20	3	2	14	4	1 4 1 4 1	1 4 1 4 1	1 4 1 4 1	1 4 1 4 1	332	

第32表 SX3、SX3 レキ内 出土貝類集計表

(巻貝)

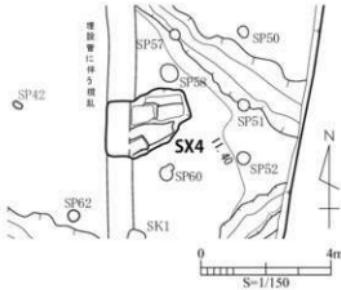
層序 科名	目種名	生出地	SX3			SX3 レキ内			小計			合計		
			0626	完形	殻頂 破片	0627	完形	殻頂 破片	0626	完形	殻頂 破片			
ニシカラブ科	ニシカラブズ	1-2-a	1				1	1	1	1	1	1		
	ギンジカラハマ	1-4-a										2		
サザエ科	コヨウセンサザエ科	1-3-a				4	1	1	1	1	4	6		
	テウセンサザエ科		1	1					2			2		
腹足類	オニツツノガイ科	オニツツノガイ	1-2-c				1					1		
	コグロブイ科	III-1-c	1							1		1		
	ヒメクラマミカニモリ	II-2-c	1							1		1		
	マダキガイ	1-2-c	1							1		1		
	クモガイ	1-2-c	1							1		1		
	ツカラガイ科	ハナビラカラガイ	1-1-a	1								1		
	オニコブレ科	オニコブレ	1-3-a			1						1		
	トウガタカニワニ科	トウガタカニワニ	V-5,6	1								1		
合計			7	0	0	5	1	5	4	2	3	16	3	26

(一枚貝)

層序 科名	目種名	生出地	SX3			SX3 レキ内			小計			合計
			0626	完形	殻頂 破片	0627	完形	殻頂 破片	0626	完形	殻頂 破片	
ツタガイ科	リュウキュウウサボルガイ	II-2-c				1						1
イタボガタ科	シマガタ	III-1-a		1								1
ウミギク科	ムツガイ			1								1
ツカギ科	ウラツカギ	II-2-c	1									1
ヒシガイ科	ヒシヤコ	1-2-c										1
シャコガイ科	シラナミ類	1-2				1						1
	シヤコガイ類	1-2				1						2
マルヌダレガイ科	ハマトリ類(ホルンタ)	II-2-c				1			7			8
チドリマヌ科	ツバマツリ		1									1
合計		4	1	0	1	2	2	0	0	1	8	17

第33表 SX3 出土動物遺存体集計表

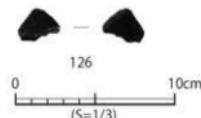
層序 科名	種名	部位	SX3			SX3 レキ内			小計			合計
			0626	部分	L R	0627	部分	L R	0626	部分	L R	
哺乳類	ヤギ	経骨	近位部	—	1	—	—	—	1	—	1	1
	不明	不明	—	—	5	5	—	—	—	—	—	5
合計				—	6				1		1	11



第54図 SX4 遺構平面図



第55図 SX4 完掘状況写真（南から）

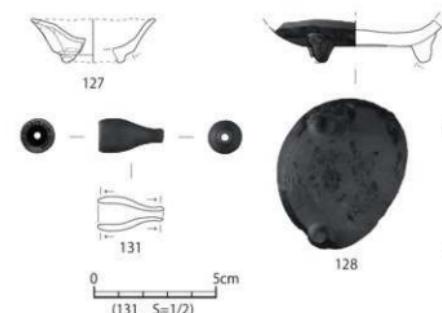


第56図 SX4 出土遺物

第34表 SX4 出土遺物観察表

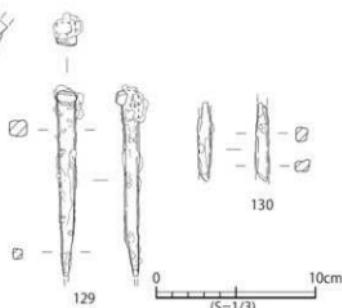
開拓番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考
第56図 126	0527 SX4	沖縄産 陶器	旋輪 陶器	瓶 頭部	-	3.7	施土:内)褐色、外)灰色 釉薬:外)褐色 調整:被植	
								

第57図 SX5 遺構平面図



第59図 SX5 出土遺物

第58図 SX5 完壠状況写真(南から)



第35表 SX5 出土遺物観察表

開拓番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考	
第59図 127	0327 SX5	中国産 陶器	白磁	杯 口部	口径:(7.6) 高さ:(2.7) 底径:(3.3)	9.2	施土:白色/灰質 釉薬:内・外)透明 調整:外)胸下部削鉗 產地(年代):福建(廈門)小D群(15c~16c中)	八角杯	
第59図 128	0327 SX5	沖縄産 陶器	旋輪 陶器	急須 底部	-	112.9	施土:灰白色/微濃 釉薬:外)褐色 調整:被植、底に沙付者、外底と内面剥落	三脚	
開拓番号	出土位置	遺物種別	分類	器種 状態	法量 (mm)	重量 (g)	素材	観察事項	備考
第59図 129	0327 SX5	金属 製品	建材	釘 光形	最大長:17.5 最大幅:16 最大厚:10	42.0	鉄 加工痕:鉛造	頭部厚:17mm	
第59図 130	0327 SX5	金属 製品	建材	釘 一部欠損	最大長:(49) 最大幅:10 最大厚:9	7.5	鉄 加工痕:鉛造		
第59図 131	0327 SX5	焼管	-	吸口 光形	小口:内径9 外径12 口付:内径3.5 外径6 長さ:27	3.5	沖縄産 旋輪陶器 入あ口 調整:小口面取り、袖剥ぎ		

第36表 SX4、SX5 出土遺物集計表

層序 遺構	グリッド	先史 土器	中国產 陶磁器	日本產 陶磁器	沖縄產 施錫陶器	沖縄產 無釉陶器	陶質 土器	石材	金属 製品	円盤状 製品	煙管 製品	ガラス 製品	磁器 製品	瓦	合計
SX4	0326	2	1	3	2	1	2	1	1	1	2	1	2	20	13
	0427	2	2	2	1	2	1		5	1	2	1	1	4	4
	0527		1	1	1	1									1
	合計	4	3	6	4	4	3	6	1	3	1	2	2	37	
SX5	0326							1							1
	0327	13	2	18	15	3	13	2	5	2			5	78	
	0427	1		1	1								3		
合計		14	2	19	16	3	14	2	5	2			5	82	

第37表 SX5 出土貝類集計表

層	科名	目種名	生息地	335 0327		小計		合計
				完形	破損	完形	破損	
複足	サザエ科	ショウセンサザエ属		2	1	2	1	3
足	アマオブネガイ科	アマオブネガイ	1-4-b	1		1		1
網	オニノゾノガイ科	オニノゾノガイ	1-2-c	1		1		1
網	タカラガイ科	ハナビラダカラ	1-1-a	1		1		1
	オニコブシ科	オニコブシ	1-3-a	1		1		1
	合計			5	1	0	5	1

層	科名	目種名	生息地	335 0327		小計		合計
				完形	破損	完形	破損	
枝	ツタガイ科	ハイガイ	III-1-c	2		2		2
貝	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2-c	1		1		1
網	シャコガイ科	ヒメシャコ	1-2-a		1		1	1
	合計			0	1	0	0	3

第38表 SX5 出土動物遺存体集計表

層	科名	種名	部位	335 0327		小計		合計
				L	—	L	—	
哺乳類	イノシシ/ブタ	道溝齒	下顎大歯	1		1		
—	イノシシ/ブタ?	経骨	近位部	1		1		
	不明	不明	—	1		1		
	合計			2	1	3		

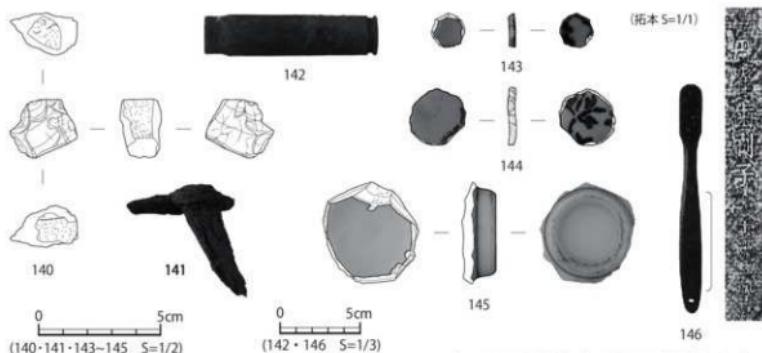
5 遺構外出土の近世・近代遺物

遺構外からも、人工遺物230点、貝類22点、動物骨2点が出土している。注目される遺物には、日本產陶磁器は瀬戸・美濃系で19c～20cの色絵碗(132)、染付

杯(133)、染付急須(134)、磁器碗(135・136)、磁器杯(137)、衛生陶器(138)、沖縄產無釉陶器の擂鉢(139)。ほかに先史時代と目される石核(140)、木製品(141)、葉莢(142)、円盤状製品(143～145)、プラスチック製歯ブラシ(146)などが確認された。



第60図 遺構外出土の近世・近代遺物（1）



第61図 遺構外出土の近世・近代遺物（2）

第39表 遺構外出土の近世・近代出土遺物観察表

揭露番号	出土位置	遺物種別	分類	器種部位	法量(cm)	重量(g)	観察事項	備考
第60回 132	表土	日本産 陶磁器	色松	碗 口～胸	-	9.3	胎土：白色/ガラス質 釉薬：草花文 調整：輪底 产地：(年代)：漸美(19c～20c)	
第60回 133	ヘキ メン	日本産 陶磁器	近代 磁器	杯 断面	口径：5.0 脚高：3.0 底径：1.8	22.9	胎土：白色/ガラス質 釉薬：(内・外)透明 文様：外)波文 調整：型作り、足付輪削ぎ 产地：漸美	
第60回 134	II層	日本産 陶磁器	近代 磁器	急須 口稼部	-	7.3	胎土：白色/ガラス質 釉薬：外)透明 調整：輪底 产地：(年代)：漸美(19c～20c)	
第60回 135	ヒヨウ サイ	日本産 陶磁器	近代 磁器	碗 口稼部	-	8.3	胎土：白色 釉薬：(内・外)緑色	
第60回 136	II層	日本産 陶磁器	近代 磁器	碗 底部	-	23.9	胎土：白色 釉薬：(内・外)緑色 調整：足付輪削ぎ	
第60回 137	ヘキ メン	日本産 陶磁器	近代 磁器	杯 口～底	-	16.8	胎土：白色/ガラス質 釉薬：(内・外)透明 文様：松文 調整：型作り、足付輪削ぎ、移付着 产地：漸美	
第60回 138	チン サチ	日本産 陶磁器	近代 磁器 白磁	衛生 器具 底部	-	200.3	胎土：白色/粗粒 釉薬：(内・外)透明 調整：型作り	
第60回 139	0427	沖縄産 陶器	無釉 陶器	擂鉢 鉢部 銅部	-	46.1	胎土：赤褐色/堅微	鉢底底付所 有
揭露番号	出土位置	遺物種別	分類	器種 状態	法量 (mm)	重量 (g)	素材	観察事項
第61回 140	0527 II-2層	石器	-	石核 完形	最大長：27.5 最大幅：24 最大厚：17	12.3	石英	加工痕：打剥
第61回 141	0527 II-1層	木製品	-	器種不明 破片	-	13.1	木	加工痕：切断
第61回 142	II層	金属 製品	兵器	薙莧 完形	-	94.9	鋼	加工痕：鉛造 使用痕：乗射痕 鉛：[25M M21A1S61SN9]
第61回 143	0526 II-1層	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径：13.7 最大厚：2.5	0.7	中国産磁器 青花 胸上部	加工痕：打剥(同)
第61回 144	II-2層	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径：23 最大厚：3	2.6	日本産磁器 染付 胸上部	加工痕：打剥(内)
第61回 145	II層	円盤状 製品	-	略円形 完形	外 径：41 最大厚：14	17.7	日本産磁器 染付 底部(足付有)	加工痕：打剥(同)
第61回 146	チン サチ	歯 ブラシ	衛生 用品	歯ブラシ 完形	-	10.1	プラス チック	加工痕：穿孔 使用痕：握部漆装跡 鉛：「丹青衛刷子(公)十一號品170」 (公)伝統的工芸品登録 以降→1939～ 1945

第40表 遺構外出土の近世・近代出土遺物集計表

順序 番号	グリッド	先史 土器	中国產 陶磁器	日本產 陶磁器	沖縄產 陶磁器	無鉛陶器	陶質 土器	石器	石材	木製品	金属 製品	円盤状 製品	鐵漿	ガラス	磁器	油 漆	真 珠	合計
II-1層	0526	2	1	1	3	3	1	2				3						11
	0426		1	5	2	1												11
	0427	3		5	2	4												14
	0526	2	2	7	1					1	3						2	18
	0527			4		2												7
	0627			1														1
	0428			1														1
II-2層	0427	1																1
	0527							1	1									2
	0626			3	1		1										1	6
	0627	1	2	1		1												5
	-	2	1															4
	0426	1	1	2		2												7
	0427			4	2	1												7
II層	0526	4		2						1		1	1					9
	0527	1		2	2													5
	0627			1		2												4
	-	1	5	2	9	2			2	2		1		1	4		28	
	ニシカベ	0527		1	2	1												1
	ヘムメン	-	1	3		1	1											6
	ティンサチ	-		6	9	1	2					1		1	4		24	
V層	チンサチ	-	1	2														3
	カクラン	0426	1		3					1	2							7
	-				1													1
	真土	-	1	7	7	4	1	2	3								3	28
	ヒョウサイ	-	1	3	3	2											1	11
	不明	0627															2	2
	不明																1	1
合計		3	28	35	62	29	21	1	8	1	5	14	1	1	1	1	1	250

第41表 遺構外出土の近世・近代出土遺物類集計表

(巻貝)	順序・遺情・グリッド	II-1層	II層	チンサチ	カクラン	不規	小計	合計	
科名	目標名	0426	0526	0626	0527	0627	0426	0526	
二枚貝	クラゲガイ科	リュウキュウガラボホ	1-2-c						1
	ハイガイ科	ハイガイ	1-1-c						1
	ツバキガイ科	クラツバキガイ	1-2-c						1
	ザルガイ科	リュウキュウガラ	1-2-c						1
	シャコガイ科	シャコガイ類?	(製品?)						1
	マルスダレガイ科	アラスジケマン	1-1-c						1
	ホソスジイナミ	ホソスジイナミ	1-1-c						1
	イカガイ科	イカガイ類	1-1-c						1
		合計	8	2	1	0	0	0	10

(二枚貝)	順序・遺情・グリッド	II-1層	II層	チンサチ	カクラン	不規	小計	合計	
科名	目標名	0427	0526	0626	0527	0627	0426	0526	
二枚貝	フネガイ科	リュウキュウガラボホ	1-2-c						1
	ハイガイ科	ハイガイ	1-1-c						1
	ツバキガイ科	クラツバキガイ	1-2-c						1
	ザルガイ科	リュウキュウガラ	1-2-c						1
	シャコガイ科	シャコガイ類?	(製品?)						1
	マルスダレガイ科	アラスジケマン	1-1-c						1
	ホソスジイナミ	ホソスジイナミ	1-1-c						1
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0

順序・遺情・グリッド	ヒョウサイ	チンサチ	カクラン	不規	小計	合計	
科名	目標名	生地殻	L H L R	破片	不規	破片	
二枚貝	フネガイ科	リュウキュウガラボホ	1-2-c				1
	ハイガイ科	ハイガイ	1-1-c				1
	ツバキガイ科	クラツバキガイ	1-2-c				1
	ザルガイ科	リュウキュウガラ	1-2-c				1
	シャコガイ科	シャコガイ類?	(製品?)				1
	マルスダレガイ科	アラスジケマン	1-1-c				1
	ホソスジイナミ	ホソスジイナミ	1-1-c				1
	合計	0	0	0	0	0	0

第42表 遺構外出土の近世・近代出土動物遺存体集計表

順序・遺情・グリッド	II層	チンサチ	合計	
科名	種名	部位	R L	
哺乳類	ブタ	上腕骨	後肢部	1
	ヤギ	下顎骨	下顎骨(P3-M2)	1
	合計		1 1	2

第4節 近世以前の遺構と遺物

1 グスク時代の遺構と遺物

【SP】

位置・重複関係 調査区に点在し、プランは組めなかった。

形状・規模 平面略円形で断面すり鉢形。

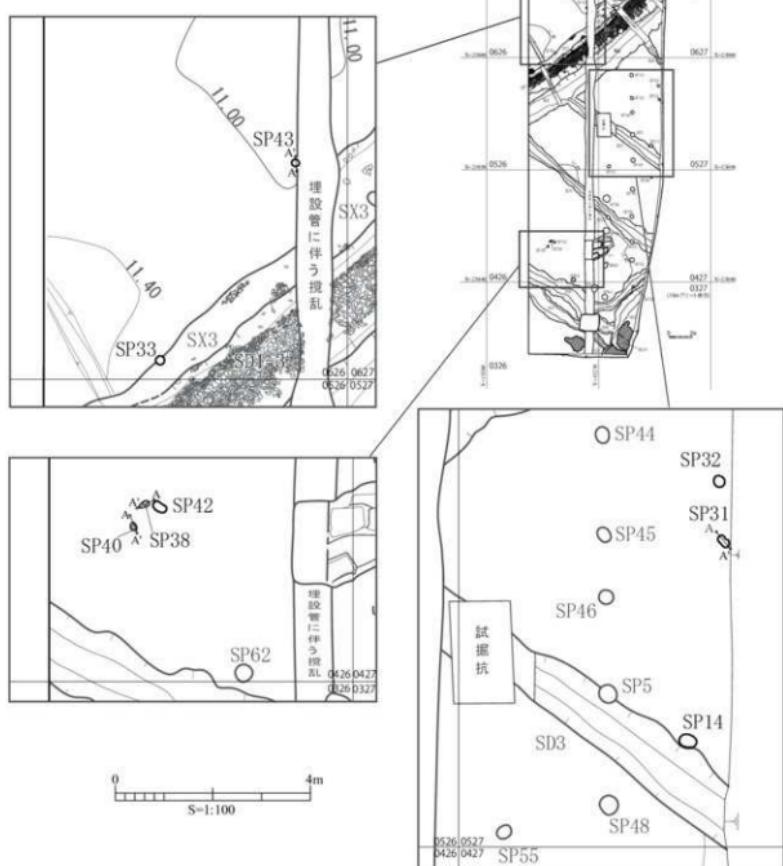
覆土 基本層序Ⅲ層。土壤中の炭化物による理化学分析によると、SP38は1174～934calBP、SP40は1050～931calBP、SP42は1516～1345calBP。

遺物 SP38から先史土器が出土。

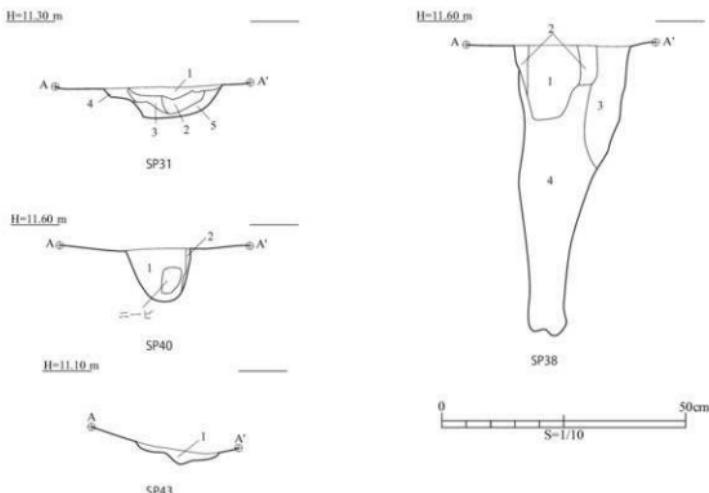
2 IV・V、VII層の遺物

IV・V層 縄文時代の土器や石器石材が計24点出土した。ほとんどは胴部の小破片だったが、口縁部資料(147・148)の器形や胎土の特徴から宇佐浜式もしくは仲原式に比定される。

VII層 琉球石灰岩の岩盤中から細粒砂岩の石材が1点のみ出土している。



第62図 グスク時代のピット分布図



第63図 SP31、SP38、SP40、SP43 断面図

第43表 SP31、SP38、SP40、SP43 土層観察表

層名	土色・質	記号	粘性	繊り	粒子	混入物	備考
SP31-1	暗褐色粘質シルト	10YK3/3	有	弱	粗	炭・焼土	
SP31-2	暗褐色粘質シルト	10YK3/4	有	やや有	やや粗	炭僅か	
SP31-3	暗褐色シルト	10YK3/4	やや有	やや有	粗	炭・焼土	
SP31-4	暗褐色シルト	10YK3/4	やや有	やや有	粗	炭・焼土	
SP31-5	暗褐色シルト	10YK3/4	有	弱	粗	炭・焼土	
SP38-1	暗褐色土	10YK3/4	弱	弱	炭・焼土粒・赤土 ブロック		土器1点出土
SP38-2	暗褐色土	10YK3/4	弱	極めて弱	炭・焼土粒・赤土 ブロック		
SP38-3	褐色土	10YK4/6	やや有	やや有	赤土まだら状		根擾乱か
SP38-4	暗褐色土	7.5YK3/4	やや有	有	炭・赤土ブロック多		
SP40-1	褐色シルト	10YK4/4	やや有	弱	炭・焼土		ニーピ包含
SP40-2	褐色シルト	10YK4/6	有	有	炭・焼土		1層と地山の混層
SP43	褐色シルト	10YK3/4	弱	弱	炭・焼土まばら		



SP31 半截断面写真（南西から）



SP38 半截断面写真（北西から）

第64図 SP31、SP38 半截状況写真



SP40 半截断面写真（南西から）

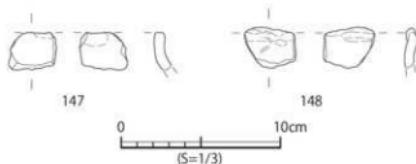


SP43 半截断面写真（北西から）

第65図 SP40、SP43 半截状況写真

第44表 SP33、SP36、SP38 出土遺物集計表

層序 遺構	グリッド	先史 土器	沖縄産 先耕開器	真	合計
SP33	0627	1		1	1
SP36	0427			1	1
SP38	0426	1		1	1
合計		1	1	1	3



第66図 IV層 出土遺物



第67図 IV層 土器出土状況写真（南から）

第45表 IV層 出土遺物観察表

掲載 番号	出土 位置	遺物 種別	分類	器種 部位	法量 (cm)	重量 (g)	観察事項	備考
第66図 147	IV層	先史 土器	-	不明 口縁部	-	5.7	胎土：赤褐色／砂質、石英・砂岩混 調整：ナデ 型式：宇佐良か坤原	
第66図 148	IV層	先史 土器	-	不明 口縁部	-	5.9	胎土：赤褐色／砂質、石英・磁鉄鉱混 調整：ナデ 型式：仲原	

第46表 IV、IV・V、VII層 出土遺物集計表

層序 遺構	グリッド	先史 土器	石材	合計
IV層	0426	1		1
	0427	3		3
	0527	1	2	3
IV・V層	0626	10	4	14
	0627	1		1
VI層	ニシカベ	2		2
	合計	18	7	25

第4章 自然科学分析

第1節 鏡水原遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鏡水原遺跡は沖縄県那覇市に所在する。発掘調査では大小の土坑と溝跡が確認されている。

本報告では、トレンチ断面・土坑、溝跡より採取した土壤試料を対象に、堆積層の年代観、植物資源利用、古植生などに関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析、微細物分析（種実遺体分析）を実施する。

1. 試料

試料は調査区東壁、西壁、SP38、SP40、SD1-3、SP42から採取している。その中から放射性炭素年代測定を11点、花粉分析1点、微細物分析（種実遺体分析）2点を実施する。試料の詳細は第47表に示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid）。本来の濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lであるが、今回の試料は脆弱であるため、アルカリの濃度を薄くして試料の損耗を防ぐ(AaAと記載)。

第47表 試料表

試料番号	試料名	^{14}C	花粉	微細物
1	調査区東壁 No.1	○		
2	調査区西壁 No.5	○		
3	SP38(2018.12.21)	○		
4	SP38(2018.11.27)	○		
5	SP40	○		
6	SP42半乾	○		
7	SD1-3 ベルト2 No.3	○		○
8	SD1-3 ベルト3 No.1 上	○	○	○
9	SD1-3 ベルト3 No.1 中	○		
10	SD1-3 ベルト3 No.1 下	○		
11	SD1-3 No.2	○		

1) ^{14}C : 放射性炭素年代測定、花粉: 花粉分析、微細物: 微細物分析（種実遺体分析含む）

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置(NEC社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS測定期に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定期の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正用に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk, 2009)を用いる。較正曲線は Intcal13 (Reimer et al., 2013)を用いる。

(2) 花粉分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重 2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス(無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理をして花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレバラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレバラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する(化石の少ない試料ではこの限りではない)。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、山野井(1996)などを参考とし、分析土壤量(cc)、分析残渣量(mg)、プレバラート作成量(μl)を測定し、堆積物 1ccあたりに含まれる個数を一覧表に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。

第48表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 (曆年校正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代						Code No.	
					年代値			確率(%)				
					年代値	年代値	年代値	年代値	年代値	年代値		
調査区東壁 No. 1	炭化物	AAA (1M)	6725±25 (6727±26)	-28.03 ±0.30	σ cal BC 5659 - cal BC 5625	7608 -	7574 cal BP	68.2			YU- 9410 pal- 12050	
調査区西壁 No. 5	炭化物	AaA (0.0001M)	26260±100 (26264±99)	-28.14 ±0.24	σ cal BC 26881 - cal BC 26526	30760 -	30475 cal BP	68.2			YU- 9411 pal- 12051	
0426 SP38 (2018. 12. 21)	炭化物	AaA (0.01M)	1080±20 (1078±20)	-10.86 ±0.25	σ cal AD 902 - cal AD 919	1048 -	1033 cal BP	18.1			YU- 9412 pal- 12052	
0426 SP38 (2018. 11. 27)	炭化物	AaA (0.01M)	1150±20 (1149±20)	-8.29 ±0.31	σ cal AD 965 - cal AD 996	986 -	955 cal BP	50.1			YU- 9415 pal- 12055	
0426 SP40	炭化物	AaA (0.5M)	1070±20 (1069±20)	-10.38 ±0.31	σ cal AD 876 - cal AD 902	1075 -	1048 cal BP	26.2			YU- 9413 pal- 12053	
0426 SP42 半殻	炭化物	AaA (0.5M)	1510±20 (1512±20)	-20.77 ±0.29	σ cal AD 919 - cal AD 962	1031 -	988 cal BP	37.7			YU- 9416 pal- 12056	
0627 SD1-3 ベルト2 No3	炭化物	AAA (1M)	170±20 (169±20)	-27.54 ±0.28	σ cal AD 777 - cal AD 793	1174 -	1158 cal BP	6.9			YU- 9417 pal- 12057	
0627 SD1-3 ベルト3 No1上	炭化物	AaA (0.5M)	255±20 (255±20)	-22.94 ±0.38	σ cal AD 802 - cal AD 845	1148 -	1108 cal BP	11.2			YU- 9418 pal- 12058	
0627 SD1-3 ベルト3 No1中	炭化物	AaA (0.5M)	180±20 (182±20)	-23.83 ±0.22	σ cal AD 856 - cal AD 970	1094 -	981 cal BP	77.4			YU- 9419 pal- 12059	
0627 SD1-3 ベルト3 No1下	炭化物	AaA (0.01M)	155±20 (154±20)	-24.34 ±0.26	σ cal AD 970 - cal AD 1015	980 -	935 cal BP	68.2			YU- 9420 pal- 12060	
0627 SD1-3 No. 2	炭化物	AAA (1M)	105±20 (105±20)	-29.17 ±0.26	σ cal AD 900 - cal AD 922	1050 -	1028 cal BP	13.5			YU- 9414 pal- 12054	

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAAは酸-アルカリ-酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

5) 曆年の計算には、 $\delta^{13}\text{C} = 0\text{‰}$ cal 14.3を使用。

6) 曆年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7) 曆年校正曲線や曆年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

(3) 微細物分析（種実遺体分析）

土壤試料から種実や葉などの大型植物遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な大型植物遺体や炭化材（主に径 2mm 以上）を抽出する。

大型植物遺体の同定は、現生標本や石川（1994）、中山ほか（2000）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は、一覧表の下部に常温乾燥後の重量と最大径を記す。分析後は、抽出物と分析残渣を常温乾燥後、容器に入れて保管する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第 48 表に示す。調査区東壁 No.1 が $6725 \pm 25BP$ 、調査区西壁 No.5 が $26260 \pm 100BP$ 、0426 SP38 が $1080 \pm 20BP$ 、0426 SP40 が $1070 \pm 20BP$ 、0627 SD1-3 No.2 が $105 \pm 20BP$ 、0426 SP38 が $1150 \pm 20BP$ 、0426 SP42 半歳が $1510 \pm 20BP$ 、0627 SD1-3 ベルト 2 No.3 が $170 \pm 20BP$ 、0627 SD1-3 ベルト 3 No.1 上が $255 \pm 20BP$ 、0627 SD1-3 ベルト 3 No.1 中が $180 \pm 20BP$ 、0627 SD1-3 ベルト 3 No.1 下が $155 \pm 20BP$ であった。

測定誤差を 2σ として計算させた結果、調査区東壁 No.1 が $7656-7522calBP$ 、調査区西壁 No.5 が $30875-30308calBP$ 、0426 SP38 が $calAD898-1017$ 、0426 SP40 が $calAD900-1019$ 、0627 SD1-3 No.2 が $calAD1688-1927$ 、0426 SP38 が $calAD777-970$ 、0426 SP42 半歳が $calAD434-606$ 、0627 SD1-3 ベルト 2 No.3 が $calAD1665-1950$ 、0627 SD1-3 ベルト 3 No.1 上が $calAD1529-1798$ 、0627 SD1-3 ベルト 3 No.1 中が $calAD1663-1950$ 、0627 SD1-3 ベルト 3 No.1 下が $calAD1667-1949$ であった。

(2) 花粉分析

花粉分析の結果、保存状態の悪い花粉がわずかに検出された程度である。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村、1967；徳永・山内、1971；三宅・中村、1998など）。溝跡堆積物上部は、砂を含むシルトであり、好気的な環

境であることから、検出された花粉の保存状態は極めて悪いと言える。よって、堆積後に分解・消失した可能性が高い。

第 49 表 花粉分析結果

種類	SD1-3 ベルト3 No.1 上
木本花粉	
マツ属	1
草本花粉	
ナデシコ科	2
シダ類胞子	
イノモトソウ属	10
他のシダ類胞子	11
合計	
木本花粉	1
草本花粉	2
シダ類胞子	21
合計	24

(3) 微細物分析（種実遺体分析）

結果を第 50 表に示す。SD1-3 のベルト 2 No.3（試料番号 8）は、石灰岩 $11.35kg(4550cc)$ を除去後の試料 $5.79kg(2800cc)$ より、炭化材 $1.9g$ （最大 $7.4mm$ ）、岩片・土粒主体（炭化材・植物片含む） $60g$ が検出された。

SD1-3 のベルト 3 No.1 上（試料番号 9）は、試料 $5.49kg(2630cc)$ より、炭化材 $0.1g$ （最大 $4.9mm$ ）、不明多量（約 $15cc$ ）岩片・土粒主体（巻貝片含む） $245g$ が検出された。多量確認された不明は、径 $2 \sim 3mm$ の球状不定形、赤灰褐色で光沢があり、複数の鱗片から成る。現時点では植物か動物か不明であるが、炭化していないことから、供伴する炭化材とは由来が異なり、後代の混入と判断される。

第 50 表 微細物分析（種子遺体分析含む）結果

種類	試料番号 8	試料番号 9
	SD1-3	SD1-3
	ベルト2	ベルト3
炭化材	7.4	4.9 最大(mm)
	1.9	0.1 (g)
不明	-	15 (cc) 多量
岩片・土粒主体	60	245 (g)
巻貝類	-	++
植物片	++	-
分析量	5.79	5.49 (kg)
	2800	2630 (cc)
石灰岩(分析前除去)	11.35	- (kg)
	4550	- (cc)

4. 考察

トレンチ断面から採取した2点は、調査区東壁No.1と調査区西壁No.5で、II層とV層とされる。暦年代で7656-7522calBPと30875-30308calBPの古い年代が得られた。前者は縄文時代前期、後者は旧石器時代である。

土坑はSP38(2点)、SP40、SP42から採取されている。SP38(2点)、SP40の3点は概ね1100BP前後に集中する。暦年代は8世紀～11世紀で貝塚時代後期後半の年代である。SP42は1510BPで、暦年代は5世紀から7世紀初頭である。前者の3点より若干古く、貝塚時代後期中頃の年代であった。

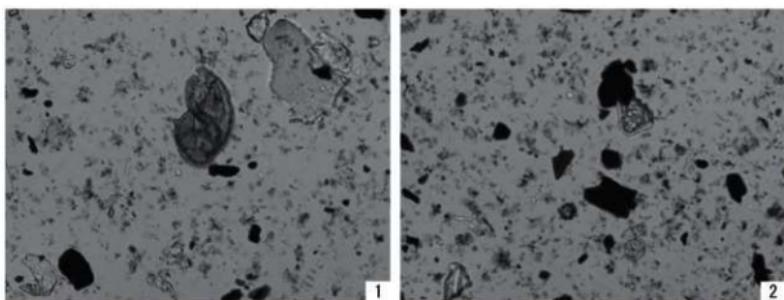
溝跡のSD1-3の5点についてみると、105BP-255BPの150年の間に集中し、近代から近世に機能していた可能性が高い。

以上のように、鏡水原遺跡は、少なくとも貝塚時代後期の土坑と、近世から近代に機能していた溝の2つの時期が存在していた可能性が高い。さらに、トレンチ断面から得られた旧石器時代と縄文時代前期の年代については、堆積物の様相やこれまでの周辺の遺跡の層位的な解釈と比較すると、非常に古いものである。このことからII層とV層は、二次的な堆積の可能性も想定されるが、炭化物がヒトの関与を示唆するものであることを考慮すると、周辺地域に古い遺跡が存在する可能性があり、興味深い結果と言える。

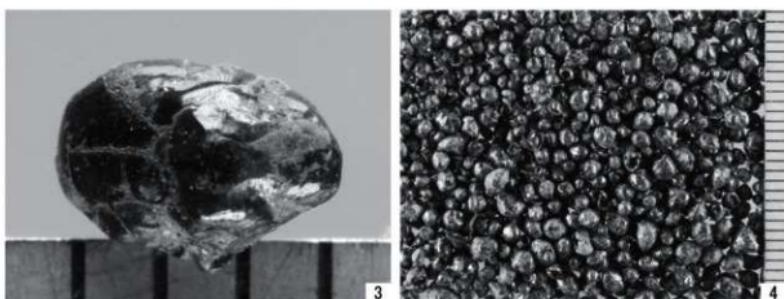
また、溝跡は花粉分析と微細物分析も実施している。花粉の検出は僅かで好気的な環境下で分解消失した可能性が示唆される。微細物分析を実施したSD1-3ベルト3No.1上からは後代の混入の可能性がある不明物が回収されている。沖縄県内の土壤中からしばしば回収されるものであるが、現状では同定不能である。今後、さらなる分析と情報収集を実施し、由来を究明することが望まれる。

引用文献

- Bronk, R. C., 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 石川茂雄, 1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 中村 純, 1967. 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980. 日本産花粉の標識 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 中山至大・井口希秀・南谷忠志, 2010. 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版). 東北大学出版社, 678p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006. 新城下原第二遺跡(II地区下層)の自然科学分析. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集 新城下原第二遺跡-キャンプ瑞慶賀内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告- , 沖縄県立埋蔵文化財センター, 311-328.
- ペドロジー学会編, 1997. 土壌調査ハンドブック改訂版. 博友社.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafidason, H., Hajdas, L., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013. IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- 島倉巳郎, 1973. 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977. Discussion Reporting of ¹⁴C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012. ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632種-. 美文堂新光社, 272p.
- 徳永重元・山内輝子, 1971. 花粉・胞子・化石の研究法. 共立出版株式会社, 50-73.



1・2. 分析プレパラート内の状況 (SD1-3 ベルト3:No1上)



3・4. 不明有機物粒 (SD1-3 ベルト3:No1上)



5. 炭化材 (SD1-3 ベルト2 No.3)

第68図 分析状況写真

第2節 鏡水原遺跡出土の動物遺存体

東海大学 丸山真史

1) 概要

今回の調査で出土した動物遺存体は破片数にして28点を数え、哺乳類が26点、魚類が2点である（第51表）。これらのうち種類や部位などを同定したのは13点である。これらは遺物包含層あるいは遺構から出土したものである（第51表）。出土地点の内訳は、II層から1点、SD1（SD1-1,2,3含む）から18点、SD2から1点、SX3から4点、SX5から3点、沈砂地から1点である。これらのなかには、切傷がみられるもの4点、被熱したもの1点が含まれる。なお、SD1-3は近世、その他は近代の遺構と推定される。

2) 種類別の特徴

A) 魚類

サメ類 SD1-1から椎骨が1点出土している。

フグ科／イシダイ科 SD1からフグ科あるいはイシダイ科の前上顎骨（左）が1点出土している。

B) 哺乳類

ヤギ SD1-3から上腕骨（右）、脛骨（右）が1点ずつ出土している。SX3から脛骨（左）が1点出土しており、切傷がみられる。沈砂地から下顎骨（左）が1点出土しており、乳歯が残る若齢個体である。

イノシシ／ブタ II層から上腕骨（右）が1点出土しており、切傷がみられる。SD1から桡骨（右）、脛骨（右）が1点ずつ出土している。桡骨の遠位端は癒合していない。SD1-2・SD2から尺骨（右）、中手骨／中

足骨が1点ずつ出土している。尺骨には切傷がみられ、中手骨／中足骨は遠位端が癒合していない。SD2から距骨（右）が1点、SX5から遊離歯（下顎犬歯・左）1点が出土している。これらのうちII層の上腕骨、SD1の桡骨、脛骨、SD2の距骨はブタの可能性がある。

3) 近世・近代の動物利用

当調査で出土した動物遺存体は少数にとどまり、その大部分は哺乳類のヤギとイノシシ／ブタで、魚類が僅かにある。いずれも散乱状態で出土しており、イノシシ／ブタには解体痕がみられることから、食用に供されたものと推測される。水産物では海水魚のサメ類とフグ科／イシダイ科。獣類はヤギとイノシシ／ブタの利用が認められる。魚骨は比較的大きなものだけであり、水洗篩別を行っていないために、小さな魚骨が見逃されている可能性もあるため、魚食の特徴は判然としない。イノシシ／ブタとしているものには、形態学的特徴からブタの可能性を指摘できるものが含まれている。当地では、近世末から近代には専ら食用家畜に依存した飼肉食を指摘できる。

4) まとめ

從来、縄文時代から近世までが動物考古学の研究対象として重視されてきたが、沖縄県内における近代の遺構の調査によって明らかになる動物利用もまた重要である。考古学研究において近代は比較的近い過去であるが、その生活の具体的な記憶は失われつつある。考古資料として記録を残すことができれば、動物利用の近代化もまた貴重な歴史の一端である。

第51表 動物遺存体一覧

部位／遺構	大分類	小分類	部位	部分	左右	備考
SD1	縫合魚類	フグ科／イシダイ科	前上顎骨		左	
SD1	哺乳類	ブタ？	翼骨		左	癒合
SD1	哺乳類	不明	脛骨		-	
SD1	哺乳類	ブタ？	脛骨	外位部	右	
SD1	哺乳類	ブタ？	脛骨	内位部	右	遠位端癒合
SD1	哺乳類	不明	不明		-	間接
SD1 レキ内	哺乳類	不明	椎骨		-	未癒合（椎体版）
SD1-1	縫合魚類	サメ類	椎骨		右	
SD1-1	哺乳類	不明	四肢骨		-	骨端部
SD1-1	哺乳類	不明	四肢骨		-	破片 3 点
SD1-2	哺乳類	不明	四肢骨		-	
SD1-2	哺乳類	イノシシ／ブタ？	脛骨？	遠位端？	右？	
SD1-2	哺乳類	ヤギ？	大腿骨		-	前位のみ
SD1-2・SD2	哺乳類	イノシシ／ブタ	尺骨	外位部	右	cutmark（外側に 3 条の切傷）
SD1-2・SD2	哺乳類	イノシシ／ブタ	中手骨／中足骨	骨端部	-	遠位端未癒合
SD1-2・SD2	哺乳類	不明	四肢骨		-	破片
SD1-3	哺乳類	ヤギ	上腕骨	骨幹部	右	
SD1-3	哺乳類	ヤギ	四肢骨	外位部	右	cutmark（内側に細い切傷？）
SD2	哺乳類	ブタ	四肢骨	外位部	右	ナチュラル
SD2	哺乳類	ヤギ	四肢骨	外位部／骨幹部	左	cutmark（骨幹部前面に細い切傷）
SX3	哺乳類	ヤギ	四肢骨	外位部／骨幹部	左	破片
SX3	哺乳類	不明	四肢骨	外位部	-	破片 3 点
SX3	哺乳類	不明	四肢骨	外位部	-	破片
SX3	哺乳類	不明	四肢骨	外位部	-	破片
SX3	哺乳類	不明	四肢骨	外位部	-	破片
SX5	哺乳類	イノシシ／ブタ	遊離歯	下顎大歯	左	被熱（灰褐色～青灰色）
SX5	哺乳類	イノシシ／ブタ	四肢骨	外位部	左	小さく（メス？）
SD5	哺乳類	ブタ	上腕骨	遠位部	右	cutmark（前位～外側にかけて切傷）
SD5	哺乳類	ヤギ	四肢骨	外位部（DP3-4）	左	孔隙



図版1 脊椎動物遺体

ブタ 1: 上腕骨 (R) 2: 楔骨 (R) 3: 脊骨 (R) 4: 距骨 (R)
ヤギ 5: 下顎骨 (L) 6: 上腕骨 (R) 7: 脊骨 (L) 8: 脊骨 (R)
サメ類 9: 椎骨 フグ科 / イシダイ科 10: 前上顎骨

第3節 鏡水原遺跡から得られた貝類遺体

千葉県立中央博物館 黒住耐二

鏡水原遺跡は那覇空港地域に位置する貝塚時代から近代に至る時代の遺跡であり、海岸線から約500m内陸の丘陵上に立地し、主に近世から近代の遺物が確認されている。この遺跡のいくつかの遺構からは、比較的まとまって人工遺物と共に貝類遺体が出土しており、時代の明確な資料として貝類からみた当時の生活の断面を考察することができると考えられた。ここに、その結果を報告する。

報告に先立ち、興味深い資料の検討の機会を与えて頂き、種々ご教示頂いた沖縄県立埋蔵文化財調査センターの大堀皓平氏と同センターの皆様にお礼申し上げる。

検討資料

今回報告する貝類遺体は、発掘時に確認されたもの（ピックアップ資料）で、堆積物（＝土壌）の水洗選別等のものは含まれていない。抽出されていた種の同定は筆者が行い、出土部位別のカウントは沖縄県埋蔵文化財調査センターの方々によって行われた。その集計結果が第52-57表である。

主な貝類遺体の出土遺構は2カ所存在しており、一つ目のSD1-3の溝状遺構からは、近代の遺物が出土せず、近世には埋められたと考えられており、考古年代は18世紀前半～19世紀前半、もう一方のSX3の礫敷遺構からは近世末から近代の遺物が多く出土しているが、確定な考古年代としては18世紀後半～20世紀前半とされる。以下では、主にこの2遺構に注目して分析を行った。

結果および考察

1. 出土貝類遺体の組成

今回の資料では、海産腹足類（巻貝）14科37種、海産二枚貝類10科19種、淡水産腹足類1科1種が確認され、陸産貝類は得られていない。また、淡水産巻貝も3個体得られているだけであった。

第52-57表から、遺構等の区分に基づいて、貝類の生息場所類型ごとの同定標本数（NISP: Number of Identified Specimens）として、第58表にまとめた。

この第58表から、第69図Aに優占種の、Bに生息場所類型の組成を示した。

優占種としては、各種のシャコガイ類が多く、マガ

キガイ・チョウセンサザエ・ヤコウガイ・ハマグリ類も目立ち、これらの種で全体の約半数を占めていた。近世のSD1-3ではヤコウガイが多く、ハマグリ類は少なく、ハイガイも少数ではあるが含まれていたが、近世末～近代のSX3ではハマグリ類の割合が大きくなり、ヤコウガイ・ハイガイは認められなかった。

生息場所類型組成では、上述の優占種の割合に起因して、シャコガイ類とマガキガイの生息するサンゴ礁のイノーネのものが約40%ともっと多く、チョウセンサザエの得られる干瀬とハマグリ類の見られる内湾が20%程度で、ヤコウガイの有無により礁斜面の割合は変化していた。サンゴ礁の岸側潮間帯や河口干瀬はかなり少なく、淡水域・陸域はほとんど存在しなかった。

優占種は殻サイズが4cm以上の中大形種であり、その他の種でも第58表に示したように2cm程度の小形種は僅かに認められてはいるが、食用貝類の主体とはなっていないことも特徴的であった。

2. 貝類の採集と利用

前述したように、近世期から近代にかけての本遺跡の貝類遺体の特徴はサンゴ礁のイノーネから礁斜面にかけての中大形貝類採集を中心で、近代には内湾干瀬のハマグリ類も選択的に採集していたということが示された訳である。ただ本遺跡の出土貝類個体数は同じ那覇空港地域の大嶺村跡（黒住, 2019b）と比較してかなり少なく、小形種がほとんど含まれていないことに起因している。

鏡水原遺跡周辺におけるいくつかのグスク時代から近代までの出土貝類と本遺跡出土の組成を比較して、この遺跡の貝類採集と利用を示してみたい。

グスク時代の遺跡では、内湾や河口干瀬に生息するウミニナ類等の塔型の小巻貝（時に方言名で“ちんぼーら”とも呼ばれる）やカンギク（こちらを“ちんぼーら”と呼ぶこともある）が大多数を占める遺跡が多く（黒住, 2002）、北側に漫湖を望む豊見城市の長嶺グスクではウミニナ類のカワアイが出土貝類の大多数であった（黒住・金城, 1988）。近世期では、漫湖北岸の渡地村跡（島, 2012）や鏡水原遺跡の南西に位置する大嶺村跡（黒住, 2019b）、同じく南にある伊良波西遺跡（花城, 1986）では、内湾の干瀬に生息するウラキツキガイが優占する組成が知られている。これらとは、今回のサンゴ礁の中大形貝類が大半を占める組成は大きく異なる。むしろ、出土数は僅かであったが、大嶺村跡の戦争直後と想定されている堆積物中の貝類組成に類似しており、この組成から“漁業者（うみんちゅう）”の確立というように捉えられるのかもしれない”（黒住, 2019b）とした。

そして、逆に考えると小形種の少なさは、貝類が日常的な食材ではなかったことを示しているように考えられる。

今回の鏡水原遺跡の結果は、イノーから礁斜面までのサンゴ礁海域に生息する食用として現在も珍重されるシャコガイ類・マガキガイ・チョウセンザザエ・ヤコウガイといった種を中心的に採集している漁業者の存在を示していると考えられた。これらの中大形種は鏡水原遺跡の漁業者由来ではなく、他集団からの持ち込みではないかということも想定されるが、第58表や第68図から優占種以外にもサンゴ礁域の多様な貝類が少数存在していることから、他集団からの持ち込みという想定は否定できると考えている。このようなグスク時代から近世間にかけてのサンゴ礁域での漁業者の存在ということは、以前に南城市・垣花遺跡においてグスク時代にはほとんど得られていないかったマガキガイが近世期に高い割合を占めるようになるという組成変化で示したことがある（黒住、2008）。しかし、垣花遺跡ではシャコガイ類やチョウセンザザエの割合はかなり低く、今回の鏡水原遺跡のような干瀬から礁斜面での採集は、垣花遺跡では干瀬が遠いことにも起因するのであろうが、活発ではなかったと想定される。

また、本遺跡では、首里城からも出土し、“キルン”の名で珍重され、中城湾側が供給地と想定されている（矢敷ら、2007）ハマグリ類も特に近世末～近代のSX3で目立っていた（第69図）。出土の絶対数が少ないことから、鏡水原遺跡のハマグリ類が自家消費的なものではなく、他所への供給を目的として採集されたものを確實に判断することはできないが、筆者は集中度が高いことから後者だと考えている。供給先が首里であるかどうかとも不明ではあるものの、以前に首里城への食用貝類（アラスジケマンが中心）の経時的な変化から、支配者層への食物供給（この場合は貝類）を行う漁撈集団の形成と存在を想定したことがあったが（黒住、2013）、鏡水原遺跡のハマグリ類を中心とした特徴的な組成は、このような現象の一端を示しているのではないかとも考えられる。

そして、ハマグリ類は大嵐村跡で示したような海草藻場の存在するような内湾（黒住、2019a）ではなく、現在の同属種の生息環境から砂泥質の干潟に生息していたと推測される。遺跡近隣では、漫湖へつながる入口部北岸が生息地ではないかと想定される。一方で、このように推測したハマグリ類の生息環境はサンゴ礁とは連続していない。また、大嵐村跡は本遺跡とは異なり、海岸部に立地しておりながら、グスク時代から近世期の層

からはサンゴ礁の貝類は少なかった訳である（黒住、2019b）。前述してきたハマグリ類やサンゴ礁のシャコガイ類等の貝類の特徴的な出土を考えるならば、鏡水原の漁業者の採集空間は、当時の間切のように集団間で、ある種テリトリーとして規制されていた可能性も想定されるのではないだろうか。

出土した海産貝類の情報から、海岸から500m程度内陸部に位置する鏡水原遺跡の活動を示してきたが、本報告書でも示されている通り（本報告書2章2節）、本遺跡での畑作等の農業も活発に行われており、本遺跡自体が“漁業者集団から形成されていた”訳ではないことは確実である。むしろ、近世期の集落に、農業者集団と漁業者集団（少人数であったかもしれないが）が存在していた可能性の高いことを示していると考えられる。なお、繰り返しになるが本遺跡の貝類採集はサンゴ礁の干瀬から礁斜面で貝類採集活動を行っており、内湾の潮間帯に高密度の“ちんぼうら”を時々得るような「半農半漁」のような形態ではあり得ず、かなり漁撈活動に特殊化していたことは確実である。

今回最も多く中大形貝類が得られたのは、近世期のSD1-3の礫を詰めた層であり（第52-58表）、ある種の土留めの礫として中大形貝類が用いられたと考えられる。出土した貝類の中には、ヒレインコやメンガイ類では死殻が持ち込まれており、これらは“礫”として整地等に利用されたと思われる。ただ、貝類の多くは死殻とは確認できず、食用後の殻が廃棄されていることも確實である。そして、本遺跡における小形種の少なさを指摘してきたが、石灰岩地の礫間でも図版2・3に示されるように、貝殻は溶解することは確実であり、小形種は溶解してしまったと考えることも可能はある。ただ、やはり図版3の小形二枚貝（ホソスジイナミ等）も残存しており、もし小形巻貝の“ちんぼうら”を含め小形種が多く食用にされていたならば、このSD1-3の礫層に廃棄されたと想定され、出土個体数は多くなったはずである。この貝類廃棄場所からも、やはり小形貝類は元々集落には多く持ち込まれていた訳ではないということ示していると考えている。

筆者は、首里城で食用に用いられた中大形貝類の殻は城内からほとんど出土しないことから、漆喰製作の貝灰原料ではないかという考えを示し、同時に埋め立て等に用いられた可能性もあるとした（黒住、2014）。今回の礫としての食用後の貝殻利用は、この埋め立て等へ再利用という想定を、僅かではあるが示唆するものと考えたい。

また、近世末～近代のSX3からはヤコウガイの出土

が前の時代から激減しており、もしかすると、蝶鏡や貝ボタン等でのヤコウガイ殻の利用により他集団への搬出された可能性もあるのかもしれない。

まとめ

海岸線から約500m内陸の丘陵上に立地する鏡水原遺跡では、主に近世から近代の遺構から海産貝類が発掘され、シャコガイ類・マガキガイ・チョウセンサザエ・ヤコウガイのサンゴ礁に生息する中大型種が多く、内湾にすむハマグリ類や泥干潟で見られるハイガイも目立った。特に、近世期の溝状遺構からはヤコウガイも多く、半農半漁のような形態ではなく、漁撈を中心をおいた人々（現在の“うみんちゅ”のような）の存在が想定された。農業が中心と考えられる集落において、漁業者が存在していた可能性を指摘できることは、当時の生活や社会構造を考える上で興味深いものと考えられる。この漁業者の貝類採集様式は近代でも同様であったようであるが、ヤコウガイの欠落とハマグリ類の増大の2点が前の時代と異なっていた可能性があった。ハマグリ類は首里等の他集団へ供給された可能性も考えられた。近世期の中大型貝類は、礫として整地等に利用されたようである。

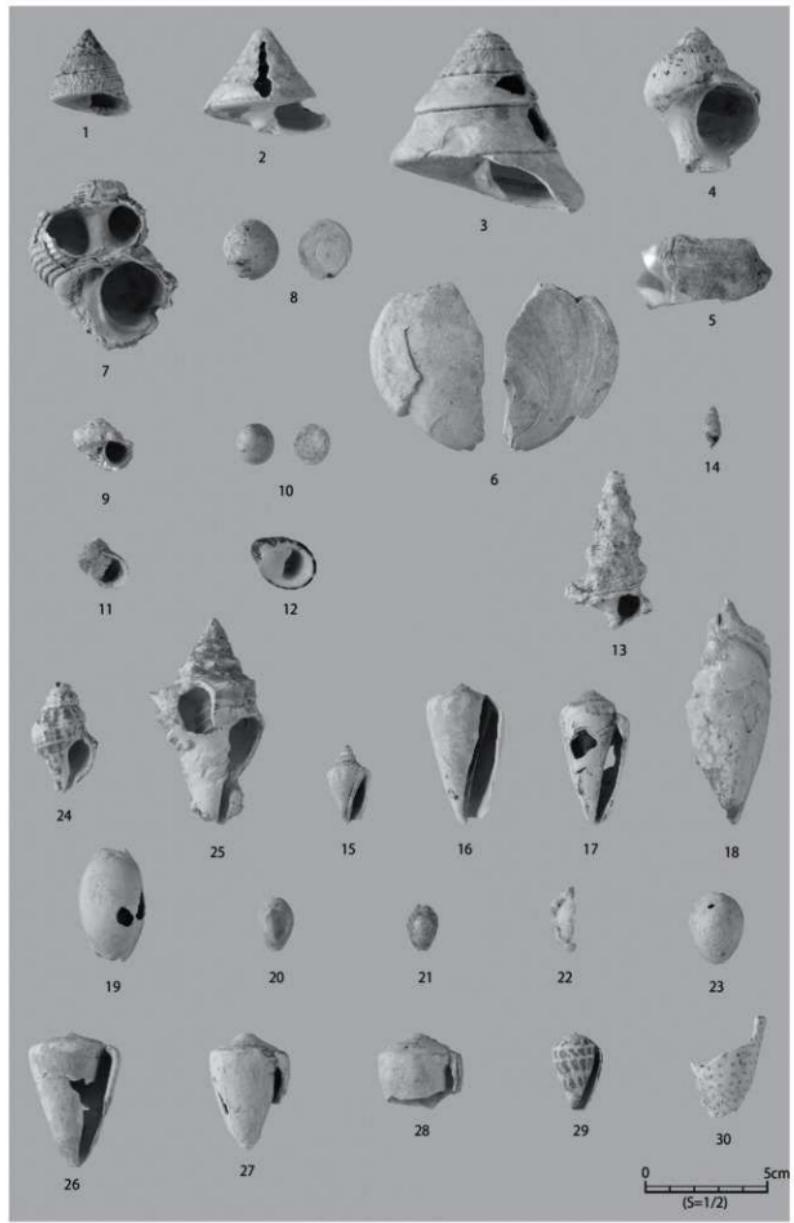
引用文献

- 花城潤子. 1986. 貝殻・伊良波西遺跡. 豊見城村文化財調査報告書. (1): 11-18, 64-67.
- 黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下尚子（編）, 先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査からー, pp. 67-86. 熊本大学.
- 黒住耐二. 2008. 垦花遺跡から得られた貝類遺体・垣花遺跡. 南城市文化財調査報告書. (3): 98-113, 180-185.
- 黒住耐二. 2013. 首里城淑順門西地区および奉神門地区の発掘調査で得られた貝類遺体・首里城跡・淑順門・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書. (68): 186-200.
- 黒住耐二. 2014. 貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化. In 高宮広土・新里貴之（編）, 琉球先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究・研究論文集. 第2集・琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷, pp. 55-70. 六一書房.
- 黒住耐二. 2019a. 大嶼村跡の海浜部堆積物中の貝類群・大嶼村跡・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書. (101): 158-166.
- 黒住耐二. 2019b. 発掘された貝類遺体に関するコメント・大嶼村跡・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書. (101): 167-185.

黒住耐二・金城亀信. 1988. 豊見城村の長嶺・保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類. 豊見城村の遺跡. 豊見城村文化財調査報告書. (3): 137-155.

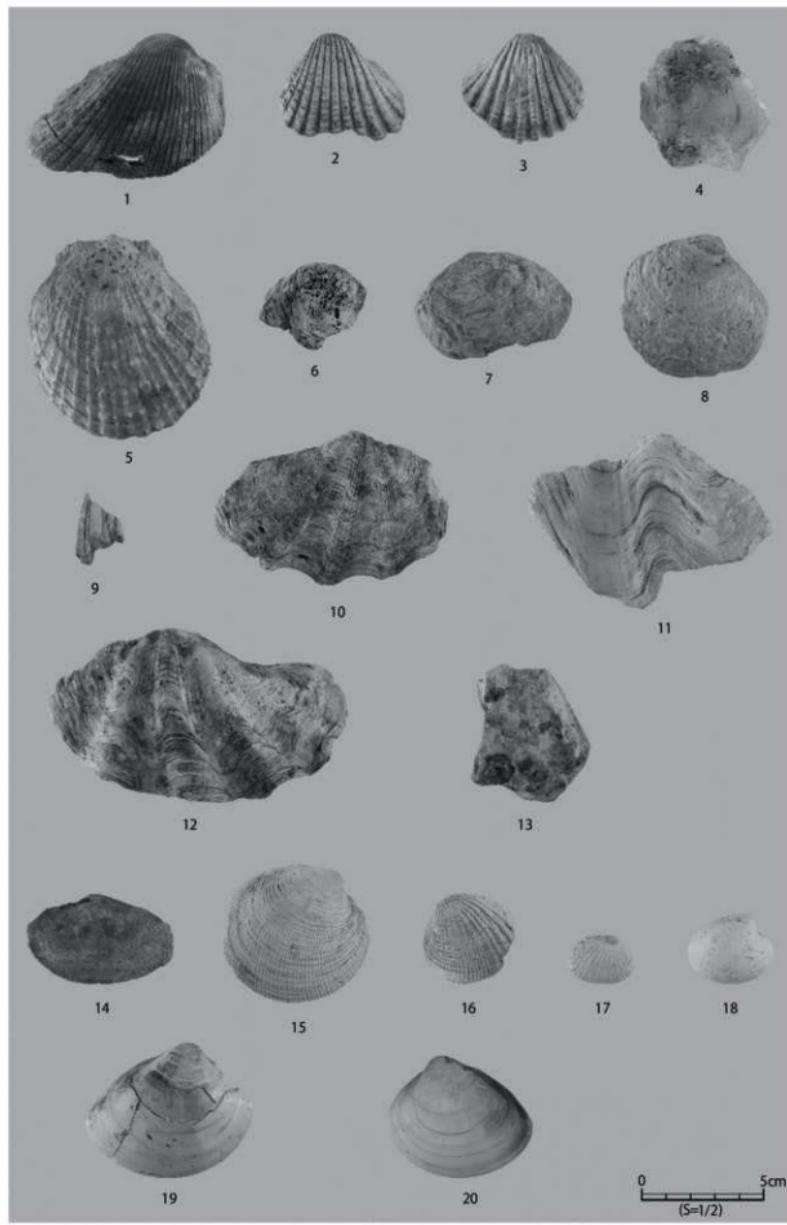
島 弘（編）. 2012. 渡地村跡・那覇市文化財調査報告書. (91): 1-399.

矢敷彩子・今井秀行・山口正士. 2007. 幻の沖縄島産ハマグリ類の謎を探る. 琉球大学21世紀プログラム「サンゴ礁島嶼系の生物多様性の総合解析」平成18年度成果発表会（要旨）.



図版2 貝類遺体（巻貝）

1:ニシキウズ 2:ギンタカハマ 3:サラサバテイラ 4:ヤコウガイ 5:ヤコウガイ(破片) 6:ヤコウガイ蓋 7:チョウセンサザエ 8:チョウセンサザエ
9:カンギク 10:カシキク蓋 11:マングローブアマガイ 12:アマオフネガイ 13:オニノツノガイ 14:カヤノミカニモリ 15:オハグロガイ 16:マガキガイ
17:マガキガイ 18:クモガイ 19:クチムラサキダカラ(スレ) 20:ハナビラダカラ 21:キイロダカラ 22:キイロダカラ(外唇) 23:ハナマルユキ(スレ)
24:ツノマタモドキ 25:オニコブシ 26:サラサミナシ 27:ヤナギシボリイモ 28:ヤナギシボリイモ 29:マライモ 30:アンボンクロサメ



図版3 貝類遺体（二枚貝）

1: リュウキュウサルボオ (死・R) 2: ハイガイ (L) 3: ハイガイ (R) 4: ニセマガキ (R) 5: メンガイ類 (L) 6: ヒレインコ (左殻・R)
7: シレナシジミ (L) 8: シレナシジミ (R) 9: シャコウ (不明) 10: オオシラナミ (R) 11: ヒレシャコ (不明) 12: オオシラナミ (L)
13: シャコガイ類 (製品?・不明) 14: マルダレガイ科 (印象化石・壳形) 15: ヌメガイ (R) 16: アラスジケマン (L)
17: ホスジイナミ (R) 18: オミナエシ (R) 19: ハマグリ類 (キルン?・R) 20: ハマグリ類 (キルン?・L)

第52表 鎌水原遺跡から出土した巻貝等の詳細（1）

番号	属	種	操作・通過・グリッド																		
			001		002		003		004		005										
				生息地	死別	退潮	退潮	NISP	死別	退潮	退潮	NISP	死別	退潮	NISP						
1	ニシキウズ科	ニシキウズ		1																	
2		オシロイハマ		1																	
3		サクラガイ		1																	
4-5																					
6	リュウテン科	セコロガイ						1	1												
7		ギョウセンガイ																			
8		チヨウセヒナミガイ																			
9		カシダガイ																			
10																					
11	アマオブキ科	コシダカニアガイ		1																	
12		マダラオブキガイ		1																	
13		アマオブキガイ		1																	
14	オニノツノガイ科	オノノツノガイ		1																	
15		コシダカニアガイ		1																	
16-17	スイショウガイ科	スイショウガイ		1																	
18		マガロガイ		1																	
19		カシダガイ		1																	
20	タカラガイ科	タカラガイ		1																	
21-22		カマガヤ		1																	
23	タマガイ科	タマガイ		1																	
24		マジガヤ		1																	
25	フジワラガイ科	フジワラガイ		1																	
26	イトマキボラ科	イトマキボラ		1																	
27-28	アッカガイ科	アッカガイ		1																	
29		セナギガイ		1																	
30	イセガイ科	アンゴロクオザメ		1																	
		タコヅルガイ		1																	
		イセガイ		1																	
		イセガイ		1																	
	トカラガタカリムナガイ科	トカラガタカリムナガイ	V-5, 6																		
	目	全形																			
ウニ属	ナガニクル科	ナガニクル	1	0	1	1	0	0	3	4	0	2	0	17	3	0	0	3	2	1	0
	合計																				

番号	属	種	操作・通過・グリッド																			
			001レベ内		002		003		004		005											
				生息地	死別	退潮	退潮	NISP	死別	退潮	退潮	NISP	死別	退潮	NISP							
1	ニシキウズ科	ニシキウズ		1																		
2		オシロイハマ		1																		
3		サクラガイ		1																		
4-5																						
6	リュウテン科	セコロガイ																				
7		ギョウセンガイ																				
8		チヨウセヒナミガイ																				
9		カシダガイ		1																		
10																						
11	アマオブキ科	コシダカニアガイ		1																		
12		マダラオブキガイ		1																		
13		アマオブキガイ		1																		
14	オニノツノガイ科	オノノツノガイ																				
15	ウミニホン科	ミズタマガイ		1																		
16-17	スイショウガイ科	スイショウガイ		1																		
18		カシダガイ		1																		
19		イヌヒタマガイ		1																		
20	タカラガイ科	タカラガイ		1																		
21-22		カマガヤ		1																		
23	タマガイ科	タマガイ		1																		
24		マジガヤ		1																		
25	フジワラガイ科	フジワラガイ		1																		
26	イトマキボラ科	イトマキボラ		1																		
27-28	アッカガイ科	アッカガイ		1																		
29		セナギガイ		1																		
30	イセガイ科	アンゴロクオザメ		1																		
		タコヅルガイ		1																		
		イセガイ		1																		
		イセガイ		1																		
	トカラガタカリムナガイ科	トカラガタカリムナガイ	V-5, 6																			
	目	全形																				
ウニ属	ナガニクル科	ナガニクル	1	0	1	1	0	0	2	7	0	1	1	1	4	8	2	0	2	1	1	
	合計			0	0	1	1	0	0	2	7	0	1	1	1	4	8	2	0	2	1	1

第53表 鏡水原遺跡から出土した巻貝等の詳細（2）

番号	科	種	扇序・遺傳・グリッド				SBII-ミケ内				SBII				SBII-ミケ外			
			001	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011	012	013	014	015	
1	ニシキウツ科	ニシキウツ	1-2-a															
2		ギンタラバマ	1-4-a															
3		サザナヒライ	1-4-a															
4-5		ミクニガイ属	1-4-a															
6	リュウテン科	リュウテン	1-3-a															
7		ギョウセンサザエ	1-3-a															
8		コロセニシギイ属	1-3-a															
9		ランギイ属	1-1-b															
10		アマオブネ科	コシダニアマガイ	1-1-b														
11		マツカツガイ属	1-1-b															
12		アズキガイ属	1-1-b															
13		オノメツガイ属	1-2-a															
14	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	1-1-b															
15		リュウキンカウニシギ	1-1-c															
16		イボシナ科	イボシナ	1-1-c														
17	ハーフト科	オハラガガイ	1-2-c															
18		スイショウガイ科	スイショウガイ	1-2-c														
19		タカラガイ科	タカラガイ	1-2-c														
20		タカラガイ科	タカラガイ	1-2-c														
21-22		タカラガイ科	タカラガイ	1-2-c														
23		タマガイ科	ヒトガイ	1-2-c														
24		フジツガイ科	フジツガイ	1-3-a														
25	イドマキガイ科	イドマキガイ	1-3-a															
26		ツツカキドコ科	ツツカキドコ	1-3-a														
27	オニコブン科	オニコブン	1-3-a															
28		アコギガイ科	アコギガイ	1-3-a														
29		シラカビガイ	シラカビガイ	1-3-a														
30		サラミンサン	サラミンサン	1-3-a														
31		ナタリガイ科	ナタリガイ	1-3-a														
32		イセガイ科	アンゴラフコガイ	1-2-c														
33			タコロカキドコ	1-2-c														
34			イボロカキドコ	1-2-c														
35			ヒトガイ	1-2-c														
36		上ウタカツ科	トウガタカツガイ	V-5, 6														
37			ウタカツ	トウガタカツガイ	V-5, 6													
38	ウニ科	ナガウニ	1-3-a															
39	ウニ科	ナガウニ	1-3-a															
番号	科	種	扇序・遺傳・グリッド				SBII-ミケ内				SBII				SBII-ミケ外			
			001	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011	012	013	014	015	016
1	ニシキウツ科	ニシキウツ	1-2-a															
2		ギンタラバマ	1-4-a															
3		サザナヒライ	1-4-a															
4-5		ミクニガイ属	1-4-a															
6	リュウテン科	リュウテン	1-3-a															
7		ギョウセンサザエ	1-3-a															
8		コロセニシギイ属	1-3-a															
9		ランギイ属	1-1-b															
10		アマオブネ科	コシダニアマガイ	1-1-b														
11		マツカツガイ属	1-1-b															
12		アズキガイ属	1-1-b															
13		オノメツガイ属	1-2-a															
14	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	1-2-a															
15	リュウキンカウニシギ	リュウキンカウニシギ	1-1-c															
16	イボシナ科	イボシナ	1-1-c															
17	ハーフト科	オハラガガイ	1-2-c															
18		スイショウガイ科	スイショウガイ	1-2-c														
19		タカラガイ科	タカラガイ	1-2-c														
20		タカラガイ科	タカラガイ	1-2-c														
21-22		タカラガイ科	タカラガイ	1-2-c														
23		タマガイ科	ヒトガイ	1-2-c														
24		フジツガイ科	フジツガイ	1-3-a														
25	イドマキガイ科	イドマキガイ	1-3-a															
26		ツツカキドコ科	ツツカキドコ	1-3-a														
27	オニコブン科	オニコブン	1-3-a															
28		アコギガイ科	アコギガイ	1-3-a														
29		シラカビガイ	シラカビガイ	1-3-a														
30		サラミンサン	サラミンサン	1-3-a														
31		ナタリガイ科	ナタリガイ	1-3-a														
32		イセガイ科	アンゴラフコガイ	1-2-c														
33			タコロカキドコ	1-2-c														
34			イボロカキドコ	1-2-c														
35			ヒトガイ	1-2-c														
36		上ウタカツ科	トウガタカツガイ	V-5, 6														
37			ウタカツ	トウガタカツガイ	V-5, 6													
38	ウニ科	ナガウニ	1-3-a															
39	ウニ科	ナガウニ	1-3-a															

第54表 鎌水原遺跡から出土した巻貝等の詳細（3）

番号	科	種	発存・遺損・グリッド												基準
			0P30 0-10	0406 11-20	0417 21-30	0406 31-40	0417 41-50	0406 51-60	0417 61-70	0406 71-80	0417 81-90	0406 91-100	0417 101-110		
1		ニシキウズ科	ニシキウズ 1-2-a												
2			ギンコウハバ 1-2-a												
3			サクラガイアラ 1-2-a												
4-5															
6		リュウタン科	マコロガイ 1-3-a	1	1										
7			ギョウセンガイサニ 1-3-a												
8			チヨウセイサニユ 1-3-a												
9															
10			ランガイ												
11		アマオブネ科	ニシダクアーガイ 1-1-b												
12			マコロガイ 1-0-a												
13			アマオブネ												
14			オノノツノガイ 1-2-c												
15			コロガイ												
16		スイショウガイ科	マコロガイ 1-2-c												
17			タカラガイ 1-2-c												
18															
19			ヒメタカラガイ 1-2-c												
20			タカラガイ 1-2-c												
21-22			タカラガイ 1-2-c												
23		ダマガイ科	ヒメタガイ 1-2-c												
24			フジワリ科	ヒメタガイ 1-2-c											
25			イトマキボラ科	ヒメタガイ 1-2-c											
26			オハコブン科	オニコブン 1-2-c											
27			アシカガイ科	シラカミガイ 1-3-a											
28				サクラミナリ 1-4-b											
29			イセガイ科	サナヅシガイ 1-3-a											
30				アンボウクイサメ 1-2-c											
31				タコモカドリ 1-2-c											
32				イシゴイ 1-2-a											
33		トウガタカワニ科	トウガタカワニ V-5-a	6											
34			貝目												
35		ウニ科	ナガラクニ 1-2-a												
			(合)	0	0	1	1	0	0	2	2	1	0	0	1

番号	科	種	発存・遺損・グリッド												基準
			テンゼテ 0-10	コクラン 11-20	ホル 21-30	ホル 31-40	ホル 41-50	ホル 51-60	ホル 61-70	ホル 71-80	ホル 81-90	ホル 91-100	ホル 101-110		
1		ニシキウズ科	ニシキウズ 1-2-a												
2			ギンコウハバ 1-2-a												
3			サクラガイアラ 1-2-a												
4-5															
6		リュウタン科	マコロガイ 1-4-a												
7			ギョウセンガイサニ 1-3-a	1	1										
8			チヨウセイサニユ 1-3-a												
9															
10			ランガイ												
11		アマオブネ科	ニシダクアーガイ 1-1-b												
12			マコロガイ 1-0-a												
13			アマオブネ												
14			オノノツノガイ 1-2-c												
15			コロガイ												
16-17		スイショウガイ科	マコロガイ 1-2-c												
18			タカラガイ 1-2-c												
19			タカラガイ 1-2-c												
20			タカラガイ 1-2-c												
21-22		タカラガイ 1-2-c													
23		ダマガイ科	ヒメタガイ 1-2-c												
24			フジワリ科	ヒメタガイ 1-2-c											
25			イトマキボラ科	ヒメタガイ 1-2-c											
26			オハコブン科	オニコブン 1-2-c											
27			アシカガイ科	シラカミガイ 1-3-a											
28				サクラミナリ 1-4-b											
29			イセガイ科	アンボウクイサメ 1-2-c											
30				タコモカドリ 1-2-c											
31				イシゴイ 1-2-a											
32		トウガタカワニ科	トウガタカワニ V-5-a	6											
33			貝目												
34		ウニ科	ナガラクニ 1-2-a												
			(合)	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	1	

第56表 錦水原遺跡から出土した二枚貝類等の詳細（2）

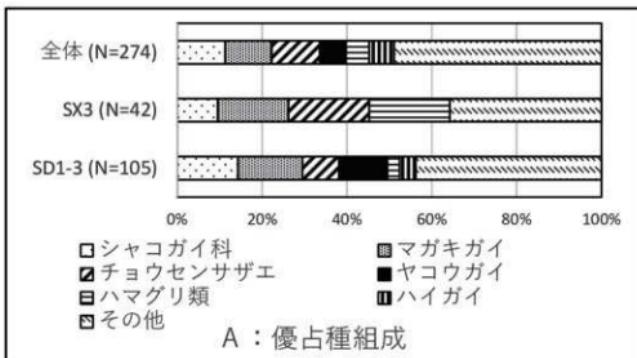
番号	科	種	発掘・通積・グリット			SHI-リケト内			SHI-リケト			SHI-リケト			
			発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	
1	フキガイ科	リュウキウカキボコ	生地	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8
2 - 3		ハマガイ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4	イシガキガイ科	シマガキ		■	■										
5		ニセマキ		■	■	■									
6	ウミザキ科	シマガキ		■	■										
7		シマガキ		■	■										
8	ツリガイ科	ウミカキガガイ		■	■										
9	モクダカ科	セヒロイコ		■	■										
10	サルガイ科	リュウキウカキボコ	■	■	■										
11		シマガキ	■	■	■										
12	シャコガイ科	オオラクチ		■	■										
13		シマガキ	■	■	■										
14	マルスレガイ科	マルスレガイ科(化粧)	SHI-12	1	1										
15		アヌシジマツ	■	■	■										
16		ホフスジマツ	■	■	■										
17		オミナシ	■	■	■										
18		ハマガキ(カルシウム)	■	■	■										
19 - 20	チドリミオカ科	シマガキ		■	■										
21	二枚貝	不規				1	0	2	1	0	2	6	0	0	2
		合計		0	0	9	1	1	0	0	0	3	3	1	0
番号	科	種	発掘・通積・グリット			SHI-リケト内			SHI-リケト			SHI-リケト			
			発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	
1	フキガイ科	リュウキウカキボコ	生地	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8
2 - 3		ハマガイ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4	イシガキガイ科	ニセマキ		■	■										
5	ウミザキ科	シマガキ		■	■										
6	ツリガイ科	ウミカキガガイ		■	■										
7 - 8	モクダカ科	セヒロイコ		■	■										
9	サルガイ科	リュウキウカキボコ		■	■										
10	シャコガイ科	シマガキ		■	■										
11		シマガキ		■	■										
12	マルスレガイ科	シマガキ		■	■										
13		シマガキ		■	■										
14	マルスレガイ科	マルスレガイ科(化粧)	SHI-12	1	1										
15		アヌシジマツ	■	■	■										
16		ホフスジマツ	■	■	■										
17		オミナシ	■	■	■										
18		ハマガキ(カルシウム)	■	■	■										
19 - 20	チドリミオカ科	シマガキ		■	■										
21	二枚貝	不規				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		合計		0	0	0	9	1	1	0	0	0	3	3	1
番号	科	種	発掘・通積・グリット			SHI-リケト内			SHI-リケト			SHI-リケト			
			発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	
1	フキガイ科	リュウキウカキボコ	生地	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8
2 - 3		ハマガイ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4	イシガキガイ科	ニセマキ		■	■										
5	ウミザキ科	シマガキ		■	■										
6	ツリガイ科	ウミカキガガイ		■	■										
7 - 8	モクダカ科	セヒロイコ		■	■										
9	サルガイ科	リュウキウカキボコ		■	■										
10	シャコガイ科	シマガキ		■	■										
11		シマガキ		■	■										
12	マルスレガイ科	シマガキ		■	■										
13		シマガキ		■	■										
14	マルスレガイ科	マルスレガイ科(化粧)	SHI-12	1	1										
15		アヌシジマツ	■	■	■										
16		ホフスジマツ	■	■	■										
17		オミナシ	■	■	■										
18		ハマガキ(カルシウム)	■	■	■										
19 - 20	チドリミオカ科	シマガキ		■	■										
21	二枚貝	不規				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		合計		0	0	0	1	1	0	0	0	2	4	0	2
番号	科	種	発掘・通積・グリット			SHI-リケト内			SHI-リケト			SHI-リケト			
			発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	発掘	通積	グリット	
1	フキガイ科	リュウキウカキボコ	生地	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8	1	8
2 - 3		ハマガイ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4	イシガキガイ科	ニセマキ		■	■										
5	ウミザキ科	シマガキ		■	■										
6	ツリガイ科	ウミカキガガイ		■	■										
7 - 8	モクダカ科	セヒロイコ		■	■										
9	サルガイ科	リュウキウカキボコ		■	■										
10	シャコガイ科	シマガキ		■	■										
11		シマガキ		■	■										
12	マルスレガイ科	シマガキ		■	■										
13		シマガキ		■	■										
14	マルスレガイ科	マルスレガイ科(化粧)	SHI-12	1	1										
15		アヌシジマツ	■	■	■										
16		ホフスジマツ	■	■	■										
17		オミナシ	■	■	■										
18		ハマガキ(カルシウム)	■	■	■										
19 - 20	チドリミオカ科	シマガキ		■	■										
21	二枚貝	不規				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		合計		0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1

第57表 鏡水原遺跡から出土した二枚貝類等の詳細（3）

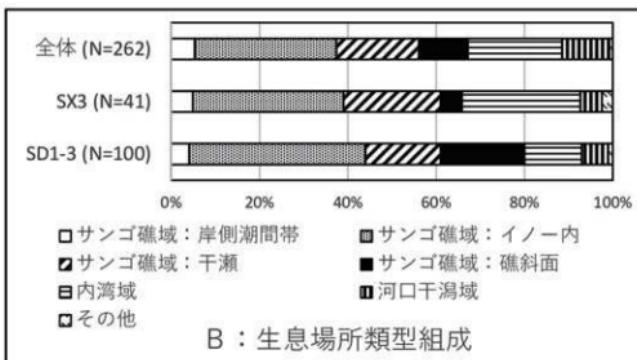
品目	科	種	II期				III期				IV期				V期				VI期				
			壳形	殻面	殻高	殻幅	壳形	殻面	殻高	殻幅	壳形	殻面	殻高	殻幅	壳形	殻面	殻高	殻幅	壳形	殻面	殻高	殻幅	
1	ツキガイ科	リュウキンウツムガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
2+3		ハマガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
4	イタガガイ科	シマガガイ	■-1-a				■-1-a				■-1-a				■-1-a				■-1-a				
5		ミヤマガイ	■-1-b				■-1-b				■-1-b				■-1-b				■-1-b				
6	ウミガク科	ミシマガイ	■-2-c				■-2-c				■-2-c				■-2-c				■-2-c				
7	ツキガイ科	カラムガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
8	イカガイ科	アサヒガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
9		シジミ科	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
10+11	二枚貝属	シマコガガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
12		ツルガイ科	リュウキンウツムガイ	■-2-c	c	1	1																
13		シマコガガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
14		マルスグレガイ科	マルスグレガイ(化石)	■-12																			
15			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1												
16			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1												
17			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1												
18			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1												
19+20	二枚貝属	ハマガリ(カルビン)	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
	二枚貝属	イソハマガリ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
	二枚貝属	不明																					
		計数	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	1	0	1	

品目	科	種	I期				II期				III期				IV期				V期				
			壳形	殻面	殻高	殻幅	壳形	殻面	殻高	殻幅	壳形	殻面	殻高	殻幅	壳形	殻面	殻高	殻幅	壳形	殻面	殻高	殻幅	
1	ツキガイ科	リュウキンウツムガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
2+3		ハマガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
4	イタガガイ科	ニセコガガイ	■-1-b				■-1-b				■-1-b				■-1-b				■-1-b				
5	ウミガク科	ミシマガイ	■-2-a				■-2-a				■-2-a				■-2-a				■-2-a				
6	ツキガイ科	カラムガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
7	ツケムガイ科	セヒシムガイ	■-2-b	L	8	1	■-2-b	L	8	1	■-2-b	L	8	1	■-2-b	L	8	1	■-2-b	L	8	1	
8		シジミ科	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
9	二枚貝属	シマコガガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
10		ツルガイ科	リュウキンウツムガイ	■-2-c	c	1	1																
11		シマコガガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
12		ツルガイ科	シマコガガイ	■-2-c	c	1	1																
13		マルスグレガイ科	マルスグレガイ(化石)	■-12																			
14			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1
15			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1
16			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1
17			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1
18			アラシガイ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1
19+20	二枚貝属	ハマガリ(カルビン)	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
	二枚貝属	イソハマガリ	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	■-2-c	L	8	1	
	二枚貝属	不明																					
		計数	1	1	0	0	0	2	1	18	20	4	18	31	2	32	113						

	SD1-3 (N=105)	SX3 (N=42)	全体 (N=274)
シャコガイ科	15	4	31
マガキガイ	16	7	30
チョウセンサザエ	9	8	31
ヤコウガイ	12	0	17
ハマグリ類	3	8	15
ハイガイ	4	0	16
その他	46	15	134



	SD1-3 (N=100)	SX3 (N=41)	全体 (N=262)
サンゴ礁域：岸側潮間帯	4	2	14
サンゴ礁域：イノー内	40	14	84
サンゴ礁域：干瀬	17	9	49
サンゴ礁域：礁斜面	19	2	29
内湾域	13	11	56
河口干潟域	6	2	28
その他	1	1	2



第69図 鏡水原遺跡から出土した貝類遺体の生息場所類型組成図

第4節 鏡水原遺跡出土陶磁器より検出された圧痕

パリノサーヴェイ株式会社・大堀皓平

はじめに

鏡水原遺跡では、沖縄産陶器の胎土中に混和物が確認されたことから、圧痕法を用いて検出を行った。本稿では、その成果について報告する（注1）。

1. 対象資料と調査方法

(1) 調査対象資料（大堀）

今回調査した資料は、鏡水原遺跡より出土した沖縄産陶器・瓦質土器・陶質土器・瓦・円盤状製品で、確認した資料は計1324点である。調査は資料表面を肉眼及び実体顕微鏡（島津理化 STZ-171-TLED）を用いた観察により混和物の有無を確認した。その結果、沖縄産無釉陶器2点、同瓦質土器1点、陶質土器1点の4点から混和物の圧痕が確認された。

(2) 分析方法（パリノ）

上記の資料について、外面、内面、断面を写真撮影後、

圧痕部を双眼実体顕微鏡（ZEISS社製：Stemi200-C）で観察する。圧痕部を水と面相筆、プロワーを用いて洗浄し、砂泥を慎重に除去する。（第71図、第72図No.139）は、接合部に圧痕が存在するため、温存を優先する。洗浄後の圧痕部を実体顕微鏡で写真撮影を実施する。

圧痕レプリカ作成は、小畠・大堀（2019）を参考に、丑野・田川（1991）の方法に基づき実施する。離型剤は水を使用する。（第71図、第72図No.139）を除く土器圧痕部を水に十分に含浸させた後、プロワーを用いて、圧痕内に充填した余分な水分を除去する。印象材は、シリコン樹脂（株式会社ニッシン製：JMシリコン インジェクションタイプ）を使用し、圧痕部に注入する。硬化後の印象材を、資料を破壊しないように細心の注意を払いながら取り出す。接合部や胎土が剥落する等破損の懸念が生じたため、レプリカ作成は1回のみにとどめている。レプリカ採取後の圧痕周辺にシリコン樹脂の油分が残る場合は、クロロホルム：メタノール（2:1）溶液を用いて除去する。

圧痕レプリカは、デジタルノギスで長さ、幅、厚さを計測後、表面のゴミやホコリを可能な限り除去し、電子



1



2



3



4

1. 圧痕観察

3. 圧痕レプリカ蒸着

2. 圧痕レプリカ作製

4. 走査型電子顕微鏡観察

顕微鏡観察用に整形する。カーボンコーティングを使用して、レプリカにカーボン蒸着処理を施す。蒸着後のレプリカを、ドータイトを使用して電子顕微鏡観察ステージに接着し、走査型電気顕微鏡(SEM)(日本走査型電子株式会社製:JCM5700)で観察および写真撮影を実施する。

第59表 確認された圧痕一覧表

集計 番号	注記	分類	器種	部位	備考	重量 (g)	精粗	圧痕観察結果								
								検出箇 所	種類	部位	状態	点数	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	記号
1082	0627 SD1-3 レキ内	沖縄産 瓦質土器	火炉	腹部	稻毛ミ 貝压痕 ×2	38.0	精	断面 外面 内面	イネ	腹	破片	14 5 3	5.10 + - -	2.67 + - -	1.10 + - -	29回 47
	0427 Ⅱ層	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	腹部	貝压痕	46.1	精	内面	ヌメカ ワニナ	腹	完形	1	7.49	3.21	2.43	60回 139
	479	SD1-3 レキ内	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	腹部	貝压痕	30.6	精	内面 ～断面	ヌメカ ワニナ	腹	破片	1	8.09 +	3.47 +	2.23 +
1242	0327 SD10	沖縄産 陶質土器	蕎	嘴部	貝目 压痕	31.3	精	外面 ～断面	ヌメカ ワニナ	腹	完形	1	8.46	2.80 +	1.27 +	39回 68
357	0626 SD1-3 レキ内	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	底部	貝目 压痕	143.3	精	断面	ヌメカ ワニナ	腹	完形	1	-	-	-	-
399	0627 SD1-3 レキ内	沖縄産 無釉陶器	瓶	底部	貝目 压痕	116.1	精	断面	ヌメカ ワニナ	腹	完形	1	-	-	-	-

(1) イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

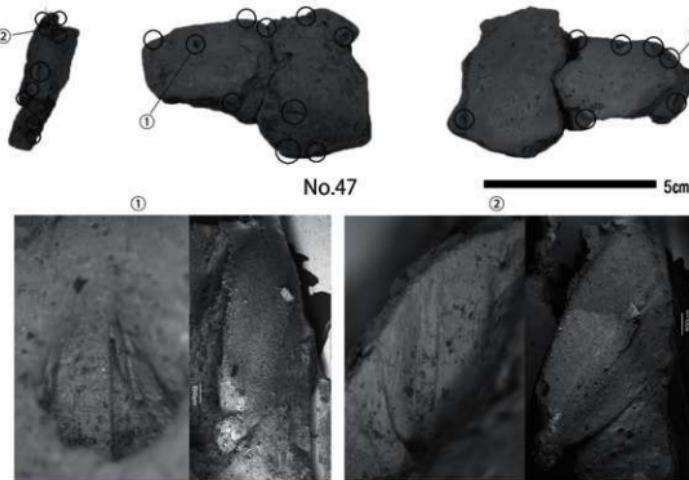
沖縄産瓦質土器火炉(第71図)の断面14点、外面5点、内面3点の計22点が確認された。いずれも破片であり、他の5資料は完形で概ね袋状を呈す。保存状態は①を除いて概ね良好であり、特に②は良好で圧痕部は黒色を呈し、炭化糊片が残存する。

イネ糊はやや扁平な長楕円体を呈し、基部に斜切状凹

種実圧痕の同定は、現生標本を参考に実施する。卷貝類圧痕の同定は、黒住耐二氏のご教示を得た。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、写真を添付して同定根拠とする。分析後は、資料を返却する。

2. 調査結果 (第59表)

柱形の果実序柄(小穗軸)と1対の護穎を有し、その上に外穎と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲穎を構成する。表面には颗粒状突起の織列が確認される。圧痕レプリカ②の大きさは、残存長5.10mm、残存幅2.67mm、残存厚1.10mmを計る(第71図)。イネ糊圧痕数点は厚みを有することから、糊内部に米が入る状態であった可能性と、脱穀(だっぷ: 糊殻を取り去る)後の糊殻



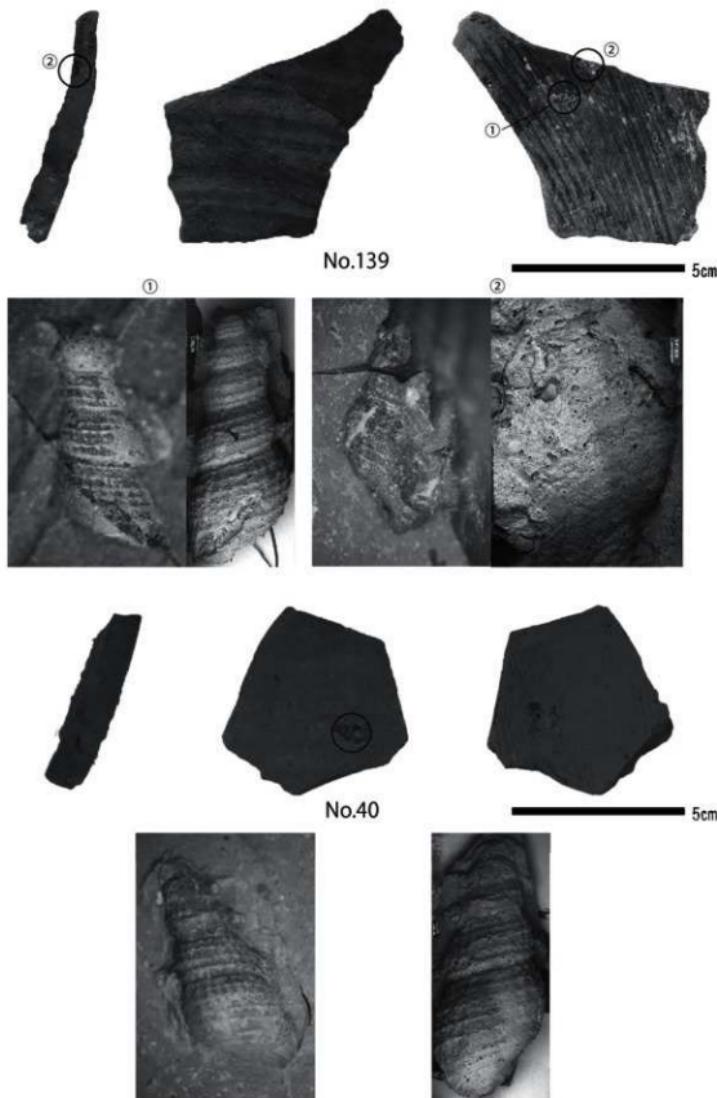
第71図 イネ糊確認資料と確認された圧痕 (左: 圧痕部接写 右: SEM 画像)

の状態であった可能性が考えられ、判別は困難であった。

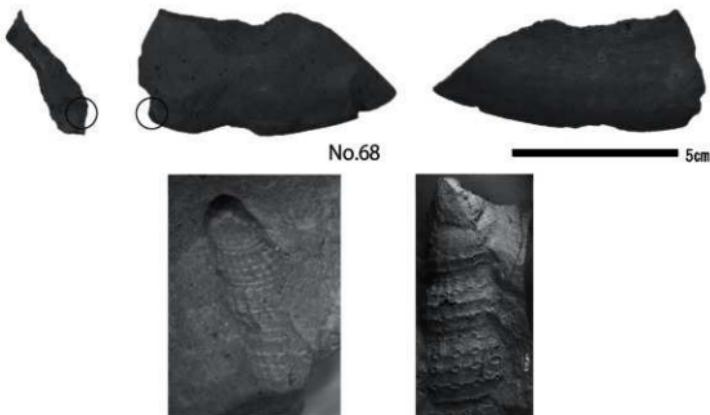
(2) ヌメカワニナ (*Melanoides tuberculata*)

掲載資料中からは、沖縄産無軸陶器擂鉢（第72図 No.139）に2点、沖縄産無軸陶器擂鉢（第72図

No.40）に1点、沖縄産陶質土器蓋（第73図）に1点が確認された。また掲載外の資料中からも、沖縄産無軸陶器擂鉢（第59表No.357）から1点、沖縄産無軸陶器瓶（第59表No.399）から1点が確認された。今回



第72図 貝丘痕確認資料と確認された圧痕（1）（左：圧痕部接写 右：SEM画像）



第73図 貝压痕確認資料と確認された压痕（2）（左：压痕部接写 右：SEM画像）

発見された貝压痕は、いずれもヌメカワニナと同定された。トウガタカワニナ科の腹足綱で、奄美諸島以南の河川中流に生息し、特に石底などに好む。

3. 考察

イネ科の確認された資料は観察資料1324点中1点に限られるが、混入している瓦質土器には表層压痕のみでも22点に上り、内外面・断面の各箇所で発見されていることから、胎土中に大量に含まれていることが想定される。また、沖縄産瓦質土器にのみ確認される。これらの特徴は大瀬村跡と同様であることから、意図的な混入であると考えられる。

一方で、巻貝压痕は観察資料1324点中5点であり、(第72図No.139)は2点が確認されたが、それ以外は1点のみである。このような傾向から、大瀬村跡と同様の傾向であることから、大瀬村跡と同一の产地で生産された沖縄産陶器・陶質土器であることを示す証左であると考えられる。

本稿の作成に当たり、黒住耐二氏には貝压痕の種同定についてご協力を頂いた。この場を借りてお礼申し上げます。

注：当論の分担は次のとおりとする。

- 1 (1)、2 (2)、3 : 大堀
- 1 (2)、2 (1) : パリノサーヴェイ株式会社

参考文献

- 小畠弘己・大堀皓平 2019「大瀬村跡出土資料の土器等压痕について」沖縄県立埋蔵文化財センター編『大瀬村跡—那覇空港事務所管内塔行合新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第101集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 1982『日本の野生植物 草本I 単子葉類』平凡社
- 丑野 裕・田川裕美 1991「レプリカ法による土器压痕の観察」『考古学と自然科学』第24号日本文化財科学会

第5章 総括

第1節 立地と地層

立地と地層 銀水原遺跡は、地質上では島尻層微高地の西端部に位置し、そのすぐ西側は標高2～3m程度の沖積層である。発掘調査によって、大きく7つの地層が確認された。それぞれの地層は、中に含まれていた遺物や理化学的な年代測定によって、以下のように推定される。

I層：戦後～現代の地層

II層：近世～近代の耕作層（17c～20c前半）

III層：グスク時代の地層（11c）

IV層：縄文時代の遺物が混ざる層（約3,000～2,500年前）

V層：縄文時代の遺物が混ざらない層（地山か）

VI層：赤土層（地山の島尻マージ層）

VII層：瑠璃石灰岩の岩盤

第2節 遺構

1 近世・近代の遺構

SD 溝状遺構は9基が確認された。これらの溝によって方形に区画が形成され、土地区画を示す溝であると考えられる。覆土中からは近世に混じって近代の遺物も多く出土している。遺構深度は総じて深度0.5mに満たないことから、上部が後に削られたと想定される。ただしSD1のみは深度1.0m以上と規模が大きく、さらに覆土中の遺物から、近世と近代に3度に渡る変更が行なわれていることが理解された。

SP 29基が検出されたが、覆土の堆積や地図・航空写真から戦後の土地利用に伴う構築物の跡と理解される。

SX 正確が特定できなかった遺構で、4基が検出された。中でもSX3は碗や杯などの遺物が底面に集中しており、日本産磁器杯がセット関係であったことからも埋納土坑であった可能性が高い。またSX3はSD1の北側を並行する石敷遺構であり、SX3が道路でSD1がその側溝と想定することができる。

2 グスク時代の遺構

SP 調査区の中央部に9基検出された。しかし分布に建物プラン等の規則性は認められず、詳細な性格は不明である。年代は理化学分析により概ね8c～11cのもので、グスク時代初期に比定される。

第3節 遺物

1 陶磁器

1-1 中国産陶磁器

中国産陶磁器は175点が出土した。内訳として青磁、白磁、青花磁器、色絵磁器、瑠璃釉磁器、褐釉陶器、無釉陶器である。

青磁 碗と皿の計16点が出土し、瀬戸ほかの編年Ⅴ期の碗（75）やⅥ期の皿（19）が得られている。

白磁 碗・小碗、皿、杯の計31点が出土した。年代の判別資料には、瀬戸ほかの分類でD類とされる資料（127）が確認されている。

青花磁器 碗・小碗、皿、杯の105点が得られており、18c～19cの景德鎮窯産（93）や德化窯産（25・26・27・28・92）が確認された。

色絵・瑠璃釉 色絵は碗・小碗・杯の計7点、瑠璃釉は小杯と器種不明の計2点である。いずれも德化窯産の18c～19cの資料で色絵（29・30）や瑠璃釉（1）などが挙げられる。

褐釉・無釉陶器 褐釉陶器は壺と器種不明の12点、無釉陶器は壺とみられる2点が出土している。褐釉陶器の壺（94）は15c～16c頃、無釉陶器（31・95）は表面に叩き目が確認されるので渡地村跡や大嶺村跡に類例がみられる。

1-2 タイ産土器

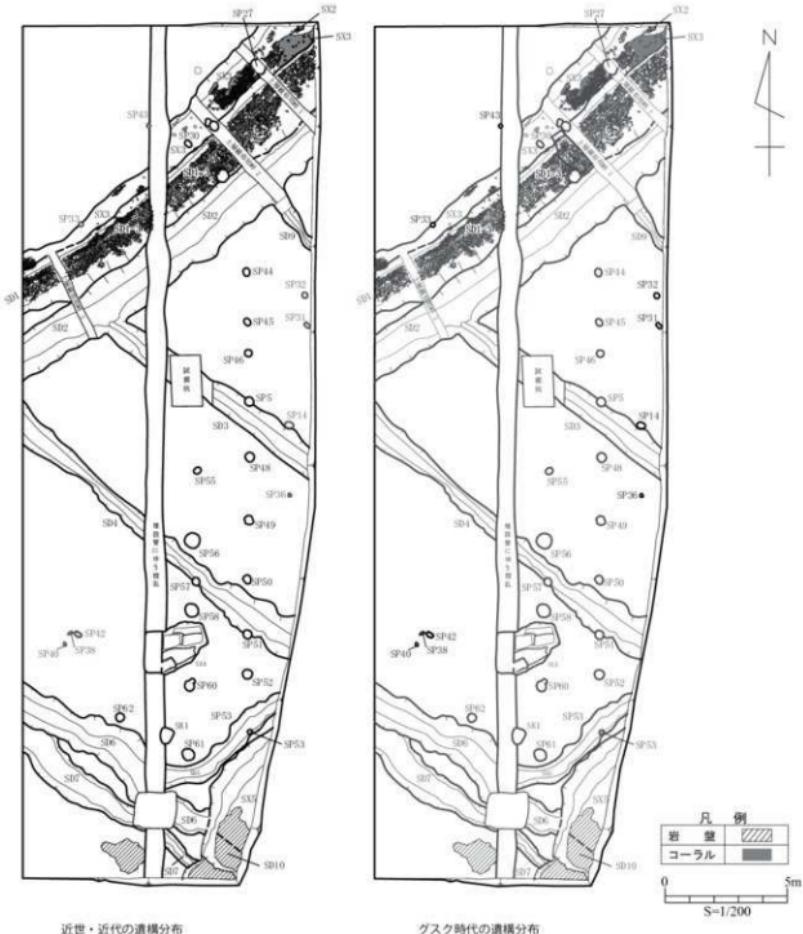
タイ産の資料は、いわゆる半縫土器の蓋（96）1点のみが出土している。

1-3 日本産陶磁器

日本産陶磁器は177点が出土した。内訳として白磁、染付、色絵、施釉陶器、その他近代磁器である。

白磁 碗・小碗、皿、鉢、蓋、杯・小杯、灯明具、衛生陶器、器種不明の20点が得られている。代表的な資料には19c～20cの瀬戸・美濃系の杯（97）が挙げられる。

色絵 色絵には碗をはじめ小碗、皿、急須、杯の9点が出土している。碗（70・132）や急須（77）など



第74図 検出遺構の変遷図

が挙げられる。

施釉陶器 皿、壺、急須、杯、瓶・袋物、鉢、蓮華、器種不明の 15 点が得られている。瑠璃釉は鉢(4)の 1 点のみである。また蓮華には眠平焼(3)の資料が確認された。それ以外に丹波産とみられる壺(2)がみられる。

近代陶磁器 印判やコバルトなど近代に生産された磁器で、碗(71・76・78・98・135・136)・小碗(102・103)、皿・小皿(66・105)、変形皿(85)、急須(134)、蓋(100)、杯(83・84・86・99・101・133・104・137)、鉢(88)、袋物、灯明具(87)、衛生陶器(138)、器種不明の 130 点が出土した。

1-4 沖縄産陶磁器

最も出土量の多く、施釉陶器 488 点、無釉陶器 334 点が得られている。

施釉陶器 碗(32・33・34・35)・小碗(106)、皿、鉢、壺、蓋・壺か瓶類(36・22)、急須(107・128)、蓋(5)、鍋、火炉(37)、火入れ、灯明具(108)、火取、酒注、瓶(21・126)・袋物、不明といった多様な器種が確認されている。

無釉陶器 鉢、描鉢(39・40・111・139)、壺・甕(42・43・44・45・46・67・112)、水鉢(38・109・110)、灯明具、火取、德利(41)、瓶、袋物といつ

た、比較的大型の器種が確認されている。なお、壺のうち(112)には窯記号が残されている。

1-5 瓦質土器・陶質土器

瓦質土器 壺(6)と火炉(47)の 2 点のみが得られている。(47)には多数の種類痕痕が確認される。

陶質土器 鉢(48・49)、急須、蓋(68・72)、急須蓋、火炉(50)、鍋蓋、器種不明など 132 点が出土している。(68)には貝殻痕痕が確認される。

2 石製品・石造物・石材、木製品、金属製品、錢貨

2-1 石製品・石造物・石材

石製品・石造物 粘板岩製の石盤(115)、頁岩製の石硯(7)、不明石製品の 3 点が確認された。いずれも近代の日本産である。石造物は琉球石灰岩製の器種不明 1 点のみである。

石材 155 点が得られている。輝緑岩や石英といった出土石器の素材である石材をはじめ、緑色千枚岩・片岩や中粒砂岩、角閃石ひん岩など沖縄島北部及び慶良間諸島に産する石材も確認された。なお、詳細な石材及びその点数は第 60 表のとおりである。

第 60 表 石材別出土石器・石材集計表

種類	色調・材質	石器			石製品		石造物		石材		合計	
		打製 石斧	磨削石	石核	メッシュ スクレイパー	石鏡	石旗	器種 不明	器種 不明	チップ	石材	
火成岩	角閃石ひん岩									1	1	
	輝綠岩	1	1							6	8	
	粘板岩					1	1				2	
	千枚岩									1	1	
	緑色千枚岩									1	1	
	緑色片岩									3	3	
変成岩	緑色岩									1	1	
	輝石									1	1	
	チャート				1				2	1	4	
	真岩					1					1	
	輝斜長岩	2								72	74	
	中粒砂岩	1								10	11	
堆積岩	片状砂岩									5	5	
	砂質石灰岩									1	1	
	石灰質砂岩									7	7	
	細粒砂質・泥岩									2	2	
	砂岩									1	1	
	泥岩									6	6	
化石等	礁塊石灰岩									4	5	
	貝化石									3	3	
	サンゴ化石									3	3	
	サンゴ石									16	16	
	古生代石灰岩									2	2	
	メノウ									1	1	
植物等	石英		1							3	3	
	方解石									1	1	
合計		1	4	1	1	1	1	1	1	152	166	

遺跡近隣で獲得できる石材

2-2 木製品

箸(8)と不明木製品の2点のみである。

2-3 金属製品

ジェラルミン製のスプーン(73)、舟釘(9)釘(129・130)、その他建材、米軍製の薬莢(142)、同爆弾片、その他米軍製の兵器を含む55点が得られているが、過半は(79・116)をはじめとする器種不明であった。

2-4 銭貨

5点が得られている。うち銭種が判る資料は3点確認されたが、いずれも新寛永であった(23・53・117)。

3 円盤状製品・その他磁器製品

円盤状製品 91点が得られている。素材には様々な種類が確認されており、青花磁器(143)、中国産珊瑚釉磁器(119)、日本産染付(118・144・145)、沖縄産施釉陶器(10・57)、沖縄産無釉陶器(54・55・58・120)、瓦(56・74)のほか、近代ガラスも確認された。

その他磁器製品 タイルと碍子の計10点が出土している。図の掲載は見送った。

4 炉壁・鉄滓

炉壁(11・59)は3点、鉄滓の2点が確認された。特に炉壁はいずれも溝の覆土から出土であることから、道跡付近ではなく集落に構築されていたものが廃棄されたためと考えられる。

5 煙管

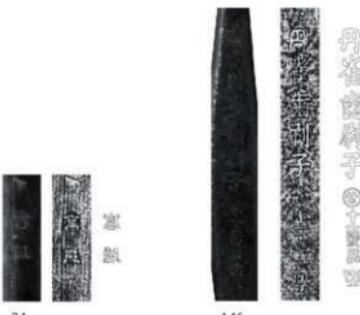
沖縄産無釉陶器製の瓶首の小破片と、同施釉陶器製の吸口(131)の計2点のみである。

6 歯ブラシ

6点が出土している。骨製(12)とプラスチック製(24・146)とが確認される。(24)には「高級」の銘が残る。(146)には「丹雀歯刷子(公)十一號品170」の銘から価格統制令以降(1939~1945年)の製品であることが分かる。

7 ガラス製品

99点が出土した。食器(ガラスボウル、コップ)(125)、皿(82)、調味料瓶(化学調味料瓶(81・89・124)、不明(90))、飲料瓶(ビール瓶)、化粧品(ボマード瓶(91)、化粧瓶(15・121)、化粧瓶蓋(16・123)、薬瓶(14)、薬瓶栓(17)、インク瓶(80)、独楽(13)、ガラス板、器種不明の多様な製品が確認された。



第75図 歯ブラシの在銘資料



第76図 ガラス瓶の在銘資料

エンボスの残る資料も多く確認された。(121)は桃とトンボで桃谷順天館、(124)は「味の素」、(81)は「0 AJINOMOTO 18」とともに味の素、(90)は「磯自慢」、(91)は「メヌマボマーク」、(14)は「大学病院品」で生産者不明、(89)は「味の鑑」、(15)は花椿で資生堂が1921年以降に生産したものである。

8 瓦・埴・レンガ・漆喰

大和系 (18)の1点のみが出土している。

明朝系 276点が出土している。そのうち丸瓦は27点あり、玉縁部(60)、筒部、端部(61・62・64)それぞれが確認される。平瓦は106点あり、端部片(63)が確認される。役瓦は部位不明1点のみが出土している。ほかは器種不明である。

埴 組み合わせ式の資料が1点のみ確認された(65)。

レンガ 1点のみ出土している。

漆喰 破片2点が出土している。

9 土器・石器

土器 24点が出土しており、胎土等から宇佐浜式もしくは仲原式に比定される。器形が窺えるのは口縁部片の2点のみで、(147)は壺形、(148)は深鉢形か。底部資料は出土しなかった。

石器 計7点が確認された。(113)はノッチドスクレイパーでチャート製、(114)は打製石斧で輝緑岩製、(140)は石核で石英製である。敲石類は4点みられ、(52)は輝緑岩製で敲打痕と磨面、(51)と(69)は細粒砂岩製で敲打痕が確認される。

第4節 収束

発掘調査の結果、鏡水原遺跡にはグスク時代初頭のピット群と、近世から近代にかけての溝状遺構が構築された場所であることが分かった。文献及び地図からは、少なくとも近代には鏡水村の耕作地であったことから、これに伴う遺構であると理解される。

さらにIV層からは縄文時代晚期の土器が複数出土し、この層が同時代の遺物包含層であることが判明した。これまで遺跡周辺にこの時代の遺跡は発見されていないことから、この成果を加味することで、鏡水地域は縄文時代から戦争遺跡までが確認される、人々が連絡と生活し続けてきた場所であることが分かる。

ただし、IV層自体は異所からの流れ込みによる堆積であることと調査によって判明しており、鏡水原遺跡の近隣に本体となる遺跡が埋蔵している可能性があり、注視する必要があるだろう。

参考文献一覧（第3・5章）

- 新垣力 2003「沖縄出土の清朝陶磁」『沖縄埋文紀要』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 大堀皓平 2013「沖縄の遺跡から出土する石製碗について—沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料より—」『南島考古』第32号、沖縄考古学会
- 加藤祐三 1985『奄美・沖縄 岩石・鉱物図鑑』新星出版
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 10周年記念』
- 桜井純也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座充・松原哲志 2007『沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心にして』『沖縄埋文研究』5
- 那覇市立壺屋焼物博物館（編）2015『Okinawa Blue & White 沖縄が愛した青と白』



SD1、SD1-1 出土遗物



SD1-2 出土遗物



SD1-3 出土遗物 (1)



SD1-3 出土遗物 (2)

图版4 出土遗物 (1)



SD2 出土遺物



SD4 ~ 7 出土遺物



SD10 出土遺物



SK1 出土遺物



SP5 出土遺物

SP29 出土遺物



SP27 出土遺物



SP27・SP28、SP28 出土遺物



SX2 出土遺物

図版 5 出土遺物 (2)



SX3 出土遺物 (1)



SX3 出土遺物 (2)



SX5 出土遺物



遺構外出土の近世・近代 出土遺物



IV層 出土遺物

図版 6 出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	かがんじばるいせき						
書名	鏡水原遺跡						
副書名	那覇空港自動車道(小禄道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第108集						
編著者名	大堀皓平、知念隆博、黒住耐二、丸山真史、バリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754						
発行年月日	2021年2月26日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				発掘原因
鏡水原遺跡	沖縄県 那覇市 小禄龍水(熱 上白斎院那 覇駐屯地内)	47201	—	26° 20' 84"	127° 65' 29"	20180813 ~ 20190108	391 m ²
鏡水原遺跡	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
鏡水原遺跡	生産遺跡	グスク時代 ~近代	ピット、溝、土坑	縄文時代:土器、石器 グスク時代:中国産陶磁器 近世・近代:中国・日本・沖縄産陶磁器、金属製品、石製品等			近世・近代の区画溝をはじめ、グスク時代、縄文時代の遺構や遺物を確認。
要約	那覇空港自動車道(小禄道路)建設に伴い、影響範囲に所在する埋蔵文化財の記録保存調査を行った。発掘調査の結果、近世・近代の方形の土地区画を示す溝が多数検出されたことをはじめ、溝に並行する道路や遺物を埋納したとみられる土坑などが検出された。特にSDIは近世と近代を区分することのできる良好な堆積状況を残している。 また、グスク時代のピットや遺物、縄文時代晚期ごろの遺物包含層が確認され、この場所における土地利用の変遷を窺うことのできる遺跡であることが確認された。						

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第108集

鏡水原遺跡

—那覇空港自動車道（小禄道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 令和3（2021）年2月26日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL：098-835-8752 FAX：098-835-8754

印刷 有限会社 サン印刷

〒901-1111

沖縄県島尻郡南風原町字兼城 577

TEL：098-889-3679 FAX：098-889-4282